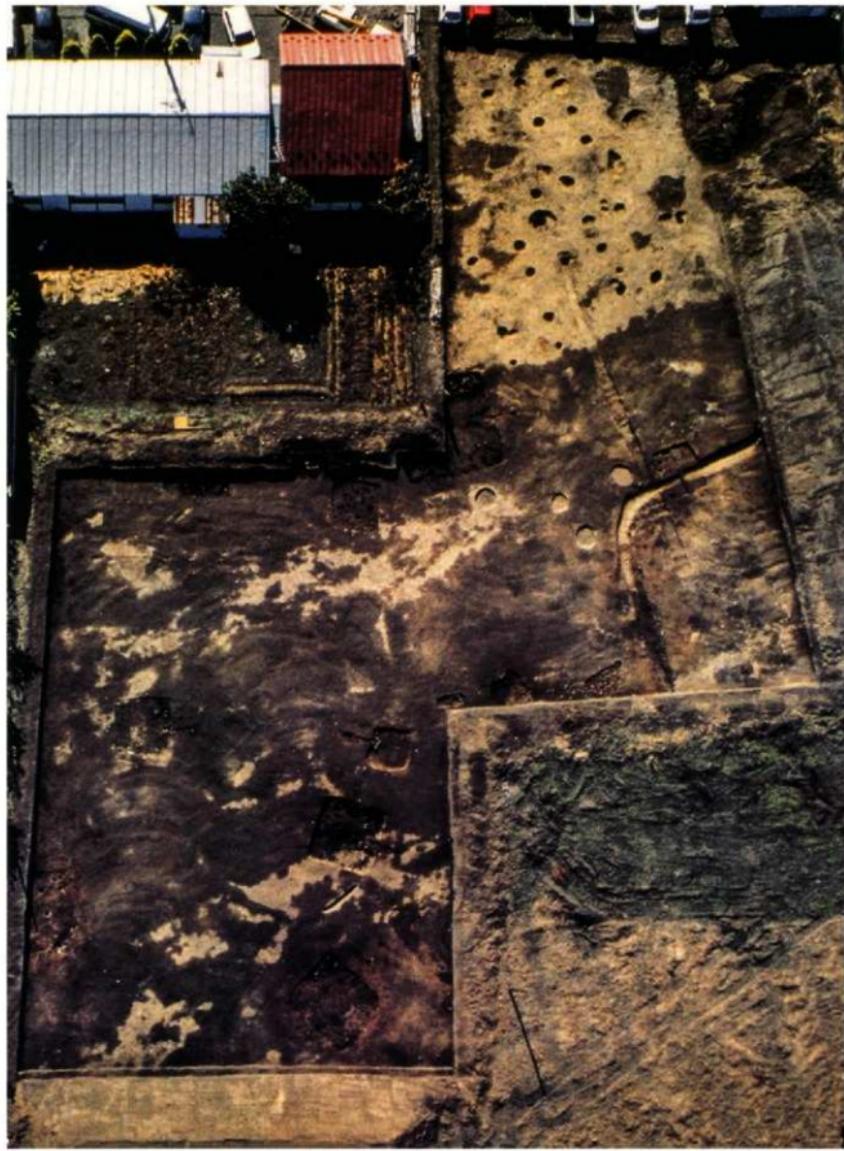


# 杉の堂遺跡群

—跡呂井二ツ壇地区の調査—

1997

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター



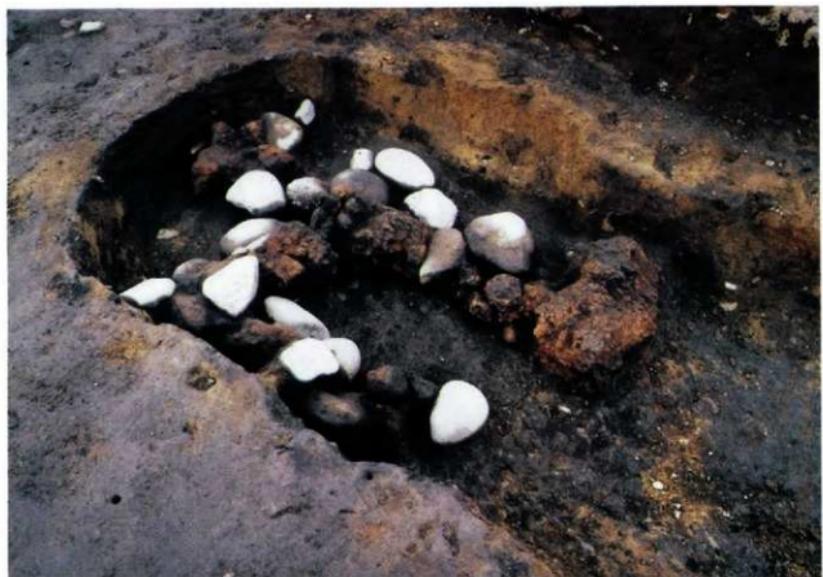
カラー図版1 調査区全景（上空・北から）



カラー図版2 積穴住居跡S I 102（北西より）



カラー図版3 積穴住居跡S I 201（東より）



カラー図版4 カマド状造構S X116（南東より）



カラー図版5 カマド状造構S X116（東より）



カラー図版6 カマド状造構S X109（南西より）



カラー図版7 カマド状造構S X109（西より）

## 序 文

杉の堂遺跡のある跡呂井・杉の堂地区は、近年宅地化が急激に進行している地域で、これに伴って最近では毎年のように発掘調査が行われております。本年度の発掘も宅地造成工事に伴う事前調査として実施されたものであります。水沢市埋蔵文化財調査センターの本年度の調査遺跡は、杉の堂遺跡、仙人西遺跡、東袖ノ目遺跡、林前Ⅰ遺跡、胆沢城跡の5遺跡であります。とくにも杉の堂遺跡では、奈良時代から平安時代までの埋蔵遺物が発掘され、当地区が古代胆沢の首長アテルイと何らかの関係をもった遺跡として、にわかに注目を集めてまいりました。いうまでもなく、同時代の遺跡が発見されたからといって、安易に類似地名と古代人名を結び付けるのは避けなければなりません。しかし、本書に記された奈良時代末期頃の焼失家屋の発見例の多さは、尋常でないこともあります。こういったこともありますて、この遺跡の発見の報は、すわ坂上田村麻呂の蝦夷遠征に伴う焼き討ち事件の資料か、として一部マスコミを通じて、全国に配信されました。反響は関西地方をはじめとして多く、逆に私どものほうはこの遺跡の重要性について再認識した次第であります。

今後とも、地道ではありますが、古代胆沢地方の歴史的解明に向けて考古学的な調査研究を続けていく所存であります。

この調査にあたり、工事主体の日高地所の埋蔵文化財保護に対する心からなるご理解により、調査期間等のご配慮をいただき十分な調査研究ができましたこと、さらに貴重な遺跡、埋蔵文化財を報告書としてまとめることができますことに深く感謝申し上げます。

本報告書が何らかのかたちで今後の調査研究に役立てればと存じております。さらに、多くの一般の方々にも活用され、一層の埋蔵文化に対する愛護とご理解をいただければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査にあたり多大なるご支援、ご協力をいただきました日高地所をはじめ工事関係の各社、調査研究にあたりご指導、ご助言をいただきました岩手県文化課、水沢市教育委員会、その他多くの関係機関の方々や地域の皆様に心からお礼申し上げます。

平成9年3月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター

所長 及川由己

## 例　　言

- 1、本書は、岩手県水沢市神明町二丁目61-2、66番に所在する杉の堂遺跡群-跡呂井二ツ塙地区-の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。
- 3、杉の堂遺跡群-跡呂井二ツ塙地区-の調査対象面積は2,000m<sup>2</sup>であり、うち調査実施面積は1,874m<sup>2</sup>である。
- 4、発掘調査期間は、現場作業が平成8年9月10日～平成8年10月30日、以後、平成9年3月31日まで室内整理作業を行った。
- 5、発掘調査は、伊藤博幸、千田政博が担当し、池田明朗がこれを助けた。
- 6、本書作成に際しては、遺構の実測、縮尺およびトレース等は千田サノ子、青木綾子、渡辺弘子、小野寺ふく子、高橋久美子、猪狩清美、多田和子が行い、遺構・遺物の写真撮影、土器の実測作業は千田政博が行い、一部を伊藤が行った。本書の執筆、編集は伊藤、千田政博が行い、佐々木千鶴子、高橋千晶がこれを助けた。
- 7、本書に掲載の遺跡周辺地形図は、水沢市都市計画図（縮尺2,500分の1）を原寸のまま使用し、スケールを付していない。
- 8、本書で使用する遺構表示略記号は、下記による。

S A : 柱穴（群）	S D : 溝	S I : 竪穴住居	S K : 土壌
S X : その他の遺構、不明遺構			
- 9、本書で使用した土層図の注記に関しては、小山正忠・竹原秀雄編・著『新版 標準土色帖（1995年後期版）』を参考にした。
- 10、石質の鑑定は、岩手県埋蔵文化財センター資料課長菊池強一氏の教示によった。
- 11、調査の実施に際しては、日高地所、熊谷庄吾、森岡 淳の各氏の協力を得た。記して謝意を表する。

# 目 次

序 文	
例 言	
I. 調査の概要	1
1. 周辺の地形	1
2. 調査の概要	2
II. 遺跡の位置と環境	5
III. 発見遺構と遺物	5
1. 西地区	5
豎穴住居跡 S I 101	6
豎穴住居跡 S I 102	6
土壙跡 S X117	10
土壙跡 S X110	11
溝跡 S D111	11
溝跡 S D112	12
カマド状遺構 S X116	15
その他の土壙群	16
2. 東地区	16
豎穴住居跡 S I 103	16
豎穴住居跡 S I 104	17
豎穴住居跡 S I 105	20
豎穴住居跡 S I 106	24
豎穴住居跡 S I 201	27
豎穴住居跡 S I 108	30
豎穴住居跡 S I 107	31
豎穴住居跡 S I 202	34
カマド状遺構 S X109	35
土壙跡 S K118	41
IV. ま と め	41

報告書抄録

## 図版目次

卷 頭 カラー図版 1 調査区全景	カラー図版 5 カマド状遺構 S X116
2 豊穴住居跡 S I 102	6 カマド状遺構 S X109
3 豊穴住居跡 S I 201	7 カマド状遺構 S X109
4 カマド状遺構 S X116	

図版 1 西地区発掘区全景 東地区発掘区全景

2 S I 101豎穴住居跡全景

3 S I 102豎穴住居跡炭化材検出状況 S I 102豎穴住居跡全景

- 4 S I 102竪穴住居跡カマド付近状況 S I 102竪穴住居跡茅材検出状況
- 5 S X117土壤跡検出状況 S X117土壤跡全景
- 6 S X110土壤跡疊検出状況 S X110土壤跡全景
- 7 S D111溝跡西壁埋土状況 S D111溝跡検出状況
- 8 S I 202竪穴住居跡全景 S D111溝跡・S D112溝跡全景
- 9 S X116カマド状遺構検出状況
- 10 S X116カマド状遺構完掘状況 S X116カマド状遺構全景
- 11 S I 103竪穴住居跡炭化材検出状況 S I 103竪穴住居跡全景
- 12 S I 104竪穴住居跡炭化材検出状況全景 S I 104竪穴住居跡全景
- 13 S I 104竪穴住居跡炭化材検出状況
- 14 S I 105竪穴住居跡炭化材検出状況全景 S I 105竪穴住居跡全景
- 15 S I 106竪穴住居跡全景 S I 106竪穴住居跡カマド全景
- 16 S I 106竪穴住居跡カマド立割り状況 S I 106竪穴住居跡遺物出土状況
- 17 S I 201竪穴住居跡炭化材検出状況全景 S I 201竪穴住居跡全景
- 18 S I 201竪穴住居跡カマド全景 S I 201竪穴住居跡南壁際炭化材
- 19 S I 201竪穴住居跡南壁際炭化壁板材 S I 201竪穴住居跡南壁際炭化垂木材と横材
- 20 S I 108竪穴住居跡遺物出土状況 S I 108竪穴住居跡全景
- 21 S X109カマド状遺構検出状況 S X109カマド状遺構東西立割り状況①
- 22 S X109カマド状遺構掘り下げ状況 S X109カマド状遺構全景
- 23 S X109カマド状遺構近景
- 24 S X109カマド状遺構完掘全景 S X109カマド状遺構立割り状況②
- 25 S K118土壤跡全景 S K118土壤跡埋土状況
- 26 S I 104竪穴住居跡出土土器一括 S I 105竪穴住居跡出土土器一括
- 27 S I 102・104・105竪穴住居跡出土遺物
- 28 S I 102・103・104・105竪穴住居跡出土遺物
- 29 S I 104・108・201竪穴住居跡・S X110土壤跡出土遺物
- 30 S I 104・105・106・108・201竪穴住居跡出土遺物
- 31 S I 105・106・107・202竪穴住居跡出土遺物
- 32 S I 202竪穴住居跡・S X109カマド状遺構出土遺物
- 33 S I 201竪穴住居跡・S X109カマド状遺構出土遺物
- 34 S I 102・107竪穴住居跡出土遺物

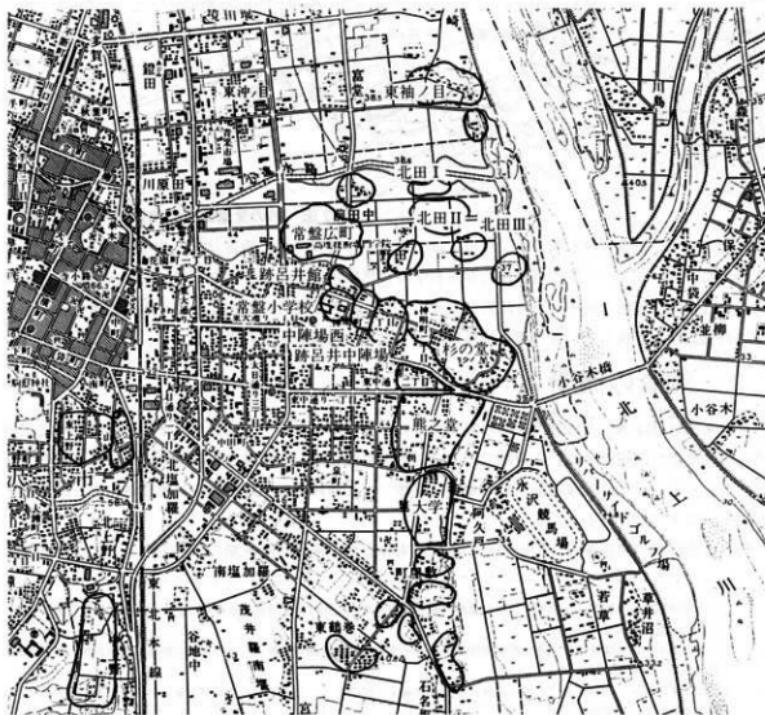
## I. 調査の概要

## 1. 周辺の地形

胆沢平野は、北西を胆沢川が、南西を衣川（北股川）が、東を北上川が限り、胆沢町若柳の市野々を扇頂部にして、東方に約20kmの半径をもって、北上川に及ぶ広大な胆沢川扇状地と、北上川の氾濫平野からなる。胆沢川扇状地は南の高位から北の低位へ順に、一首坂、胆沢、水沢の三段丘に分けられ、杉の堂遺跡群はこのうち低位面である水沢段丘上にある。

扇状地の北と東を占める水沢段丘は、さらに上位面に二分され、下位面はいわゆる谷底平野と呼ばれる胆沢川扇状地最下位の沖積面である。杉の堂遺跡群は水沢市街地の東方約2km、この水沢段丘上位面に立地することになる。遺跡のある地域の標高は41mある。遺跡の北側は段丘崖となり、その北方には水沢段丘下位面の谷底平野が展開する。上位面との比高差4~5m。水沢段丘の東方は北上川の浸蝕崖により限られる。

一方、下位面である谷底平野は東を北上川に開口し、その大きさは南北方向の幅が約1.3km、西に入った奥行きは約5kmある。標高は36~45mで、西に向かって漸次標高を高める。北上川との比高差



第1図 遺跡位置図 (1 : 25,000)



第2図 杉の堂遺跡周辺地形図（1:2,500）

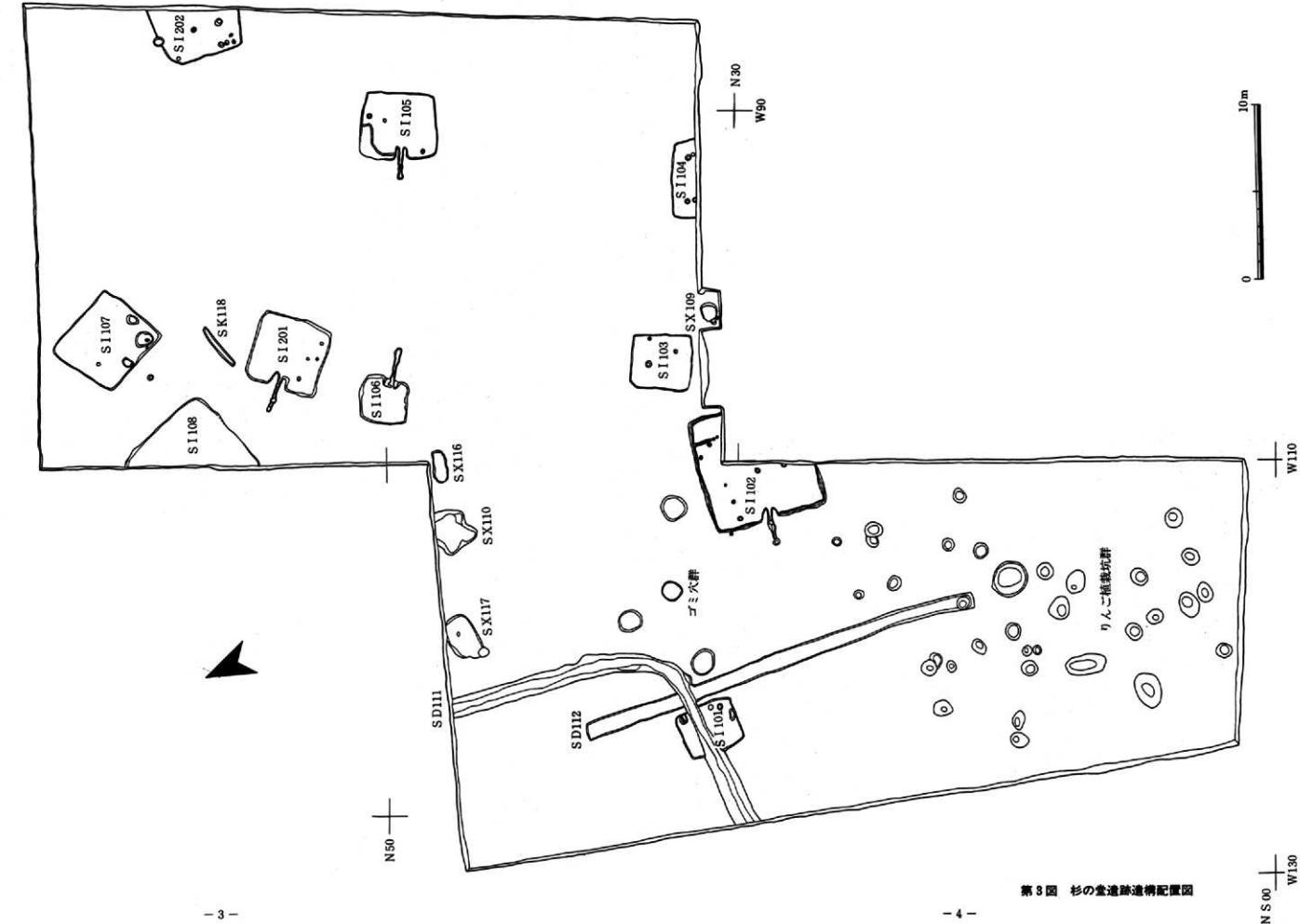
は約6mある。谷底平野を潤す主な河川には、北寄りに那須川が、南寄りに乙女川があり、ともに東流して北上川に注ぐ。一帯の遺跡は乙女川右岸の自然堤防にあることになるが、これらの二つの主要河川のほかに、伏流水の小河川も流れおり、このため谷底平野は湿田ないし半湿田地帯と、自然堤防等の微高地を形成している。微高地は現在も主として畑作利用されている。

## 2. 調査の概要

杉の堂遺跡群は水沢市佐倉河字杉の堂を中心に、神明町二丁目、東大通り二丁目、真城字熊之堂地内的一部分を含む広範囲にわたる遺跡である。このため便宜上、小地域ごとの遺跡については小名で区分けしている。段丘崖北縁辺部を杉の堂坂口遺跡<sup>1)</sup>、北西縁辺部を跡呂井二ツ塙遺跡<sup>2)</sup>として報告しているのはその例である。

杉の堂遺跡群の発掘調査は、1959年の段丘崖東縁辺部の縄文時代晚期の調査を嚆矢とし、1995年ま

- 1) 伊藤博幸・佐久間賢・土沼彰一「水沢遺跡群範囲確認調査—昭和61年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第16集（水沢市教育委員会、1987年）
- 2) 伊藤博幸・佐久間賢「水沢遺跡群範囲確認調査—平成元年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第21集（水沢市教育委員会、1990年）
- 3) 佐々木千鶴子・高橋千晶「杉の堂遺跡」水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第7集（財團法人水沢市埋蔵文化財調査センター、1996年）
- 4) 前出3) 文献。



第3図 杉の塗遺跡遺構配置図

でに11次にわたる調査<sup>3)</sup>が実施されている。その結果、段丘崖東縁辺部は縄文時代晚期の遺跡が主体的に分布することが明らかになり、さらに南縁辺部と北縁辺部には、奈良時代後半から平安時代にわたる集落跡がいくつかの地点を異にして分布していることが判明してきている。

今回の発掘調査は、段丘崖北西縁辺部の跡呂井二ツ壇地区、1995年度調査地点<sup>4)</sup>の直ぐ西側にあたるところで実施した。現状は雑種地、畠地である。発掘調査に際しての基準線は1995年度調査基準線に準拠し、方位は磁北を基準とした。磁北に対する南北の基準線はN25°13' E偏する。

## II. 遺跡の位置と環境

杉の堂遺跡群は水沢市東郊、水沢段丘上位面にある。遺跡の西には、中世前期の掘立柱建物群からなる跡呂井中陣場遺跡<sup>5)</sup>、平安時代集落跡の跡呂井中陣場西遺跡<sup>6)</sup>、奈良時代集落跡と一部重複する中世館跡の跡呂井館跡<sup>7)</sup>、奈良時代集落跡常盤小学校遺跡<sup>8)</sup>などが連なり、跡呂井遺跡群を構成している。また、南には奈良時代から平安時代にかけての大規模集落跡熊之堂遺跡<sup>9)</sup>が接してある。

下位面の谷底平野内では、当遺跡の北側に北田II遺跡<sup>10)</sup>があり、大洞C2式土器を含む縄文時代晚期、弥生時代後期、平安時代と3層にわたる遺物包含層が検出されている。さらにその北側には、縄文時代後半を中心とする大量の土器を出土した東袖ノ目遺跡<sup>11)</sup>がある。北田II遺跡の西方には、低湿地を代表する常盤広町遺跡<sup>12)</sup>がある。弥生時代から一部中世初期まで続く生産遺跡であるが、水田跡では弥生時代と古代末期のものが発見されている。

このように杉の堂遺跡群は、水沢市東郊にあって主たる遺跡の一群を構成する。

なお、谷底平野の北縁辺部は、水沢段丘上位面の南崖縁部となり、中世居館跡が多く分布する特徴がある<sup>13)</sup>。

## III. 発見遺構と遺物

発掘調査は宅地造成工事区域に発掘区を設定して実施した。記述の都合上、発掘区西側を西地区、東側を東地区と称する(第3図)。東西両地区から発見した遺構には、竪穴住居跡10棟、土壙跡3基、溝跡2条、屋外カマド2基、その他後世の土壙群多数がある。

### 1. 西地区

西地区は東地区に対してわずかに高く、比高差20~35cmある。また発掘区全体の基盤土は、黄褐色

5) 伊藤博幸・佐久間賢外『水沢市神明町跡呂井中陣場遺跡現地説明会資料』(水沢市教育委員会、1979年)。なお、前出2) 文献に発見遺構の概要が掲載されている。

6) 前出2) 文献。

7) 前出2) 文献。池田明朗・高橋千晶・佐々木千鶴子『水沢遺跡群範囲確認調査-平成6年度発掘調査概報-』水沢市文化財報告書第29集(水沢市教育委員会、1995年)。

8) 伊藤博幸・高橋千晶『常盤小学校遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第4集(財團法人水沢市埋蔵文化財調査センター、1995年)。

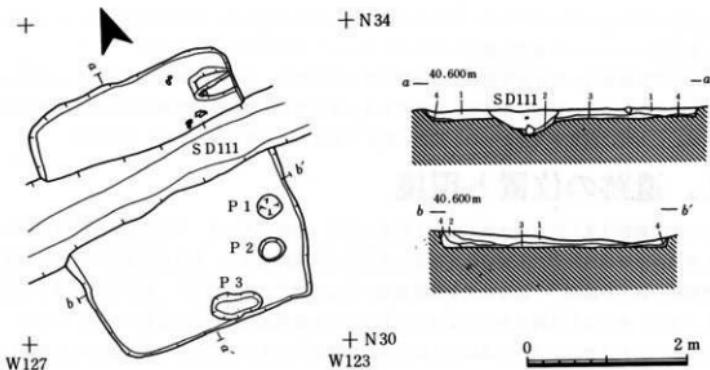
9) 前出7) 文献。

10) 千葉周秋・鈴木明美『市道前村・杉の堂線改良工事路線内埋蔵文化財発掘調査報告書』(水沢市・水沢市教育委員会、1984年)。

11) 1996年、水沢市埋蔵文化財調査センター発掘調査。

12) 伊東信雄「岩手県佐倉河村発見の彌生式遺跡」(『古代學』第3巻第2号、1954年)、伊藤博幸「岩手県水沢市常盤広町遺跡」(『日本考古学年報』(1989年度版)241、1990年)、伊藤博幸・高橋千晶・佐々木千鶴子『常盤広町遺跡-東部地区的発掘調査-』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第2集(財團法人水沢市埋蔵文化財調査センター、1995年)。

13) 伊藤博幸・池田明朗『水沢市佐倉河仙人西遺跡現地説明会資料』(水沢市埋蔵文化財調査センター、1995年)。



第4図 S I 101 竪穴住居跡

シルト層であるが、西地区においては南半部が扇状地扇端部特有の砂礫層の露出が見られ、シルト層との境は極めて明瞭である。南半部には古代の遺構は見られない。

発掘調査で発見した遺構には、竪穴住居跡2棟、土壙跡2基、溝跡2条、屋外カマド1基、その他後世の土壙群多数がある（第3図）。以下、主な遺構と遺物について記述する。

#### 竪穴住居跡S I 101（第4図 図版2）

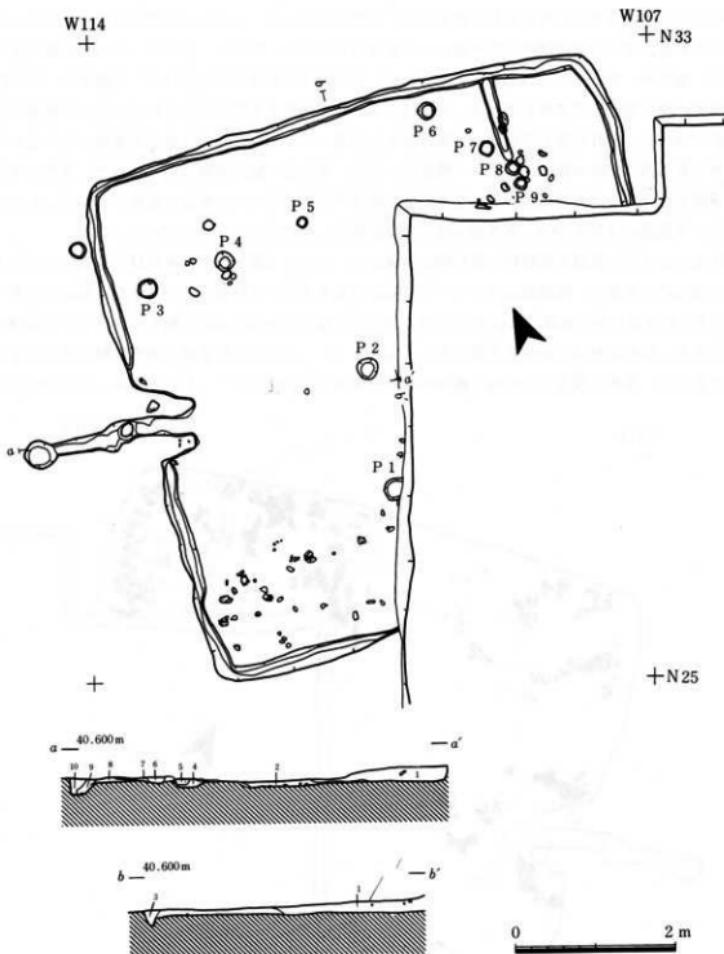
**遺構** 竪穴住居跡S I 101は、発掘区中ほど西寄りのところから溝跡SD 111と重複して発見された。重複関係は、溝跡が当住居跡床面を破壊することから溝跡が新しい。平面形は南北方向にやや長い長方形で、主軸は東壁で北で $0^{\circ} 13'$  東に偏し、ほぼ磁北方位に一致する。規模は東西270~280cm、南北335cm、壁高13~20cmある。壁の掘削は比較的ていねいで、わずかに外傾して立ち上がる。埋土は壁際の2~4層を除くと、基本的に1層と3層からなる。1層は埋土上層を占める淡黒褐色土層で固くしまる。下層の3層は濃い黒褐色土層で、土質は固い。2層は1層と3層の間層として一部にみられる暗褐色土層で、明黄褐色土の地山崩壊土を多く含む。4層は暗褐色土と黄褐色土の混合土層である。

床面はほぼ平坦だが、周溝や貼床、叩き占めなどはみられない。カマドは東壁北寄りに付設されるが、南側の右袖はのちに掘削される溝跡SD 111によって床面の一部とともに破壊され、不明である。また煙道も削平のため不明。北側のカマド左袖はシルトで構築され、長さ50cm、幅30~40cmの範囲で遺存している。火床の遺存状態は不良である。床面南東隅寄りに小柱穴P1~P3がある。いずれも径30cm、深さ10cm前後と浅く、埋土は軟質の暗褐色土の単層。うち小柱穴P3は2期に重複し、新しい掘り方の埋土は濃い黒褐色土単層である。

**遺物** 出土した遺物には非ロクロ使用の土師器坏片、斐片があるが、図示できるものはない。

#### 竪穴住居跡S I 102（第5・6図 図版3・4）

**遺構** 竪穴住居跡S I 102は、発掘区中央東端から一部東地区にまたがるかたちで発見された焼失家屋である。東と南壁の大半が発掘区外に延びる。平面形は東西670cm、南北650cmの方形で、主



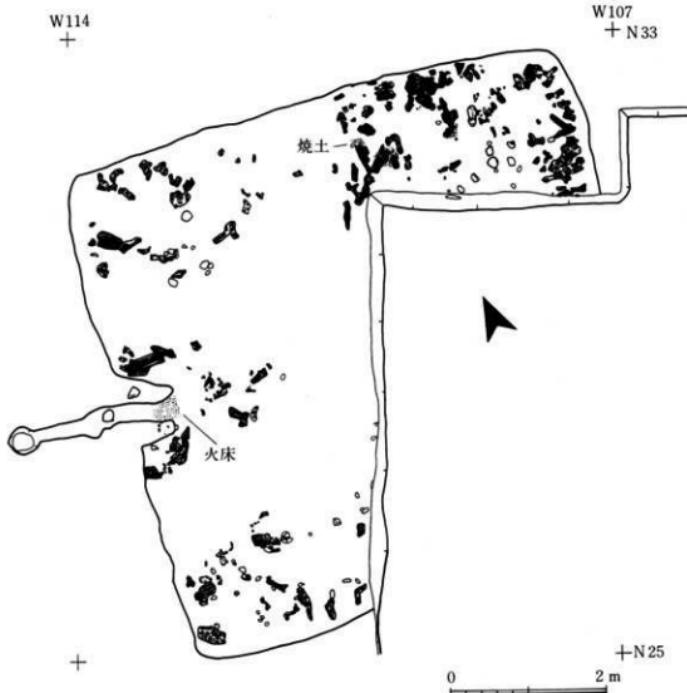
第5図 SI 102竪穴住居跡 (1)

軸は西壁で北で  $8^{\circ} 13'$  東に偏する。壁高は削平のため  $9 \sim 17$  cmと比較的浅いが、南壁際では  $20 \sim 25$  cmとわずかに深くなる。壁の掘削はていねいでほぼ垂直ぎみに立ち上がる。住居埋土は1層の濃い黒褐色土層と、2層の淡黒褐色土層からなり、土質はともに粗く粘性のない軟質土。1層は住居中央部に、2層は壁寄りを中心に堆積している。2層下部には炭化材が大量に混じる。

床面は平坦で、貼床、叩き占めなどはみられないが、四周壁の下に幅20cm、深さ10cm前後の溝がカマド部分を除いてめぐらされている。いわゆる周溝の埋土は2層に近い黒褐色土だが、土質はやや密

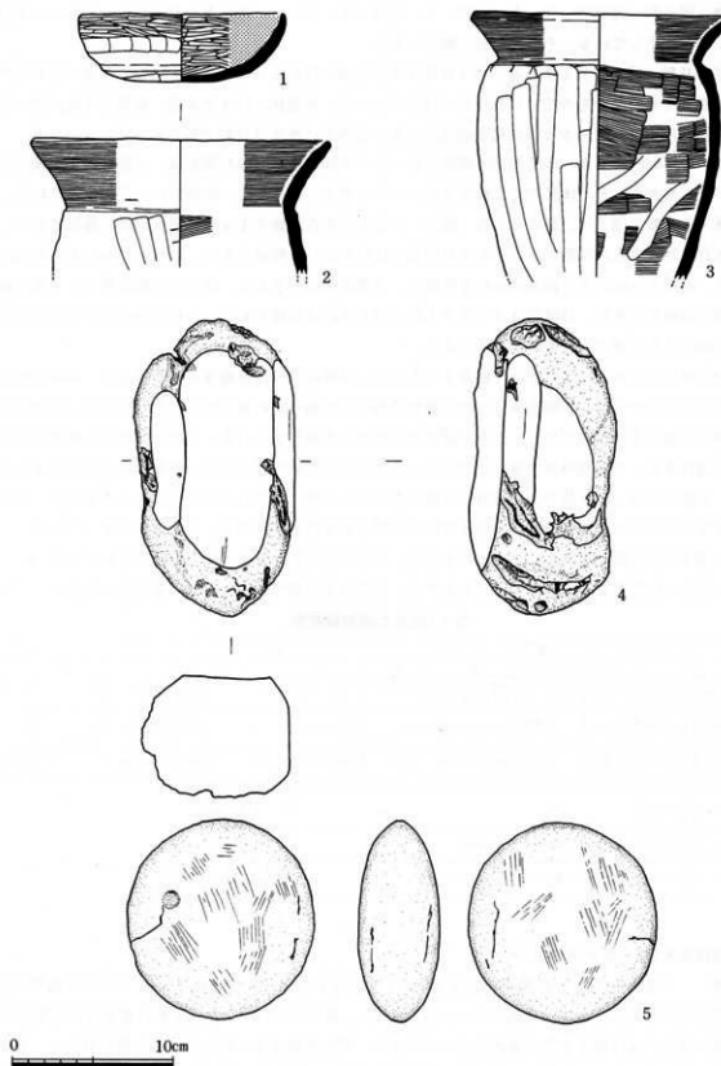
で固い。下端の方に明黄褐色土が混じる。また北壁東寄りには長さ115cm、幅15cm、深さ6~13cmの間仕切り溝が北端を住居壁に接して南北方向に掘削されている。カマドは西壁中央部に付設されるが、左右の袖部の遺存状態は削平のため悪い。左袖は現存長50cm、幅35cm、高さ5~7cm、右袖は現存長70cm、幅35cm、高さ4~5cmある。左袖はシルトを素材に土師器や石を芯材にして構築し、その際、土師器は甕を倒立して使用している。右袖はシルトに黒褐色土を混ぜて作られている。燃焼部の現存幅約20cmだが、遺存状態も不良で、火床はほとんど残っていない。煙道は燃焼部奥壁の立ち上がりから真っ直ぐ西に170cm延び、径35cmの煙出しに至る。煙出しの壁の掘削はていねいで、深さ20cmある。燃焼部奥壁とそこから西に25cm至った煙道部の始まり付近の壁のみ赤褐色に変色している。またこの付近の煙道部には長さ30cm、深さ10cmほどの疑似煙出し状の小坑が穿たれている。

床面には住居の組材や屋根材の炭化物が大量に残っていた(第6図)。炭化材の分布は住居中央付近では極めて稀薄で、四周壁に沿って一定の幅に分布するという特徴がある。また小屋組の垂木と推定できる炭化部材が住居壁に直交するかたち、すなわち住居中央部に方向を揃えて倒れている状態がうかがえる。屋根部材はいわゆる茅系である(図版4下)。ことに当住居跡の屋根部材の遺存状況は良好であった。垂木の現存長150cm、幅10cmある。床面には小柱穴P1~P9がある。その分布は北半



第6図 S I 102号穴住居跡(2)

に集まるが、規模は径20cmと25cm前後のものに分かれ、深さも10cm未満とそれ以上とに分かれる。こ



第7図 S-1102竪穴住居跡出土遺物

のうち小柱穴P4とP8は深さ33cm、41cmともっとも深く主柱穴の可能性がある。埋土はほとんどが軟質で、色調は淡黒褐色と濃い黒褐色土とがある。

**遺物** (第7図 図版28-3・4、同27-1、同34-1・2) 床面直上およびカマド袖から土師器坏、甕が出土している。その他砥石、磨石がある。

**坏** 坏A II類(図1)が1点ある。坏A II類は体部外面に段あるいは稜線をもつが、内面には対応する段、稜線をもたないもので、口径が12cm以上のもので、本遺跡には4点ある。底部は平底に近い丸底を呈し、内面はヘラミガキ後黒褐色処理される。全体的に焼成は良好である。

1は口縁部が内湾する。体部外面は横位方向へラケズリによる面取り調整後、口縁部直下が横位方向にヘラミガキされる。体部内面は横位方向のヘラミガキ、見込部は一定方向にヘラミガキされる。

**甕** 甕A I a類(図2)、甕A II a類(図3)が各1点ある。甕A I a類は最大径が口縁部にあり、外傾または外反する口縁部がヨコナデされ頸部には段あるいは稜線をもつ。口径が18cm以上、器高30cm以上、底径9.0cm以上を測るいわゆる長甕で、本遺跡には6点ある。甕A II a類は甕A I a類同様最大径が口縁部にあり、口縁部はヨコナデされ、段あるいは稜線をもつ。口径が18cm以下で器高は30cm~15cmの中型の甕で、本遺跡には3点ある。

2は口縁部から体部上半にかけて残存するもので、口縁部はほぼ直線ぎみに外傾する。体部外面は縱位方向にヘラケズリ、体部内面はハケメ調整であるが磨滅のため単位がはっきりしない。口縁部下半、体部に巻き上げ痕跡を残す。また口縁部内外共に黒斑が見られる。3は口縁部から体部下半にかけて残存する。口縁部外面上端にナデによってつくり出された段をもち、口唇部が上方につまみ出され、頸部にも強い段を持つ。体部外面は縦位方向にヘラケズリされ上半はやや丸みを帯びる。体部内面は横位方向にハケメ調整後、一部小口による搔き取りの痕跡が残る。良く焼き締まっている。

**砥石**(図4)住居跡北東隅から出土したもので、石質は安山岩である。4面が使用されている。

**磨石**(図5)住居跡北西隅から出土したもので、石質は安山岩である。両面に使用痕がある。

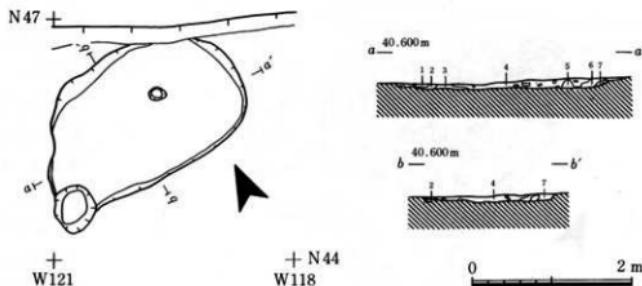
S 1102出土遺物観察表

No.	種 別	出土地点	分類	法 量			調 整		地 質	色 調	燒 成	備 考	写真図版
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面					
1	土師器 坏	床 直	同	12.7	5.0	4.2	口縁部一側に1号ヘラケズリ、内面にヘラケズリ	ヘラケズリ、黒褐色	微粒砂	BYR5/1	良 好		27-1
2	土師器 甕	カマド袖内 A.1.1	同	18.4	—	残存 18.3	口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ	細粒砂	BYR6/1	良 好		28-3
3	土師器 甕	床 直	同	16.0	—	残存 16.5	口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ	細粒砂	BYR5/4	良 好		28-4

No.	種 別	出土地点	特 徴			石 質	写真図版
			最 大	最 小	中 幀		
4	砥 石	床 直	最大長18.4cm	最大厚 7.5cm	4面使用	安 山 岩	34-1
5	磨 石	床 直	最大長12.5cm	最大厚 5.0cm	両面に使用痕有り	安 山 岩	34-2

土壤跡S X 117 (第8図 図版5)

**遺構** 土壤跡S X 117は、発掘区北端中央から発見された小窓穴状遺構である。平面形は西壁が重む不整長方形を呈し、規模は東西275cm、南北165cm、深さ5~12cmある。主軸は東西南北方向で北で79°43' 東に偏し、ほぼ磁北方位の東西方向に一致する。壁は外傾する。埋土は1~7層に分かれ、総体的に疊が多く混じるが、主体は4層の濃い黒褐色土層で、土質はやや密で堅い。1・2層は壁際にわずかにみられる里褐色土系の層で、2層には明黄褐色土ブロックが若干混じる。3層は暗褐色土で明黄褐色土ブロックの混じりが多くなる。5層は1・2層の黒褐色土系の層だが、微量の明黄褐色土ブ



第8図 S X117土壤跡

ロックがみられる。6・7層も壁際にみられる層で、前者は暗褐色土に微量の明黄褐色土ブロックが、後者はやや明るい黒褐色土層に若干の明黄褐色土ブロックが混じる。

底面は比較的平らに近いが、挙大の偏平礫多数が底面上に散在している。底面中央東寄りに径20cm前後的小柱穴が1個あるが、これは土壤埋土上面から掘り込まれたものである。また、南北壁を基50cm、深さ10cmほどの小土壤が破壊して掘られている。

**遺物** 図示はできないが、出土遺物には非ロクロ成形の土師器裏片がある。

#### 土壤跡S X110（第9図 図版6）

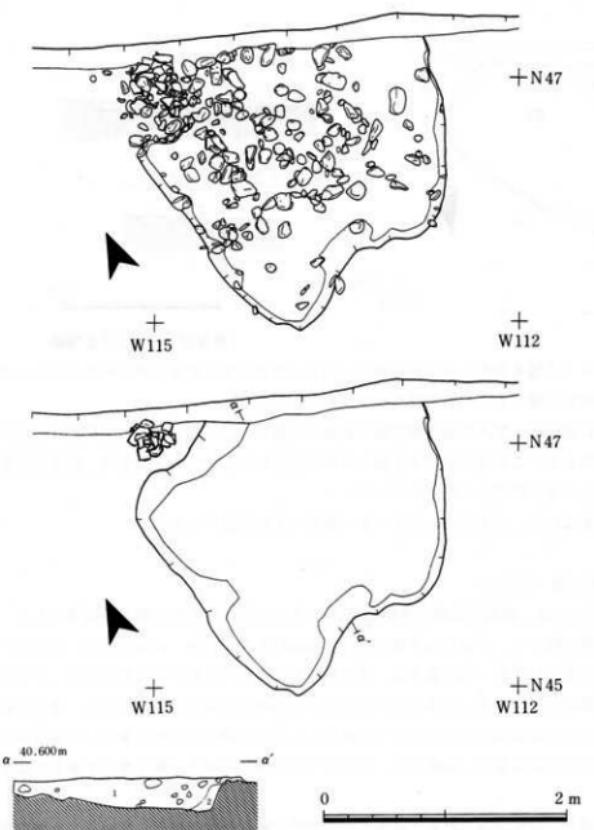
**遺構** 土壤跡S X110は、発掘区北端土壤跡S X117の東側から発見された礫溜り遺構である。北東壁の一部は発掘区外に延びる。平面形は不整形で、規模は東西250cm、南北200cm、深さ15~25cmある。方位は西壁で北で14°47'西に偏する。壁は外傾し比較的ていねいに掘削される。埋土は2層に分かれるが、主体は1層である。全体に10~20cmていどの礫が大量に混入しており、礫には被熱で赤色に変色しているものが数個みられる。埋土1層はシルト質の濃い黒褐色土層で、土質は密でやや固い。2層は壁際にみられる層で、暗褐色土、土質は1層と同じである。礫は埋土下部までは及ばない。

底面は基底礫層に達し、起伏がみられる。底面から土師器の破片が数点出土している。土壤の北西壁際外の地山上から押圧で潰された状態で土師器丸甕が1個体分出土した（図版6下）。状況から本来完形の甕が地山上に正立して置かれたものと判断できた。

**遺物**（第11図 図版29~3） 非ロクロ使用の土師器裏片が出土しているものの図示できるものはないが、遺構の上端直際地山より土師器甕が出土している。

**甕B類**が壁際外の地山上より正立したまま押しつぶされた状態で出土している。甕B類は体部中央や上に最大径をもつ丸甕で、本遺跡から1点出土している。口縁部はやや強めに外反し、頭部に段をもつ。体部外面はヘラケズリ後、上半は斜位方向に下半は横位方向にヘラミガキされる。体部内面は横位方向にハケメ調整される。細粒砂質で焼きが非常に良い。体部外面上半に同間隔に4ヵ所、体部下半に2ヵ所と底部に黒斑が見られる。口径22.8cm、底径9.6cm、器高30.6cm、最大径32.1cmである。

#### 溝跡S D111（第10図 図版7・8）



第9図 S X 110土壤跡

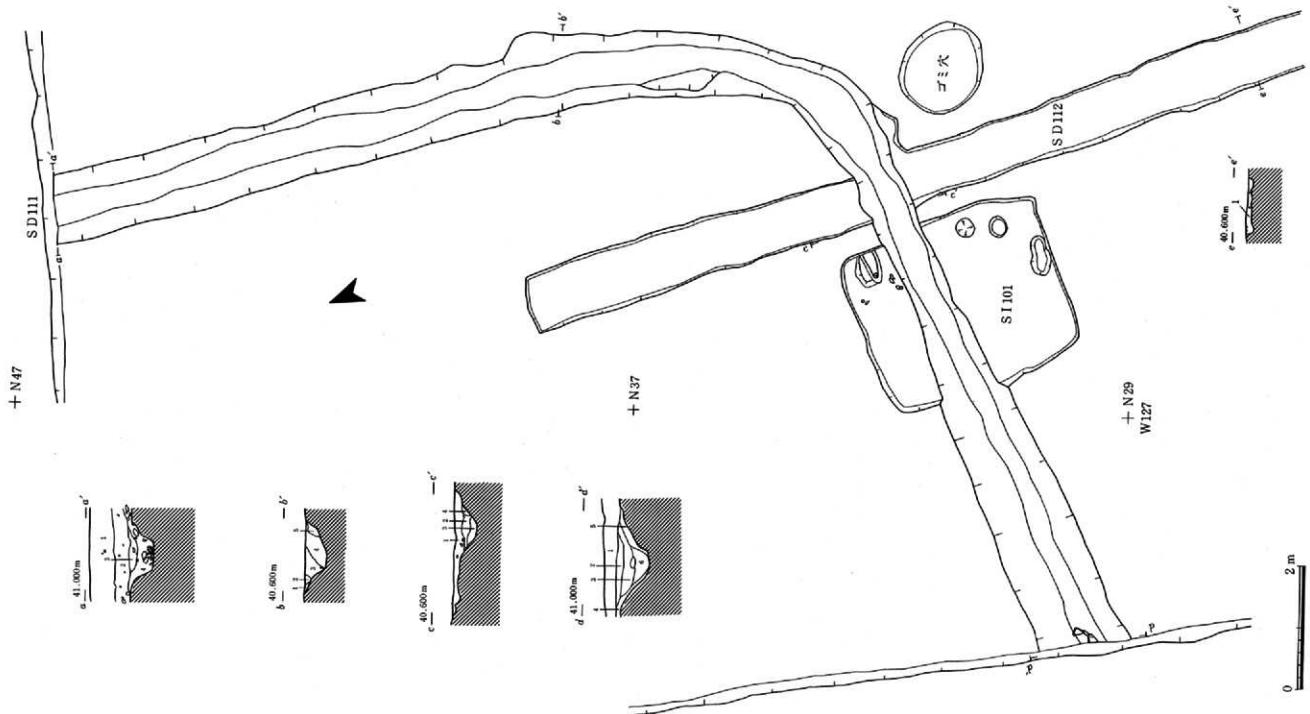
薬研堀状を呈する。溝底のレベルは北側が2~3cm深い程度でそれほど差はない。溝埋土は2~3層に大別される。西端では2・3・6層が溝の堆積層で、両岸に4・5層が薄く堆積している。1層は耕作土。2層は厚さ10cm前後の軟質ぎみのやや濃い黒褐色土で土質はやや密。3層は厚さ約20cmで焼土、炭化物小ブロックがやや多く混じる黒褐色土層で、土質等は2層と同じ。6層は厚さ約25cmの濃い黒褐色土層で、土質は密で固い。4・5層は淡黒褐色土層で、地山崩壊土の黄褐色土小ブロックが混じる。

**遺物** 琉球中から土師器の細片が数点出土している。

#### 溝跡SD112（第10図 図版8）

**遺構** 溝跡SD112は、発掘区中央付近から溝跡SD111と重複して発見された素掘溝である。重複関係は溝跡SD112の方が新しい。発見段階では遺跡に関する遺構として扱ったが、溝底からバ

遺構 溝跡S D 111は、発掘区北西寄りから竪穴住居跡S I 101、溝跡S D 112と重複して発見された素掘溝である。重複関係は、住居跡より新しく、溝跡S D 112より古い。溝北端と西端は発掘区外に延びる。北から南北方向に延びた溝は、12m余り至ったところで西に折れ東西方に向向きを変えて延びる。主軸方位は南北方向西岸で北で9°00' 東に偏する。規模は幅が上端で110~140cm、下端で40~70cm、深さ40~50cmある。溝の掘削は溝底、両岸ともていねいに行われ、平らな底から外傾して上端に至り、断面箱



第10図 SD111溝跡・SD112溝跡

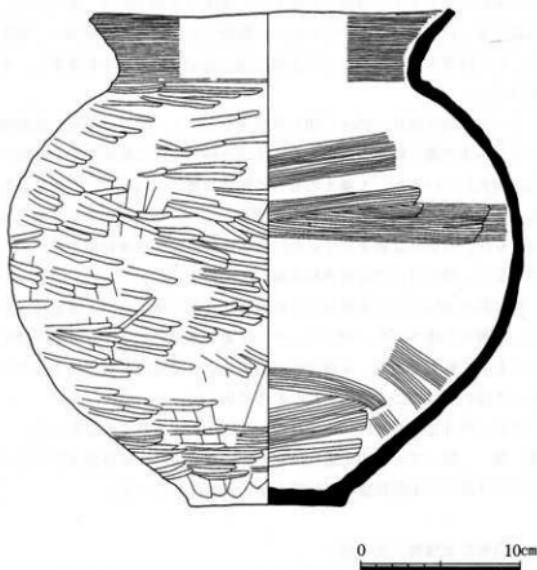
ツクホーの爪痕が検出されるに及んで、直接関係しないことが判明した。ほぼ南北方向に延びる溝で、全長約23m、幅80~100cm、深さ10~12cmある。埋土は暗褐色土単層で黄褐色土小ブロックが多量に入る。

**遺物** 埋土中から土師器の破片が数点出土している。

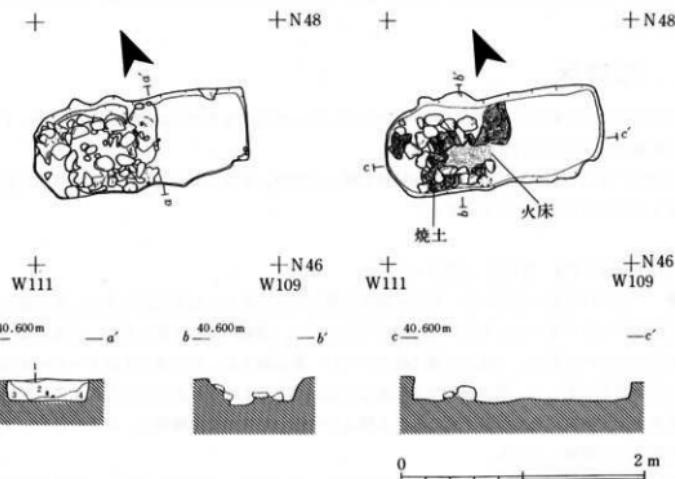
#### カマド状造構 S X

116 (第12図 図版9・10)

**遺構** カマド状造構 S X 116は、発掘区北東端土壤跡 S X 110のすぐ東側から発見された。平面形は長方形



第11図 S X 110土壤跡出土遺物



第12図 S X 116カマド状造構

で、東西辺がわずかに外側に湾曲する。規模は東西180cm、南北75cm、主軸は北壁で北で73° 47' 西に偏する。壁はほぼ垂直でていねいに掘削され、壁高は西壁18cm、東壁で15cmある。床面も平坦である。境内は東から80cmのところを境に西にカマド施設本体を構築し、東は素掘りのままで加工した痕跡はない。

カマド施設は径10~15cmの礫を平坦面を上に1~2段に積んだ基礎構造とし、その上面や壁面をスサ入り粘土で覆う構築方法である。焼けた粘土壁は赤褐色で非常に固い。また礫も被熱ですべて赤褐色に変色しているが、土壤そのものの側壁は焼けていない。この施設内に長軸に沿ってやや南寄りに幅17cm、奥行き50cmの逆コ字形の空間をつくり、燃焼部とする。焚口は煉瓦状のスサ入り粘土壁で築かれるが、左側壁は喪失していた。火床は地山面を直接利用するものだが、それほど固くは赤色化していない。焚口付近には炭化材小塊が散乱していた。

焚口部の外側に当たる東半分は灰溜まりとして機能したと推定できた。埋土は1~4層に分かれるが、2層が主体である。マトリックスは濃い黒褐色土でこれに炭化物や焼土小ブロック、灰などが混じるもので軟質である。4層は軟質暗褐色土、3層は軟質黒褐色土とともに黄褐色土ブロックが混じる。当面の灰はここで溜められたものであろう。

なお、天井部の有無については検出状況からは判断できなかった。

**遺物** 図示できる出土遺物はないが、埋土より土師器表裏部の小片が1点、またカマド壁中からもロクロ成形の土師器甕の口縁部片が1点出土している。

#### その他の土壤群（第3図）

西地区から40個弱の円形土壤が発見されている。とくに南半部の砂礫層ではリンゴの植栽にともなう径50~200cmの坑が多く掘削されている。また、発掘区中央北寄りの溝跡S D 111の南東際には径140~150cmの坑4個が掘られている。これはリンゴの栽培にかかる薬剤貯蔵用の穴とゴミ捨て穴の2種がある。すべて昭和時代のものである。いくつかの土壤内埋土中から土師器、須恵器の破片が出土している。

## 2. 東地区

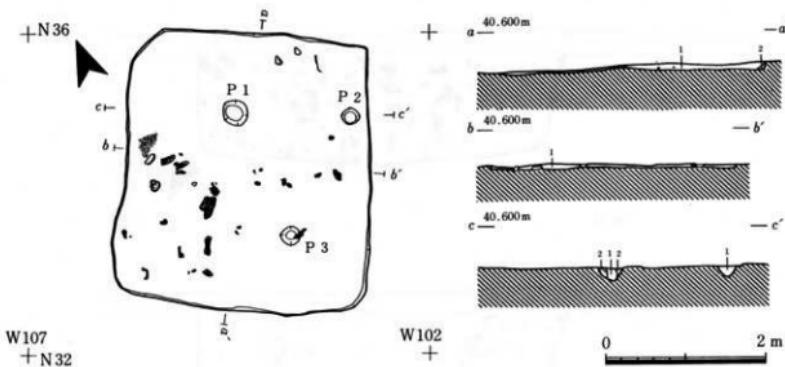
東地区は西地区に対してわずかに低く傾斜している。地山は基本的に黄褐色シルト層で、1、2カ所に砂礫層の露出がみられる程度である。

発掘調査で発見した遺構には、竪穴住居跡8棟、土壤跡、屋外カマド各1基がある（第3図）。以下、主な遺構と遺物について記述する。

#### 竪穴住居跡S I 103（第13図 図版11）

**遺構** 竪穴住居跡S I 103は、発掘区南西壁際から発見された焼失家屋である。すぐ南西側には西地区竪穴住居跡S I 102がある。全体的に削平に遭い、遺構の遺存状態が悪い。平面形は東西310cm、南北345cmの矩形で、主軸は東壁で北で25° 13' 東に偏する。壁の遺存高は1~9cmあるが、とくに北壁の削平が著しい。壁の掘削は比較的ていねいで、立上がりはわずかに外傾する。住居埋土は濃い黒褐色土で明黄褐色土が若干混じる。土質はやや粗い粘性のない硬質土。壁際には地山崩壊土である暗褐色土が堆積している。

床面は比較的平坦で、黄褐色土を叩き占めている。床直上は礫が露出している。周溝はみられない。カマドや壁外に煙道跡は検出できなかったが、西壁際中央やや北寄りに東西16cm×南北27cmの範囲で



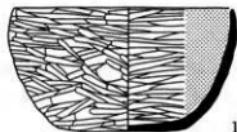
第13図 S I 103竪穴住居跡

床面が赤褐色に焼けた焼土の広がりがあり、この付近にカマドがあった可能性がある。

床面には住居部材の炭化物が残っていた。大きいもので長さ30cm、幅10cmだが、ほとんどは小さな炭化材で垂木類のものであろう。分布は南半に偏る。床面には径20cm~30cmの小柱穴P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>がある。このうち小柱穴P<sub>1</sub>が最も大きく深さ17cm、埋土は中央に濃い黒褐色土が、その両側に淡黒褐色土が入るもので、土質はともにやや密で硬質。小柱穴P<sub>2</sub>は東壁際北寄りにある最小の柱穴で深さ12cm、埋土は上層に淡黒褐色土、下層にややくすんだ黒褐色土が堆積する。ともに明黄褐色土小ブロックがわずかに混じり、土質もやや密で硬質。小柱穴P<sub>3</sub>は南側にあり、径約25cm、深さ6cmと浅く、埋土もややくすんだ黒褐色土の単層である。土質は軟質。

**遺物**（第14図 図版28-1） 出土遺物には土師器鉢がある。また図示できなかったもの他に非クロ成形の土師器片、甕片がある。

**鉢** 鉢A II類が1点ある。鉢A II類は非クロ成形の鉢で口径が15cm以下のもので本遺跡から1点出土している。1はやや内湾ぎみに立上り、そのまま口縁部に至る。内外面共に段、稜線、沈線等は見られず、底部は平底を呈し、体部外面は横位方向にヘラケズリ後、同方向にヘラミガキされる。体部内面は横位方向にヘラミガキされ、見込み部は一定方向にヘラミガキされる。全体的に内外面共にヘラミガキが非常に密である。良く焼き締まっている。



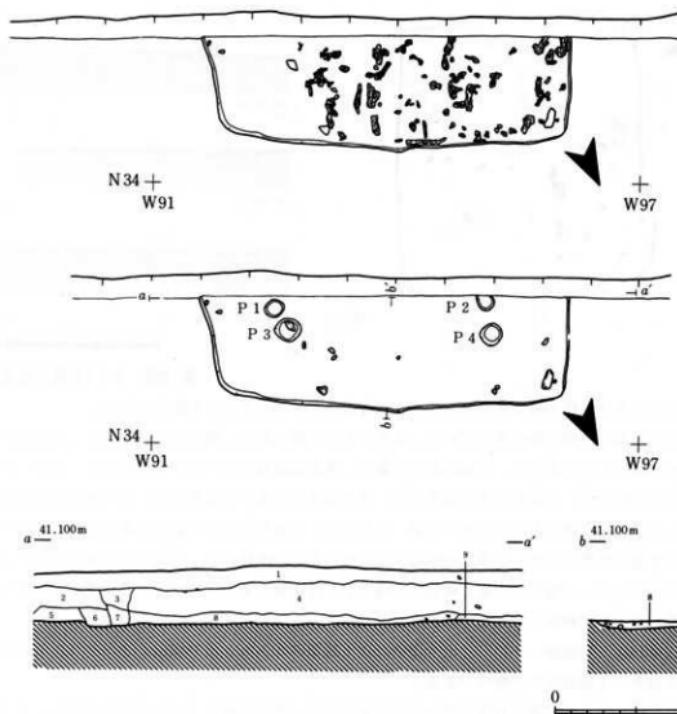
竪穴住居跡S I 104（第15図 図版12・13）

**遺構** 竪穴住居跡S I 104は、発掘区南壁際中央附近から発見された焼失家屋で、南側の大半は発掘区外に延びる。規模は東西435cm、南北140cm以上で、平面形

第14図 S I 103竪穴住居跡出土遺物

S I 103出土遺物観察表

No.	種別	出土地点	分類	法 量			調 整		加 土	色 調	燒 成	備 考	写真図版
				口径	底径	器高	外 面	内 面					
1	土師器 鉢	床 直	BBB	13.4	5.2	7.7	赤褐色	ヘラミガキヘラミガキ	黒粘土	黄褐色	良 好	28-1	



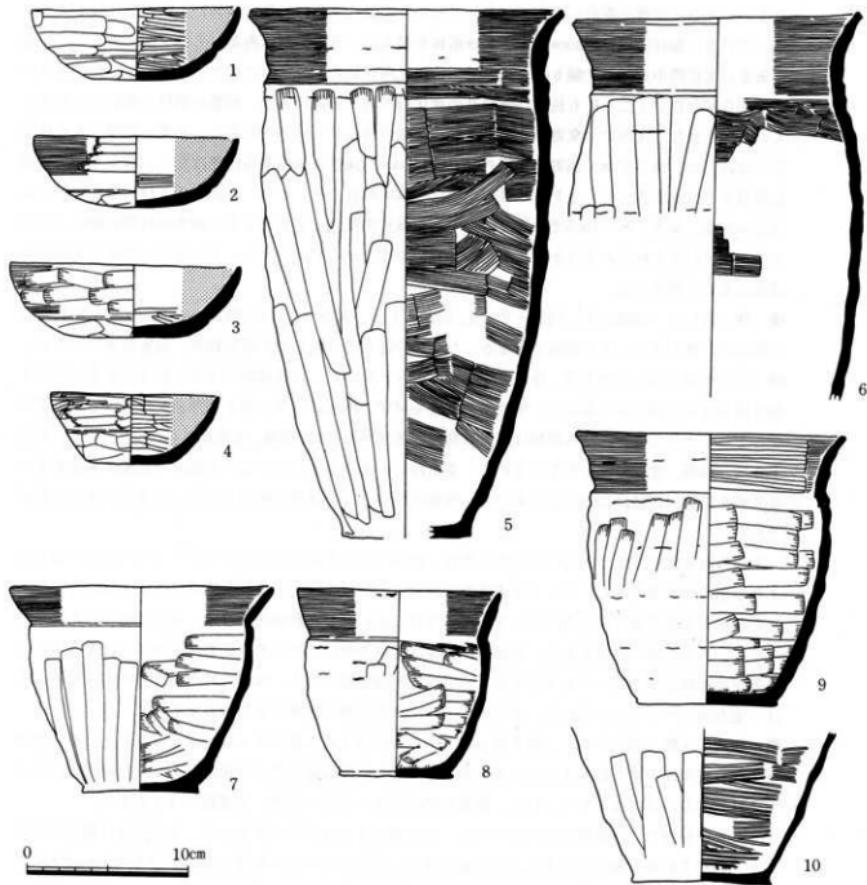
第15図 S I 104堅穴住居跡

は矩形を呈すると解される。主軸は西壁で北で $26^{\circ} 43'$  東に偏する。壁高は10~20cm、壁の掘削は外傾ぎみに掘り込まれている。埋土は6・8層の二つの層からなり、8層が主体となる。その上を厚さ20~40cmの4層が覆う。埋土6層は住居東壁寄りに堆積する厚さ20cm前後のくすんだ黒褐色土層で、土質は粗く硬質。小礫が混じる。8層は厚さ10~15cmの濃い黒褐色土で、土質はやや粗く軟質。小礫が混じる。また炭化材ブロックが多く混じる層でもある。4層は住居埋土を覆うやや粗い硬質ぎみの淡黒褐色土層である。

堅穴住居は厚さ7~18cmの5・9層を掘り込んでつくられている。いずれも暗褐色土系の漸移層で、

S I 104出土遺物観察表

No.	種 別	出土地点	分類	法 量			調 整		新 土	色 調	成 分	備 考	写真図
				口 径	底 径	深 度	外 面	内 面					
1	土器器 环	遺構検出箇所 N.III	12.9	4.0	4.4		口縁部・へラクズリ 底面・へラクズリ	へラクズリ・黑色地層	繊維砂	HTR34	良 好		27- 2
2	土器器 环	床 直 箇所 N.III	12.6	2.2	4.4		口縁部・底面土色：ココナツ青・へラナナ 底面下部・底面・へラナナ	へラナナ・黑色地層	繊維砂	HTR64	良 好		27- 3
3	土器器 环	遺構検出箇所 N.III	14.2	6.0	4.5		口縁部・底面土色：ココナツ青・へラナナ 底面下部・底面・へラナナ	へラナナ・黑色地層	繊維砂	HTR64	良 好		27- 4
4	土器器 环	埋 土 N.III	10.5	5.0	4.3		口縁部・底面土色：ココナツ青・へラナナ 底面下部・底面・へラナナ	へラナナ・黑色地層	繊維砂	HTR41	良 好		27- 5



第16図 S I 104出土遺物観察表

S I 104出土遺物観察表

5	土師器 壺 理 土 量 A11a	推定 19.2	推定 8.0	33.0	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ 側面：ヨラケズリ	口縁部：ヨコナギ 底部：ハケメ	細粒砂	IIIB6/6	良 好		29- 1
6	土師器 壺 理 土 量 A11a	18.4	-	23.9	口縁部：ヨコナギ 底部：ヨラケズリ	底部：ハケメ	細粒砂	IIIB5/1	中 中	較質	29- 2
7	土師器 壺 理 土 量 A11a	16.8	18.0	8.6	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ	細粒砂	IIIB5/4	中 中	較質	28- 6
8	土師器 壺 理 土 量 A11a	16.2	推定 7.2	12.7	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ	中粗砂	IIIB5/4	良 好		28- 7
9	土師器 壺 理 土 量 A11a	12.8	7.0	11.7	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナギ 底部：ヘラケズリ	細粒砂	IIIB5/4	中 中	較質	28- 5
10	土師器 壺 理 土 - -	-	推定 8.4	12.0	底部：ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	中粗砂	IIIB7/6	良 好		30- 1

土質は粗く固い。小礫が混じる。床面はほぼ平坦で、黒色土で貼床状に叩き占めている。周溝はみられない。床直上は礫が露出している。カマド位置は不明。床面には焼け落ちた上屋の炭化材が大量に残っていた。部材は現存長35cm、太さ8cm前後を最大に、その方向は南北に方位を揃えるという特徴がある。北壁際中央付近で幅6cm、長さ50cmの炭化角材が北壁に平行に検出されている。この角材の西端から30cm西のところにも長さ15cm余りの炭化材が同一方向にあり、壁際の部材の使われ方を表すものと解された。床面には東寄りと西寄りに各2個の柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>がある。東寄り壁際にある柱穴P<sub>1</sub>は径25cm、深さ7cm、西寄り壁際のP<sub>2</sub>は径20cm、深さ5cmと両者に差はない、埋土も濃い黒褐色軟質土と共通する。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱間距離は265cmである。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の北にある柱穴P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は径30cm前後、深さ5cm～10cmで、埋土はくすんだ軟質黒褐色土と共通する。両者の柱間距離は245cmである。いずれも主柱穴かどうかは不明だが、規模や埋土からP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>がそれぞれ対応関係にあると解される。

**遺物** (第16図 図版26上、同27-2-5、同29-1-2、同28-5-7、同30-1) 出土遺物には土器器環、甕がある。また図示できなかったものの非クロ成形の土器器鉢片、須恵器甕片がある。

**坏** 坏A I類(図1)が1点、坏A II類(図2～3)が2点、坏A III類(図4)が1点ある。坏A I類は内外面共に段をもつことで、平底風の丸底を呈す。内面はヘラミガキ後黒色処理される。本遺跡から1点出土している。坏A III類は坏A II類同様体部外面に段、稜線、沈線等をもつが、内面には対応する段、稜線、沈線等をもたないもので、本遺跡から6点出土している。丸底、平底風の丸底あるいは平底を呈し、口径は12cm以下のもので、内面はヘラミガキ後黒色処理される。全体的に焼成は良好である。

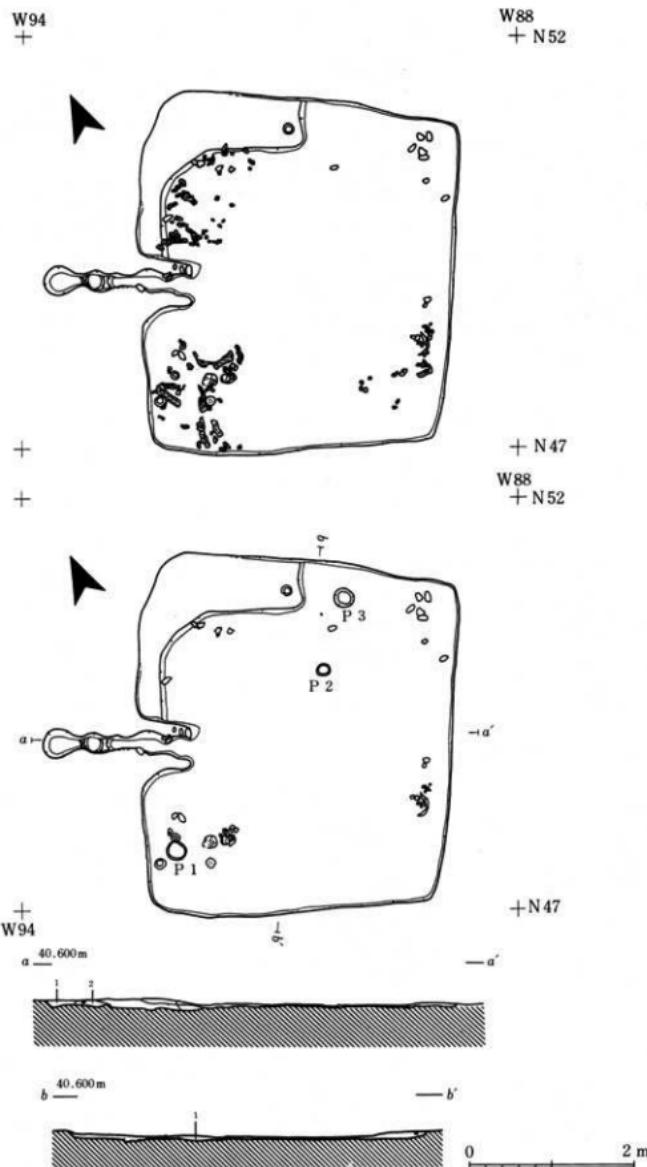
1は外面体部が横位方向にヘラケズリされ、底部は不定方向にそれぞれヘラケズリされる。被熱により黒色処理が消失する。2、3は体部外面がヨコナデ後ヘラナデされ、底部は不定方向にヘラケズリされる。体部内面は横位方向にヘラミガキされるが、両方共磨滅が著しい。4は平底を呈する小型の坏で、外面に緩い稜線をもつ。外面体部上半は横位方向にヘラナデされた後一部ヘラミガキされる。体部下半は横位方向にヘラケズリされ、一部稜線が削り取られる。体部内面は横位方向に、見込み部は一定方向にヘラミガキされる。また体部上半の黒色処理は被熱により消失する。

**甕** 甕A I a類(図5～6)、甕A II a類(図7)が各1点、甕A III a類(図8～9)が2点、体部下半から底部にかけて残存するものが1点ある。甕A III類は最大径が口縁部にあり、口縁部はヨコナデされ段あるいは稜線をもち、口径、器高が15cm以下の小型の甕で、本遺跡には4点ある。

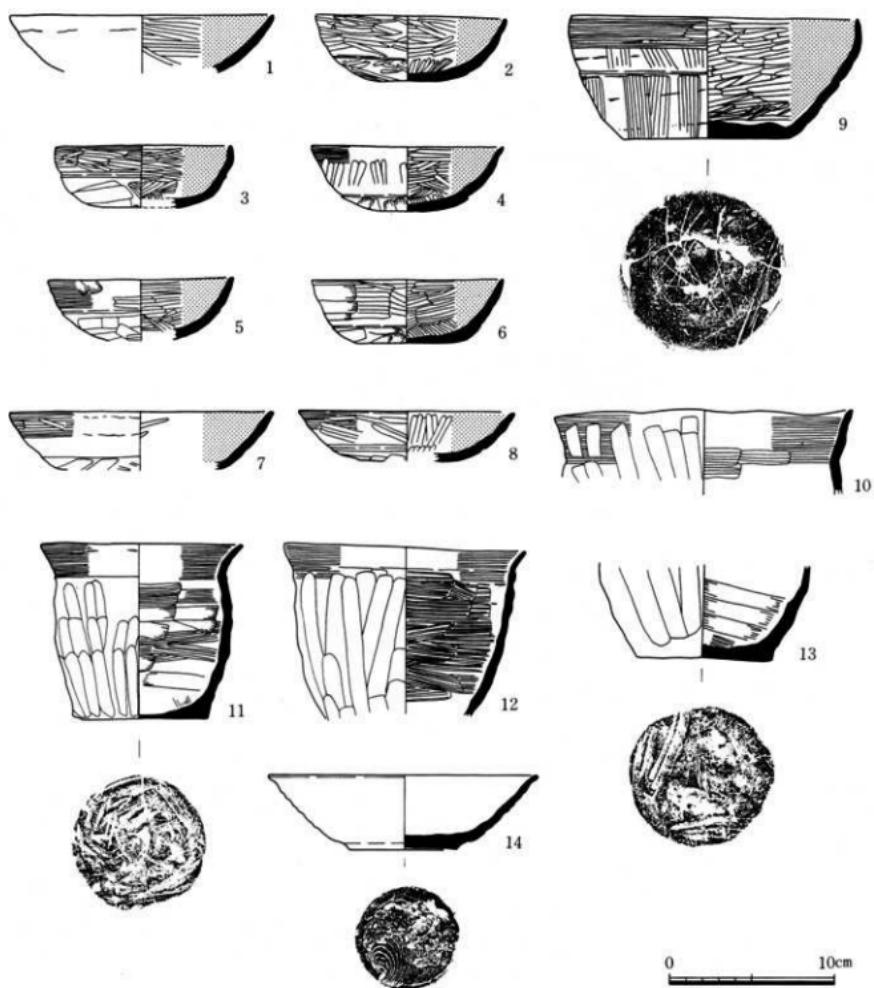
5、6は長甕で、体部外面はヘラケズリ、5の体部上半はヘラナデされる。体部内面は横位方向にハケメ調整される。両方共に巻き上げ痕跡が残る。7は中型の甕で体部外面は縦位方向にヘラナデされる。口縁部内側はヨコナデ後ハケメ調整される。体部内面、見込み部は小口状のもので丁寧にナデられる。底部と体部下半に煤が付着する。体部には巻き上げ痕跡が明瞭に残る。8、9は小型の甕で外面がヘラケズリ、内面は小口状のものでナデされる。10は器壁が非常に薄い甕である。

#### 豊穴住居跡S I 105 (第17図 図版14)

**造構** 豊穴住居跡S I 105は、発掘区中ほど東寄りから発見された焼失家屋である。先述の豊穴住居跡S I 104からは北に13mといったところである。削平のため造構の遺存状態が悪い。平面形は東西385cm、南北425cmのわざかに北側が広がる矩形を呈する。主軸は東壁で北で27° 13' 東に偏する。壁の残存高は5cm程度で、掘り込みも湾曲ぎみになされる。埋土は下層の濃い黒褐色土がわざかに残るといどである。土質はやや密で硬質、明黄褐色土が若干混じる。



第17図 SII 105 積穴住居跡



第18図 S I 105堅穴住居跡出土遺物

床面はややイレギュラーで固いが、周溝や貼床はみられない。西壁北半部から北壁西半部にかけて幅35~65cm、床面からの段差5cmほどのベッド状の高まりが逆し字形に壁に沿ってみられる。この部分は黄褐色土を叩き締めている。カマドは西壁中央に付設される。袖はともに黄褐色シルトを素材にし、左袖は長さ60cm、幅20~30cm、高さ5cm前後、右袖は長さ70cm、幅20~25cm、高さ5cm前後あるが、焚口寄りに10cm前後の礫を南北方向に並べて芯材としている。焚口部の幅20cm。燃焼部は下端で幅10~15cm、奥行きは床面と同じレベルで100cmと長く、壁外に延びる。燃焼部奥壁は約5cmの差で

立上がり、煙道部に至る。煙道は長さ35cmと比較的短く、その先端に径35cm、深さ10cmほどの煙出しが付く。埋土は、煙出しが濃い黒褐色のやや密な軟質土。煙道部が煙出しそよはやや明るい黒褐色の密な硬質土。燃焼部ではくすんだ黒褐色の密な硬質土が主体となっている。焚口付近では赤褐色土ブロックが混じる。火床は比較的良好焼けている。

床面には焼け落ちた上屋の炭化材が残っていた。その分布は四壁沿いに限られ、住居中央にはみられない。炭化材は比較的小さいものが多く、最大でも長さ40cm、幅8cmの角材である。これらは各炭化部材とも四壁の各辺に直交するかたちで検出されている。床面には小柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>がある。小柱穴P<sub>1</sub>は南西壁際にある径25cm、深さ10cmのくすんだ黒褐色土の埋土でやや固く締まる土質。P<sub>3</sub>は北壁寄りにある径25cm、深さ14cmのくすんだ黒褐色軟質土。P<sub>2</sub>はP<sub>3</sub>の南70cmのところにある径15cm、深さ10cmあまりの小柱穴で、埋土は濃い黒褐色軟質土である。

**遺物**（第18図 図版26下、同27-6～10、同28-2、同31-1・2、同30-2～5） 出土遺物には土師器環、甕、鉢がある。また遺構検出作業中に須恵器環が出土した。直接遺構との関連は考えられないもの一応図示しておく。

#### 土師器

**环** H II類（図1）が1点、环 A III類（図2～6）が5点、环 B I類（図7）が1点、环 B II類（図8）が1点ある。环 B類は口径に対して器高が低い皿状の环で、口径の大きい环 B I類と小さい环 B II類に分類される。

1は口縁部から体部にかけて残存するもので内外面共にヘラミガキされるが、磨滅が著しい。外面は巻き上げ痕が残る。2～4は伏せた状態で3個重なって出土した。2は内外面共に密なヘラミガキで、体部外面下半に黒斑が2ヶ所見られる。3は外面に沈線をもつて体部下半はヘラケズリ後部へラミガキされる。体部下半に黒斑がある。4は体部外面上半が擬位方向のヘラミガキ、下半はヘラケズリ後ヘラナデされる。6は外面に緩い棱線をもつが半分近く削り取られる。体部外面上半が横

#### S 1105出土遺物観察表

No.	種 別	出土地点	分類	法 管			調 整		粘 土	色 調	地 成	備 考	写真箇数
				口 径	底 径	厚 度	外 面	内 面					
1	土師器 环	床 直	H II類 確定	16.0	—	—		ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB5/1	良 好		27- 6
2	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	11.4	3.7	3.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB5/2	良 好		27- 7
3	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	10.6	4.8	3.8	口縁部・底部不規則なコロナ形へラミガキ 底部下平・底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB5/3	良 好		27- 8
4	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	11.6	2.4	4.4	口縁部・底部不規則なコロナ形へラミガキ 底部下平・底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB5/4	良 好		27- 9
5	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	11.1	—	3.6	口縁部・底部不規則なコロナ形へラミガキ 底部下平・底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB5/5	良 好		
6	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	11.5	5.6	4.7	口縁部・底部不規則なコロナ形へラミガキ 底部下平・底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB5/6	良 好		27-10
7	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	15.9	—	—	口縁部・底部不規則なコロナ形へラミガキ 底部下平・底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB6/1	良 好		
8	土師器 环	床 直	H II類 底 不定	13.2	—	3.2	口縁部・底部不規則なコロナ形へラミガキ 底部下平・底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB6/2	良 好		31- 1
9	土師器 瓢	床 直	H II類 底 不定	17.5	10.2	7.4	口縁部:コロナ形へラミガキ 底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色地	微粒砂	HTB6/3	良 好	底縁剥離有り	28- 2
10	土師器 瓢	床 直	H II類 底 不定	18.0	—	6.0	口縁部:コロナ形へラミガキ 底部:ヘラミガキ	口縁部:コロナ形 地部:ハサメ	微粒砂	HTB6/2	中粗粒		30- 2
11	土師器 瓢	床 直	H II類 底 不定	12.0	7.3	4.7	口縁部:コロナ形 底部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ	口縁部:コロナ形 地部:ハサメ	中粒砂	HTB6/4	良 好		30- 3
12	土師器 瓢	床 直	H II類 底 不定	14.8	—	11.5	口縁部:コロナ形 底部:ヘラミガキ	口縁部:コロナ形 地部:ハサメ	中粒砂	HTB5/3	良 好		30- 4
13	土師器 瓢	床 直	H II類 底 不定	—	8.0	9.2	口縁部:ヘラミガキ・底部:ヘラミガキ 底部:ハサメ	口縁部:ヘラミガキ	微粒砂	HTB5/4	良 好		30- 5
14	須恵器 环	遺構検出	—	15.2	6.4	4.4	底部:剥離あり調査用		微粒砂	HTB6/5	不 良		31- 2

位方向のヘラミガキ後、ヘラナデ、下半はヘラケズリ後ヘラナデされる。7は立上りからそのまま外傾し、底部付近にゆるやかな段をもつ。体部外面上半は横位方向にヘラミガキされ、下半から底部にかけてはヘラケズリされる。外面に巻き上げ痕跡が残る。8は外面に沈線をもつが、全周しない。体部外面上半は横位方向のヘラミガキ、下半から底部にかけては不定方向にヘラケズリされる。体部内面は縦位方向、見込み部は放射状にヘラミガキされる。

**鉢** 鉢A I類が1点(図9)ある。鉢A I類は非ロクロ成形で口径が15cm以上のもので本遺跡からは1点出土している。外面に段をもつが内面には段、稜線はない。口縁部は内湾し、平底を呈する。体部外面は下端から上半にかけて粗い小口による面取り調整が縦位に入る。口縁部付近はヨコナデされ、一部ヘラミガキされる。内面は横位方向にヘラミガキされ、下端は小口状の工具で搔き取った痕が残る。全体的に作りが粗雑で焼成はやや軟質である。体部外面は巻き上げ痕跡が明瞭に残り、底部には数条の線刻がある。

**甕** 甕A I b類(図10)が1点、甕A III a類(図11~12)が2点、体部下端から底部にかけて残存するものが1点ある。甕A I b類は甕A I a類と同様の法量であるが、頭部に段稜線をもたないものである。本遺跡から1点出土している。

10は口縁部から体部上端がわずかに残存するものである。口縁部はほぼ直線ぎみに僅かに外傾する。ヨコナデ後頭部に沈線が巡らされるが、そのほとんどが縦位方向のヘラケズリがなされ、僅かに痕跡を留めるだけで頭部無段の甕である。内面は口縁部下半付近からハケメ調整される。11、12は小型の甕で、12は口縁部の中ほどに沈線が巡らされ、内面にも対応する沈線が見られる。双方共に外面は縦位方向にヘラケズリ、内面は横位方向にハケメ調整され、11はその後小口状の工具で見込み部までナデされている。11は口縁部に巻き上げ痕跡が顕著に残る。体部外面上半に黒斑が見られる。12も内面口縁部直下付近に巻き上げ痕跡が残り、外面口縁部と体部上半および内面体部下半に黒斑がある。13は体部外面はヘラケズリ、底部は不定方向にヘラケズリ、内面はハケメ後小口状のものできれいにナデされる。体部下半内外面共に黒斑が見られる。

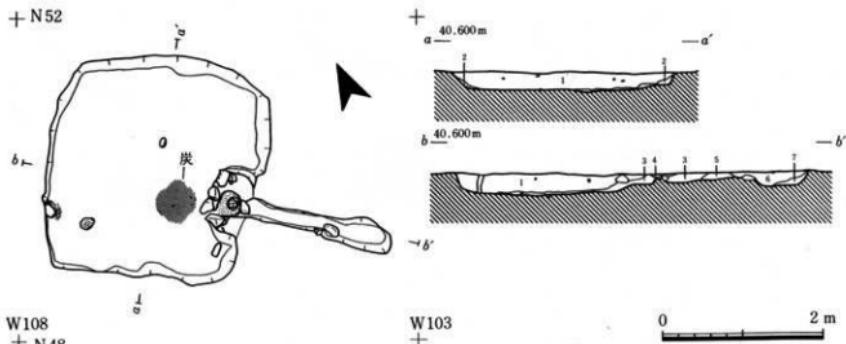
#### 須恵器

**壺** 壺E類が1点(図14)遺構検出作業中に出土した。直接遺構とは関係ない。壺E類である須恵器壺は本遺跡から3点出土し、底部切離し手法は回転糸切り無調整で、いずれも焼成不良である。14はやや内湾ぎみに立上り、そのまま伸びて口縁部に至り、端部で外反する。外面はロクロ成形痕跡が明瞭なもの、内面は平滑である。

#### 竪穴住居跡S I 106 (第19図 図版15・16)

**造構** 竪穴住居跡S I 106は、発掘区中ほど西壁寄りのところから発見された小型の住居で、平面形は東西270cm、南北275cmのわずかに胴の張る隅丸方形である。壁高は20~25cmと残りが良い。主軸は西壁で北で30° 13' 東に偏する。壁の掘削はていねいだが外傾ぎみである。埋土は1層が主体で、壁際に2層が堆積している。1層は濃い黒褐色土で、土質はやや密で硬質。明黄褐色土小ブロックが若干混じる。2層は壁の崩壊土で明黄褐色土に黒褐色土が多く混じる層である。

床面はスロープ状に緩く窪み、叩き締められているが、周溝や貼床などはみられない。カマドは東壁南寄りに付設される。カマドの焚口や袖部は天井部の崩壊で潰されていたが、両袖とも黄褐色シルトを素材にし、袖端部を中心にして15×20cm前後の河原石を芯材に使っていった。また補強用に土師器裏片なども使用している。カマド本体の幅約75cm、奥行き55cmある。燃焼部は幅35cm、奥行き30cm。燃焼部には土師器裏を利用して支脚が設置されている。奥壁から5cmほど立ち上がって長さ100cm余りの



第19図 S II 106竪穴住居跡

煙道にいたる。煙道の幅は上端で約20cmある。煙道の先端に幅40cm、長さ65cm、深さ20cmほどの煙出しが付く。カマド埋土は、煙出しが下層に軟質褐色土、上層に主体となる軟質の濃い黒褐色土がある。燃焼部下層から煙道部にかけてはくすんだ軟質黒褐色土が堆積し、煙道の奥には明黄褐色ブロックが多く混じったくすんだ軟質黒褐色土がみられる。当住居跡のカマド煙道部は、住居規模に比較して長いことが特徴である。

カマド手前の床面に50×50cmの範囲で焼土小ブロックの混じった炭の広がりがみられる。また、西壁南寄りに接して焼けた石があり、これを中心に焼土ブロックが広がる。床面から柱穴は検出できなかった。

**遺物** (第20図 図版31-3~5、同30-6・7)

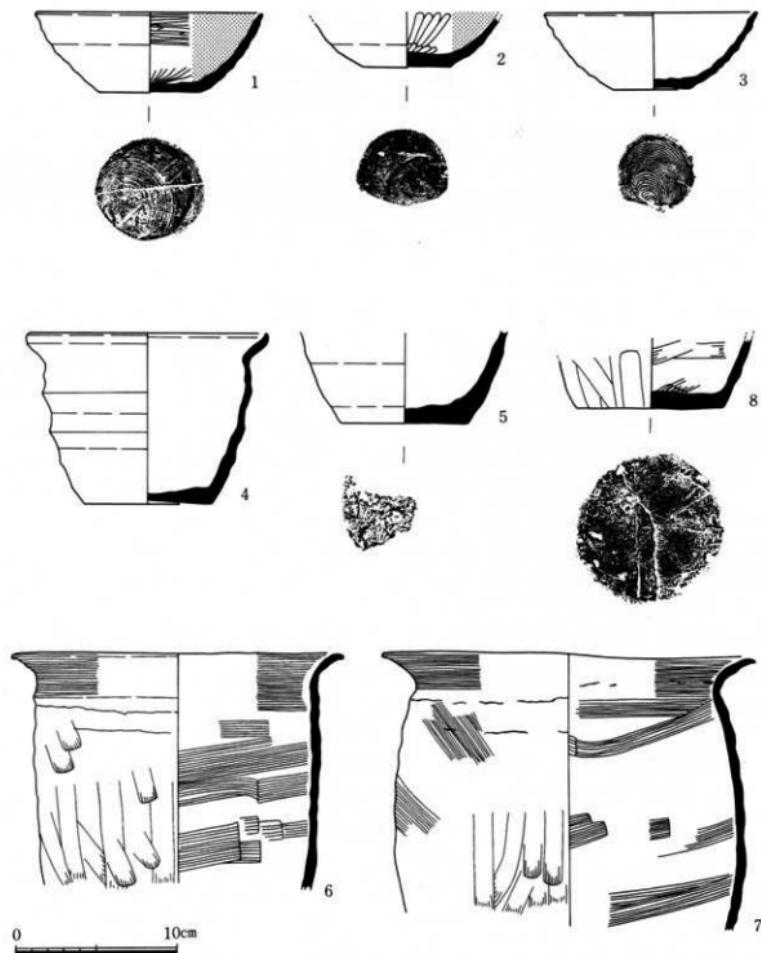
出土した遺物には土師器壺、甕、須恵系土器壺がある。

#### 土師器

**壺** 壺C II a類 (図1)、壺C II b類 (図2) が各1点ある。壺C II a類はロクロ成形の壺で、内面ヘラミガキ後黒色処理される。口径が15cm以下で底部切離しは回転糸切り無調整である。本遺跡には5点あり、全体的に焼成は良好である。これに対して壺C II b類は切離しが不明のもので、本遺跡か

#### S II 106出土遺物観察表

No.	種 別	出土場所	分類	法 量			調 整		胎 土	色 調	焼 成	備 考	写真図版
				口 径	底 径	高	外 面	内 面					
1	土師器 壺	埋 土	II C II a	13.8	6.3	5.0	底部:回転糸切り無調整	ヘラミガキ後黒色	粗粒砂	10YR6/4	良 好		31-3
2	土師器 壺	埋 土	II C II b	-	5.6	残存 2.6	底部:切離し不定形ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色	粗粒砂	10YR6/4	良 好		31-4
3	須恵系 壺	埋 土	III F I	13.1	4.8	4.8	底部:回転糸切り無調整		粗粒砂	10YR6/8	良 好	打明鑑	31-5
4	土師器 壺	埋 土	III C II	概定 15.0	8.0	10.7	底部:回転糸切り無調整		粗粒砂	10YR6/4	軟 質		30-6
5	土師器 甕	埋 土	III C II	-	概定 8.0	-	底部:回転糸切り無調整		粗粒砂	10YR5/3	軟 質		
6	土師器 甕	床 直	III C II	概定 20.8	-	残存 15.8	口縁部:ココナデ 底部:ヘラミガキ後ヘラミガキ	口縁部:ココナデ 底部:ハナメ	中粒砂	5YR5/6	良 好		
7	土師器 甕	カマド 瓦礫内	III C II	概定 23.6	-	残存 17.7	口縁部:ココナデ 底部:ヘラミガキ後ヘラミガキ	口縁部:ココナデ 底部:ハナメ	粗粒砂	5YR5/6	軟 質		30-7
8	土師器 甕	セツテ瓦罐	-	-	9.3	残存 4.5	底部:ヘラミガキ 底部:木炭灰	底部:ハナメ	細粒砂	10YR4/2	良 好		



第20図 S 1106竪穴住居跡出土遺物

らは2点出土している。

1は外面体部下半～底部にかけて煤が付着し、黒斑も見られる。2は口縁部を欠く壊で内面は横方向、見込み部は放射状にヘラミガキされる。底部切離し後不定方向にヘラケズリされる。

**甕** 甕C II類(図4～5)と、甕D I c類(図6～7)が2点、体部下端から底部にかけて残存するものが1点ある。甕C II類はロクロ成形の小型の甕で口縁部が20cm以下のものである。本遺跡には3

点ある。慶D I c類は非クロコ成形の土器で口縁部がヨコナデされる。本遺跡には2点ある。

4、5は底部切離しが共に回転糸切り無調整である。4の口縁部外面直下と体部内面に煤が付着する。6、7は共に外面がヘラケズリ後、ヘラナデされ、内面はハケメ調整される。7の外面の一部にもハケメ痕が残る。いずれも外面口縁部直下には巻き上げ痕跡が明瞭に残り、内外面に煤が付着し、6の内面には炭化物も付着している。8はカマド燃焼部内の川原石上に底を倒立させた状態で出土したもので、支脚に使用したと解せる。非クロコ成形の長慶の底部片と考えられ、底部には木葉痕が残る。

#### 須恵系土器

**坏** 坏F I類(図3)が1点ある。坏F I類は口径が12cm以上の須恵系土器坏で本遺跡から4点出土している。内面に油煤が付着しており灯明皿転用と思われる。

#### 豊穴住居跡S I 201(第21図 図版17~19)

**造構** 豊穴住居跡S I 201は、同S I 106のすぐ北側から発見された焼失家屋である。平面形は東西400cm、南北420cmの方形で、主軸は西壁で北で43°43'東に偏する。壁の掘削はていねいで、わずかに外傾して立ち上がる。壁高は深いところで28cmある。住居埋土は壁際の2・3・5層を除くと、基本的に1・4層からなる。1層は埋土上層を占める淡黒褐色土層で、土質はやや粗く軟質。炭化ブロックが比較的多く混じる。下層の4層は色調、土質ともにはば1層に近いが、焼土や炭化のブロック、明黄褐色土ブロックが多く混じる層である。2層は壁際3層の上に堆積するくすんだ黒褐色土層で、土質は1層と同じ。柱より小さめの礫がやや多く混じる。3層は濃い黒褐色土層で、軟質、可塑性に欠ける。5層は黄褐色地山崩壊土で、下部に黒褐色土が汚れとして入る。6・7層は木根の痕跡。

床面は礫層が露出しているが、比較的平坦。周溝や貼床、叩き締めなどはみられない。カマドは西壁ほぼ中央に付設される。カマド袖は地山黄褐色シルトを素材にしているが、崩壊と流失がみられる。現存での左袖は長さ65cm、幅35cm、高さ15cm。右袖は長さ80cm、幅40cm、高さ20cmある。焚口から燃焼部までの火床は比較的良好焼け、暗赤褐色を呈する。焚口幅20cm、燃焼部長さ50cm、幅10~13cmである。燃焼部の奥壁は約15cmの段差で立ち上がり、長さ135cm、幅15cmの煙道部にいたる。煙道の奥は煙出し部に向かって緩やかに傾斜していく。煙出し部は長軸35cm、短軸22cmの楕円状を示す。深さ15cmある。カマド内の埋土は燃焼部が暗褐色土と極暗褐色土の2層がみられ、焼土粒と灰が多く混じる。煙道部は手前が濃い黒褐色土、煙出し寄りが砂質ぎみの暗褐色土でともに粗砂礫が混じる。煙出し部は上下2層に分かれ、上層が硬質の濃い黒褐色土層、下層がやや軟質の淡黒褐色土層である。

床面には住居部材である垂木、壁板の炭化材が多量に残っていた(図版19)。また径15~20cm前後の礫も多くみられ、最大で40×20cmのものもある。炭化材の分布は住居中央部と南壁際に集中し、北壁寄りと東壁は稀薄である。ここでは最も遺存状態の良い南壁際のそれについて記述する。炭化した垂木材は判明するものはすべて丸太の割り材か、面取り加工したもので、太さ7~8cmある。最大現存長では85cmを数える例がある。垂木材は壁の長辺に直交する方向で落ち込んでおり、垂木間の距離は35~50cmの間隔がある。壁際東寄りに長さ150cm以上の炭化材が壁の長辺に平行に残っている。この部材は崩落した垂木の下に垂木と直交してあり、その方向から垂木を横に連結する材と判断した。一方、壁際西寄りには長さ160cm、幅25cm、厚さ4~5cmの割板材が壁に平行に残っていた。これもその方向と壁際ということから壁板と判断し、火災によって横倒しになったものと推定した。板の西端寄り中央には10cm四方の仕口痕跡があり、建築材を再利用したものであろう。

点ある。慶D I c類は非クロコ成形の土器で口縁部がヨコナデされる。本遺跡には2点ある。

4、5は底部切離しが共に回転糸切り無調整である。4の口縁部外面直下と体部内面に煤が付着する。6、7は共に外面がヘラケズリ後、ヘラナデされ、内面はハケメ調整される。7の外面の一部にもハケメ痕が残る。いずれも外面口縁部直下には巻き上げ痕跡が明瞭に残り、内外面に煤が付着し、6の内面には炭化物も付着している。8はカマド燃焼部内の川原石上に底を倒立させた状態で出土したもので、支脚に使用したと解せる。非クロコ成形の長慶の底部片と考えられ、底部には木葉痕が残る。

#### 須恵系土器

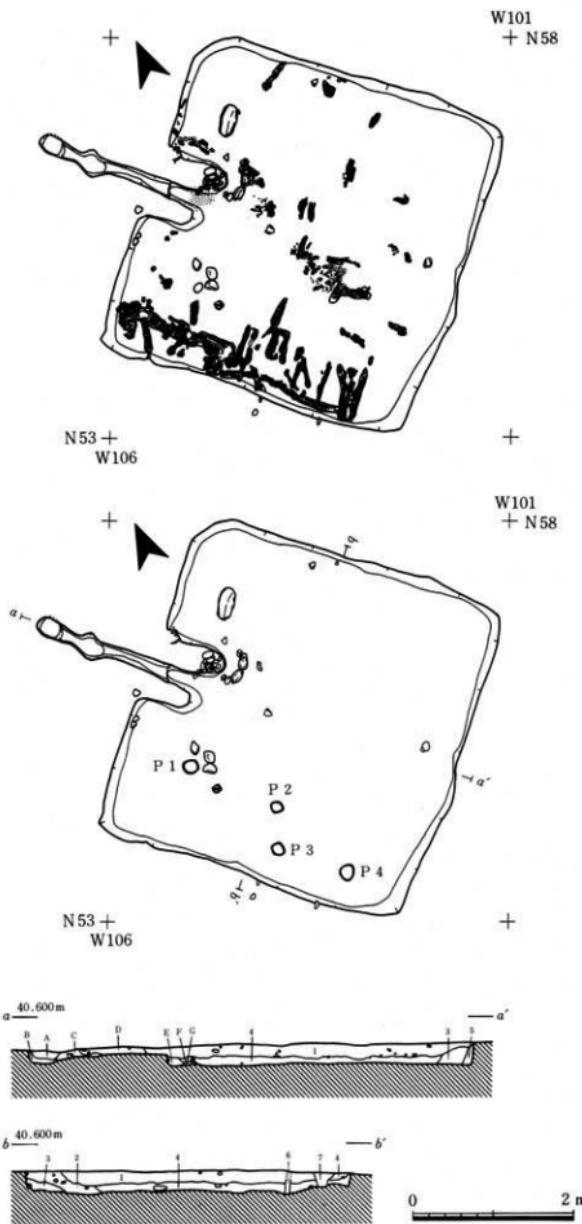
**坏** 坏F I類(図3)が1点ある。坏F I類は口径が12cm以上の須恵系土器坏で本遺跡から4点出土している。内面に油煤が付着しており灯明皿転用と思われる。

#### 豊穴住居跡S I 201(第21図 図版17~19)

**造構** 豊穴住居跡S I 201は、同S I 106のすぐ北側から発見された焼失家屋である。平面形は東西400cm、南北420cmの方形で、主軸は西壁で北に43°43'東に偏する。壁の掘削はていねいで、わずかに外傾して立ち上がる。壁高は深いところで28cmある。住居埋土は壁際の2・3・5層を除くと、基本的に1・4層からなる。1層は埋土上層を占める淡黒褐色土層で、土質はやや粗く軟質。炭化ブロックが比較的多く混じる。下層の4層は色調、土質ともにはば1層に近いが、焼土や炭化のブロック、明黄褐色土ブロックが多く混じる層である。2層は壁際3層の上に堆積するくすんだ黒褐色土層で、土質は1層と同じ。柱より小さめの礫がやや多く混じる。3層は濃い黒褐色土層で、軟質、可塑性に欠ける。5層は黄褐色地山崩壊土で、下部に黒褐色土が汚れとして入る。6・7層は木根の痕跡。

床面は礫層が露出しているが、比較的平坦。周溝や貼床、叩き締めなどはみられない。カマドは西壁ほぼ中央に付設される。カマド袖は地山黄褐色シルトを素材にしているが、崩壊と流失がみられる。現存での左袖は長さ65cm、幅35cm、高さ15cm。右袖は長さ80cm、幅40cm、高さ20cmある。焚口から燃焼部までの火床は比較的良好に焼け、暗赤褐色を呈する。焚口幅20cm、燃焼部長さ50cm、幅10~13cmである。燃焼部の奥壁は約15cmの段差で立ち上がり、長さ135cm、幅15cmの煙道部にいたる。煙道の奥は煙出し部に向かって緩やかに傾斜していく。煙出し部は長軸35cm、短軸22cmの楕円状を示す。深さ15cmある。カマド内の埋土は燃焼部が暗褐色土と極暗褐色土の2層がみられ、焼土粒と灰が多く混じる。煙道部は手前が濃い黒褐色土、煙出し寄りが砂質ぎみの暗褐色土でともに粗砂礫が混じる。煙出し部は上下2層に分かれ、上層が硬質の濃い黒褐色土層、下層がやや軟質の淡黒褐色土層である。

床面には住居部材である垂木、壁板の炭化材が多量に残っていた(図版19)。また径15~20cm前後の礫も多くみられ、最大で40×20cmのものもある。炭化材の分布は住居中央部と南壁際を中心に、北壁寄りと東壁は稀薄である。ここでは最も遺存状態の良い南壁際のそれについて記述する。炭化した垂木材は判明するものはすべて丸太の割り材か、面取り加工したもので、太さ7~8cmある。最大現存長では85cmを数える例がある。垂木材は壁の長辺に直交する方向で落ち込んでおり、垂木間の距離は35~50cmの間隔がある。壁際東寄りに長さ150cm以上の炭化材が壁の長辺に平行に残っている。この部材は崩落した垂木の下に垂木と直交してあり、その方向から垂木を横に連結する材と判断した。一方、壁際西寄りには長さ160cm、幅25cm、厚さ4~5cmの割板材が壁に平行に残っていた。これもその方向と壁際ということから壁板と判断し、火災によって横倒しになったものと推定した。板の西端寄り中央には10cm四方の仕口痕跡があり、建築材を再利用したものであろう。

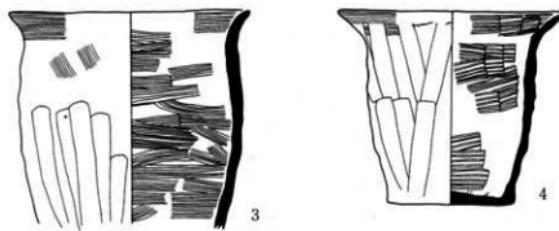
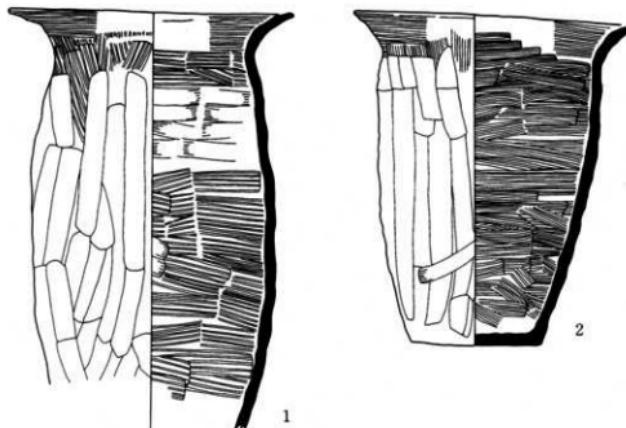


床面南寄りに小柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>がある。いずれも径15～20cm、深さ10cm強で、埋土はやや固い濃い茶褐色土の単層である。

遺物(第22図  
図版29-5、同30-9、同33-1・2) 出土遺物には土器器表がある。妻A II b類(図1～3)が3点、妻A III b類(図4)1点がある。妻A II b類は、妻A II a類と同様の法量をもつが、口縁部がヨコナデ後、ヘラケズリあるいはハケメ調整により頸部に段をもたない。妻A III b類も妻A III a類と同様の法量をもつが、頸部が無段のものである。いずれも本遺跡ではS I 2 01からのみ出土である。

1、2は体部外面が口縁部下端から縱位方向にハケメ後、ヘラケズリされる。体部内面は横位方向にハケメ調整後、小口状

第21図 S I 201  
竪穴住居跡



0 10cm

第22図 S I 201竪穴住居跡出土遺物  
S I 201出土遺物観察表

No.	種 別	出土地点	分類	法 番			調 整		地 成	備 考	写真回数	
				口 径	後 径	壁 厚	外 面	内 面				
1	土器器 甌	セツモ右側	Ⅱ	17.4	—	26.4	口部:ココナチ一層ハケテ 底部:ハケノ後ヘラケズリ	口部:ココナチ 底部:ハケノ後一層小口ナチ	粗粒砂	10755.4	中や軟質	29~5
2	土器器 甌	セツモ左側	Ⅱ	17.3	8.2	10.7	口部:ココナチ一層ハケテ 底部:ハケノ後ヘラケズリ	口部:ココナチ一層ハケテ 底部:ハケノ後	中粒砂	10755.4	良 好	30~9
3	土器器 甌	堆 土	Ⅱ	14.8	—	残存	口部:ココナチ 底部:ハケノ後ヘラケズリ	口部:ココナチ一層ハケテ 底部:ハケノ後	中粒砂	10755.4	中や軟質	33~1
4	土器器 甌	堆 土	Ⅰ	14.3	8.0	12.0	口部:ココナチ一層ハケテ 底部:ハケノ後ヘラケズリ	口部:ココナチ一層ハケテ 底部:ハケノ後	粗粒砂	10755.4	中や軟質	33~2

のもので横位方向にナデられている。1は体部外面に黒斑が見られ、2の底部内外面には煤が付着する。3も磨滅しているものの口縁部下端からヘラケズリされ、一部ハケメ痕も残る。4も頭部無段の

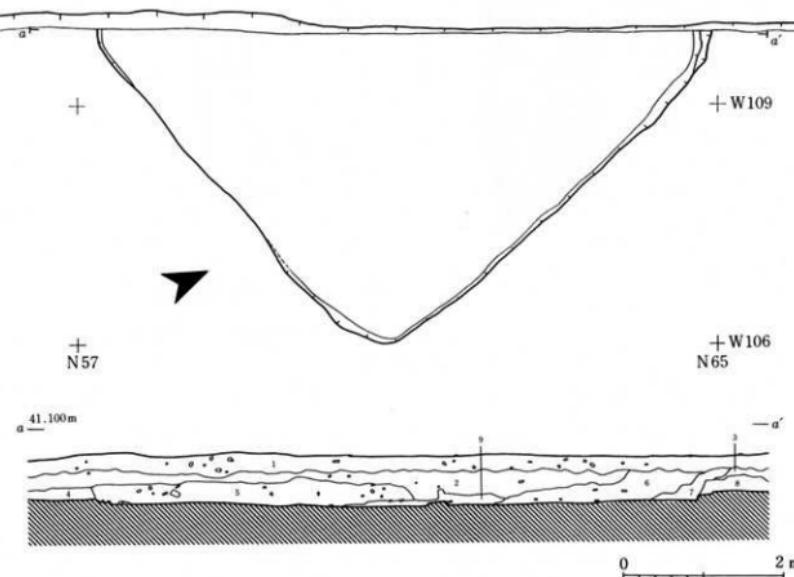
小型の窓で、体部外面が縦位方向にヘラケズリされ、底部は不定方向にヘラケズリされる。体部内面は口縁部から体部下端にかけて横位方向にハケメ調整される。口縁部外面に巻き上げ痕が残る。

#### 竪穴住居跡 S I 108 (第23図 図版20)

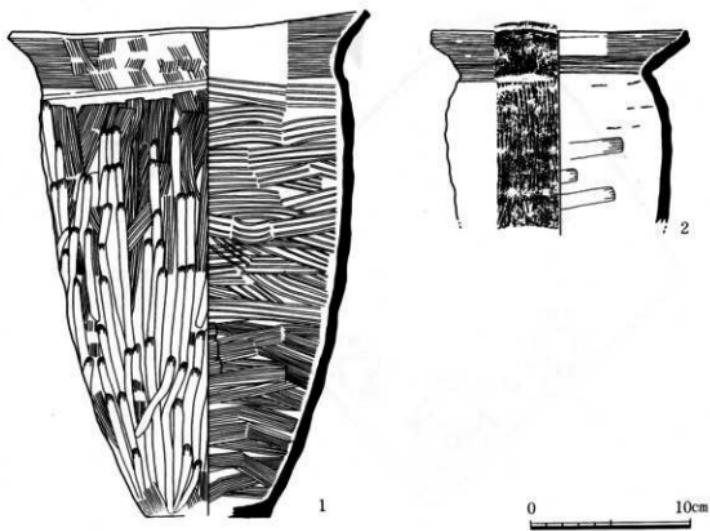
**造構** 竪穴住居跡 S I 108 は、同 S I 201 の直ぐ北西に接して発見された住居跡で、西側半分が発掘区外に延びる。規模は東辺が 570cm、南辺が 540cm で、平面形はほぼ方形をなすと解される。主軸は東壁で北で  $17^{\circ} 17'$  西に偏する。壁の遺存状況は悪く、ことに南壁は著しい。現存での壁高は 2 ~ 8 cm であるが、実際の竪穴掘削は地山漸移層上面から行われている。漸移層である 4 ~ 8 層から床面までの深さは 25cm を数え、壁の掘削も外傾ぎみでていねいである。住居埋土は 5 ~ 6 ~ 9 層が主体で、外に 7 ~ 2 層が一部住居を覆す。埋土全体に砂礫が多く含まれるという特徴がある。1 層は耕作土。2 層は漸移層 4 層を覆う濃い黒褐色土層で、土質はやや粗く軟質である。2 層はまた住居内にいたって 35cm 余りの堆積を示す。3 層は漸移層 8 層を覆うくすんだ黒褐色土層で、土質は 2 層と同じである。5 層は住居南側に 25 ~ 35cm の厚さで堆積する濃い黒褐色土層で、土質はやや粗く硬質である。6 層はその北側に堆積するくすんだ黒褐色土層で、土質はやや粗く軟質である。7 層は北側壁際に堆積した軟質黒色土層。9 層は住居中央付近にみられるくすんだ黒褐色土層で、土質はやや粗く軟質である。色調は 6 層より明るい。

床面は砂礫層を一部掘り込み、黄褐色土を叩き締めてほぼ平坦にするが、周溝などの施設はみられない。カマド位置は不明。柱位置も検出できなかった。

**遺物** (第24図 図版29-4、同30-8) 出土遺物には土師器窓がある。



第23図 S I 108竪穴住居跡



第24図 S I 108竪穴住居跡出土遺物

S I 108出土遺物観察表

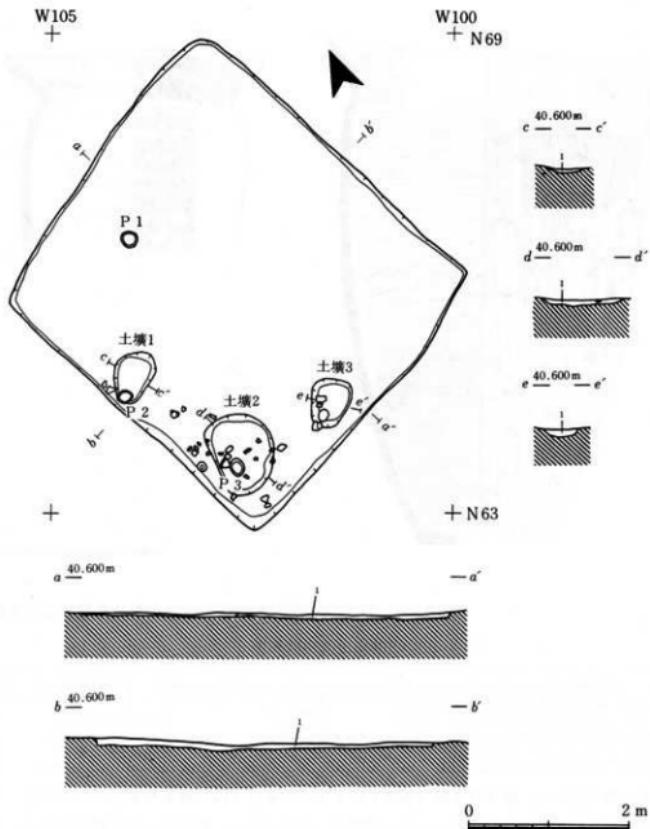
No.	種 別	出土地点	分類	法 量			調 整		地 士	色 调	地 成	備 考	写真DB
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面					
1	土師器 壺	床 表	Ⅱa	22.0	7.7	30.4	口縁部:ヨコナデ一部ハケメ 底部:ハケメ後ヘラナデ	口縁部:ヨコナデ 底部:ハケメ	細粒砂	HTR2.6	良 好		29-4
2	土師器 壺	床 表	Ⅱa	16.0	—	残存 12.5	口縁部:ヨコナデ 底部:ハケメ	口縁部:ヨコナデ一部ハケメ 底部:ハケメ	細粒砂	HTR2.7	良 好		30-8

甕A I a類(図1)、甕A II a類(図2)が各1点ある。1は口縁部外面にヨコナデ後一部縦位方向にハケメ調整がある。体部外面はハケメ調整後へラナデされ、内面はハケメ調整される。体部外面下端には黒斑が見られ、内面口縁部から見込み部にかけば全面にわたり煤が付着する。2は口縁部が「く」字状に屈曲するもので、口端部は上方に引きだされる。体部外面は縦位方向にハケメ調整が口縁部下半まで入る。体部内面は小口状のもので横位方向にナデられる。内外面体部には巻き上げ痕跡が残り、体部内面には筋状に煤が付着する。

#### 竪穴住居跡 S I 107 (25図 図版1下)

遺構 竪穴住居跡S I 107は、発掘区北端、竪穴住居跡S I 108の直ぐ東側から発見された住居跡である。平面形は南北方向にやや長い長方形で、主軸は西壁で北で21° 17' 西に偏する。規模は東西415cm、南北460cm、壁高は5~10cmと浅い。壁は外傾ぎみに立ち上がる。埋土は基本的に1層で、やや軟質の濃い黒褐色土に明黄褐色土ブロックが比較的多く混じる層である。

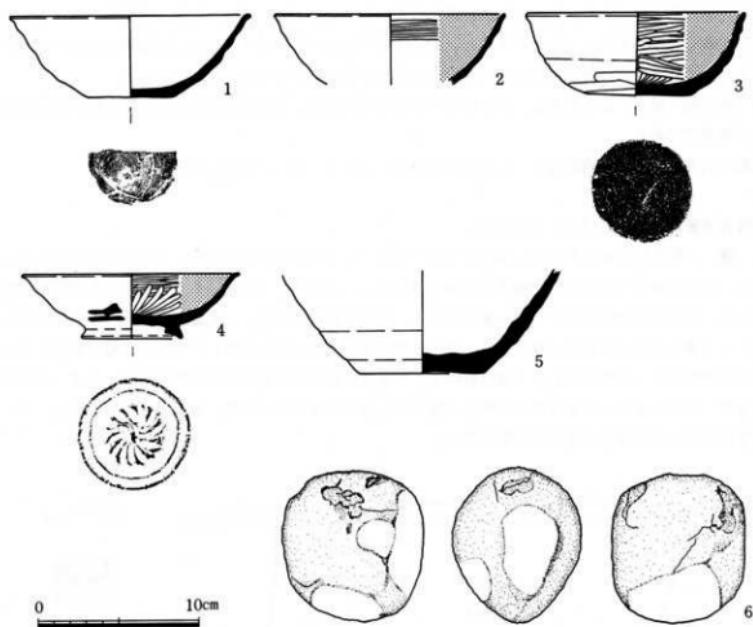
床面はほぼ平坦であるが、周溝や貼床、叩き締めなどはみられない。カマドは確認されなかった。南西寄りの床面上から多くの土師器破片が出土している。また南西寄りに小土壤1~3が床面上から



第25図 S I 107堅穴住居跡

掘り込まれている。土壤1は西壁際中央付近にある $70 \times 45\text{cm}$ 、深さ10cm未満の楕円形を呈する浅いもので、埋土はやや密な固い濃い黒褐色土。明黄褐色土ブロックが混じる。土壤2は南西隅付近にある $100 \times 80\text{cm}$ 、深さ10cm未満の楕円形を呈する浅いもので、埋土はやや密な固い濃い黒褐色土だが、色調は土壤1よりさらに濃い。壙底は緩く窪む。土壤3は南壁際中央付近にある $60 \times 50\text{cm}$ 、深さ10cm前後の卵形を呈するもので、壁は底に向かって緩やかに傾斜する。埋土は土壤1と同じである。さらに床面の西寄りに径20cm前後の小柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>がある。P<sub>1</sub>は北寄りにあって、深さ18cm、埋土はやくすんだ黒褐色土で比較的固く締まる。P<sub>2</sub>は土壤1の西壁と重複し、西壁を壙す。深さ21cm、埋土は濃い黒褐色土でやや固く締まる。P<sub>3</sub>は土壤2と重複し、P<sub>3</sub>が新しい。深さ9cm、埋土はP<sub>2</sub>と同じ。

西壁中央から西へ100cmほど離れて径30cm、深さ18cmの小柱穴が1個ある。壁は垂直に掘られるが、柱底は平らではない。埋土は濃い黒褐色土で土質は密だがやや軟質。当住居跡に伴うかどうかは不明



第26図 S II 107豎穴住居跡出土遺物

S II 107出土遺物観察表

No.	種別	出土地点	分類	状 質			測 算		粉 土	色	調 査	備 考	写真図版
				口 径	底 径	厚 度	外 表	内 表					
1	土師器 壺	埋 土	压 C II a	14.6	5.6	5.1	底部：切削未切り無調整	ヘリカキ→黑色地質	微粒砂	H10354	良 好	2と同一個体の可能性あり	
2	土師器 壺	埋 土	压 C II b	14.4	—	残存 4.5		ヘリカキ→黑色地質	微粒砂	H10354	良 好	2と同一個体の可能性あり	
3	土師器 壺	压 土	压 C II b	13.6	6.3	5.1	底部下端：ヘリカキ 底面：切削し底不定方向→ヘリカキ	ヘリカキ→黑色地質	微粒砂	H10354	良 好		31- 6
4	土師器 高台壺	埋 土	压 D	13.2	高台径 6.2	4.4	底部：菊花文	ヘリカキ→黑色地質	微粒砂	H10354	良 好	底部巻唇”生”	31- 7
5	土師器 鉢	埋 土	压 D	—	8.0	8.1	底部：切削未切り無調整		中粒砂	H10354	良 好		

No.	種別	出土地点	特	概	石	写真図版
6	磨 石	埋 土	最大長 9.3cm 最大厚 7.3cm		安山岩	34- 3

である。

遺 物（第26図 図版31- 6・7、同34- 3） 出土遺物には土師器壺、高台壺、鉢がある。また図示できなかったものの、他にロクロ成形の土師器裏片、須恵器裏片がある。

#### 土師器

壺 壺 C II a 類（図1～2）が2点、壺 C II b 類（図3）が1点、壺 D 類（図4）が1点ある。壺 D

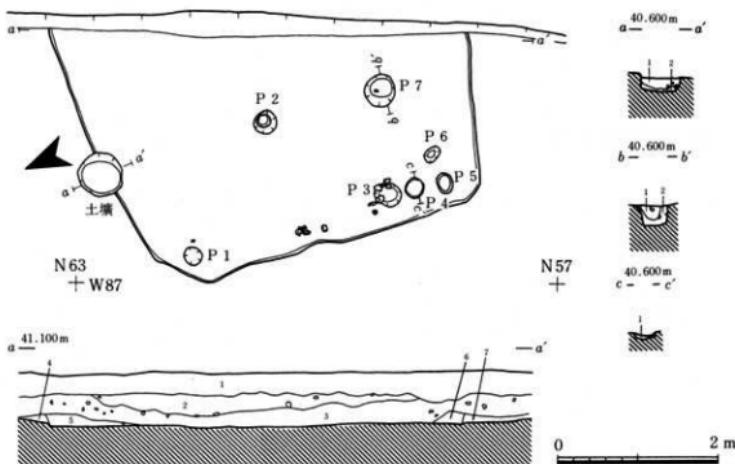
類は高台付きの環で本遺跡からは皿形のもの、楕形のもの、高台部のみとの3点が出土している。1、2の内面は磨滅しており、また外面には煤が付着する。なお1、2は同一個体の可能性が高い。3は底部切離し後不定方向にヘラケズリされ、また体部下端もヘラケズリされる。体部外面には煤が付着する。4の外底面には菊花文が見られる。また体部下半に正位で墨書「土カ」がある。

鉢 鉢B類(図5)が1点ある。鉢B類はロクロ成形の鉢で、5は口縁部を欠き底部切離しは回転糸切り無調整である。

磨石(図6)住居跡南西隅付近、土壤2の検出面から出土した。計6面に使用痕がある。

#### 竪穴住居跡S I 202(図27 図版8上)

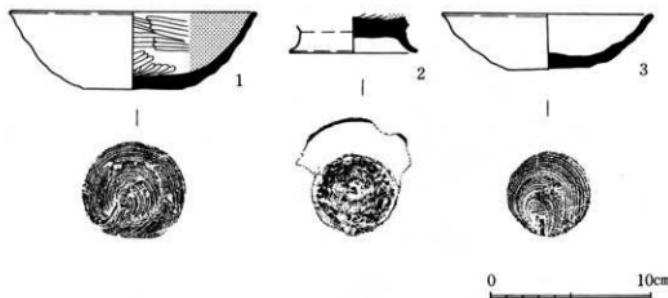
**遺構** 竪穴住居跡S I 202は、発掘区東壁北寄りから発見された住居跡で、東半分は発掘区外に延びる。規模は東西320cm以上、南北460cm、壁高は15cm前後で、平面形はやや歪んだ矩形を示すと解される。主軸は西壁で北で7°58' 東に偏する。壁の遺存状況は悪い。実際の壁の掘削は漸移層である4・7層上面から行われ、外傾する。埋土は漸移層を覆う3層が堆積している。3層下部にはそれぞれの壁際に5・6層がある。1層は耕作土。2層は住居埋土3層の窓みに厚く堆積した濃い黒褐色土層で、固く締まる。3層は濃い黒褐色土層だが2層よりは明るい色調。土質はやや粗く固い。5・6層はくすんだ暗褐色土層でやや密で固い。



第27図 S I 202竪穴住居跡

S I 202出土遺物観察表

No.	種別	出土地点	分類	法量			測量		地 色 調 成 像 考 写真図版	
				口径	底径	器高	外 面	内 面		
1	土鏡器 环	床 直	HCI	15.3	6.5	4.8	底面:回転糸切り無調整	ヘラケズリ→茶色地	微粒砂 HYRE3 良好	31-8
2	土鏡器 高凸环	床 直	HD	-	底面:回転糸切り無調整	2.2	底面:回転糸切り無調整	ヘラケズリ→茶色地	微粒砂 HYRE3 良好	32-1
3	須恵器 环	床 直	HF1	13.2	5.1	3.4	底面:回転糸切り無調整		微粒砂 D1TB44 秋實	32-2



第28図 S I 2022竪穴住居跡出土遺物

床面は砂礫層を一部掘り込んでいるが、平坦。周溝や貼床、叩き縮めなどはみられない。カマド位置は不明。北壁の一部を破壊して小土壤が掘られている。土壤の規模は径55cmの円形で、深さ20cmある。壁はていねいに掘削され、底も緩やかに窪む程度である。埋土は上層が軟質黒色土、下層が礫混じりの砂質黄褐色土である。床面には西寄りに集中して小柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>がある。このうちP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は径20～25cm、深さ5～10cmと浅く、埋土も軟質黒色土か濃い黒褐色土と共通する。一方、柱P<sub>7</sub>は径40cm前後、深さ25cmと比較的の規模が大きく、埋土も極暗褐色土と砂質黄褐色土と他の柱穴と異なる。掘り方の掘削もていねいで、主柱穴の一つと解される。

**遺物** (第28図 図版31-8、同32-1・2) 出土遺物には土師器環、須恵系土器環がある。また図示できなかったもののロクロ成形の土師器の裏片がある。

#### 土師器

**环** 环C I類(図1)が1点、环D類(図2)が各1点がある。环C I類はロクロ成形で、内面ヘラミガキ後黒色処理される。口径が15cm以上のもので底部切離し手法は回転糸切り無調整である。本遺跡には2点ある。

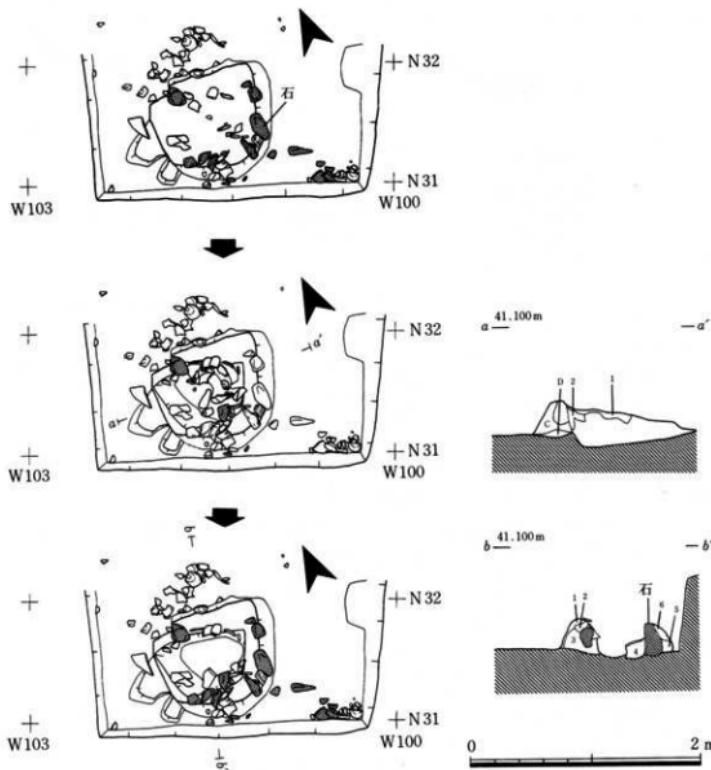
1は底部に黒斑が3ヵ所見られる。2は高台环の底部片で、回転糸切り後高台を接合する。

#### 須恵系土器

**环** 环F I類(図3)が1点ある。

#### カマド状遺構S X 109 (第29図 図版21～24)

**遺構** カマド状遺構S X 109は、発掘区南端、竪穴住居跡S I 103の直ぐ南側から発見された屋外カマドである。発見時の状況は高さ約30cmの大きな土塊であった。調査の結果、判明した規模は東西105cm、南北95cm、天井部は崩落していたが、現存での火床からの壁高は34cmある。燃焼部は奥行き55cm、幅35cmあり、そのまま西側に開く幅30cmの焚口に至る。主軸は東西方向にあり、北で89°00'東、すなわちほぼ磁北の東西方向に一致する。カマド本体は、長さ20～30cm、幅15cm前後の河原石を芯材として立て、西に焚口が開くようにU字形に配列して、基礎構造を造る(巻頭図版6・7参照)。石と石の隙間には補強材として、土師器裏など大型器種の破片を埋め、その上を黄褐色土シルトと灰白色粘土の混合土で覆い、本体を完成させている。発見時の焚口の手前には20～30cmの広がりで、灰白色粘土の塊が2ヵ所にみられたが、これは使用時での補強材か補修用のものと推定された。カマド壁



第29図 S X109カマド状遺構

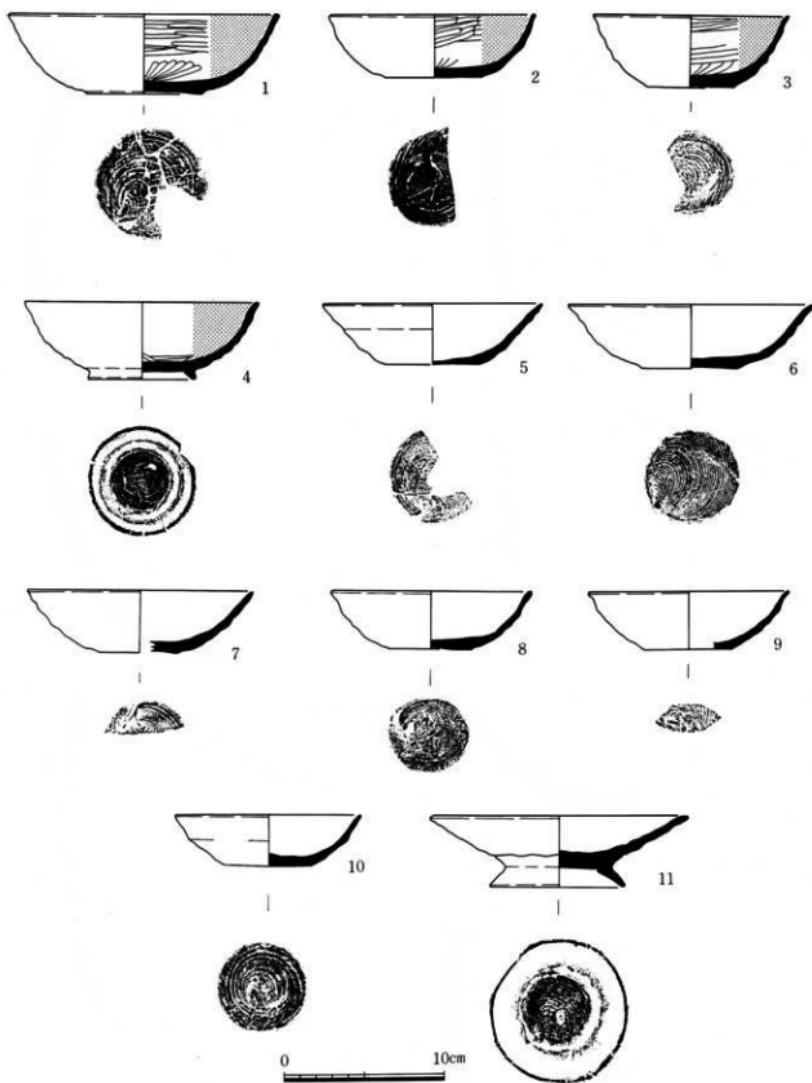
体の内側は混合土面が直に現れないように、河原石や土器片の広い側面によって構築されている。燃焼部の壁面や燃焼部に近い構築芯材は被熱によって赤褐色に変色している。

カマド周辺には、本体から崩落した目張り用と推定できる、ほとんどが被熱した土師器の破片が大量に発見されたが、関連する付属施設は発見できなかったので、単独に存在する遺構と判断した。また、他の例にみられる覆い屋に関わるような柱穴なども発見されなかった。

**遺物** (第30・31・32図 図版32-3~10、同33-3~9) 出土した遺物はほとんどがカマド袖材に転用されていたものである。土師器環、高台環、甕、須恵器環、甕、須恵系土器環、高台環、甕がある。

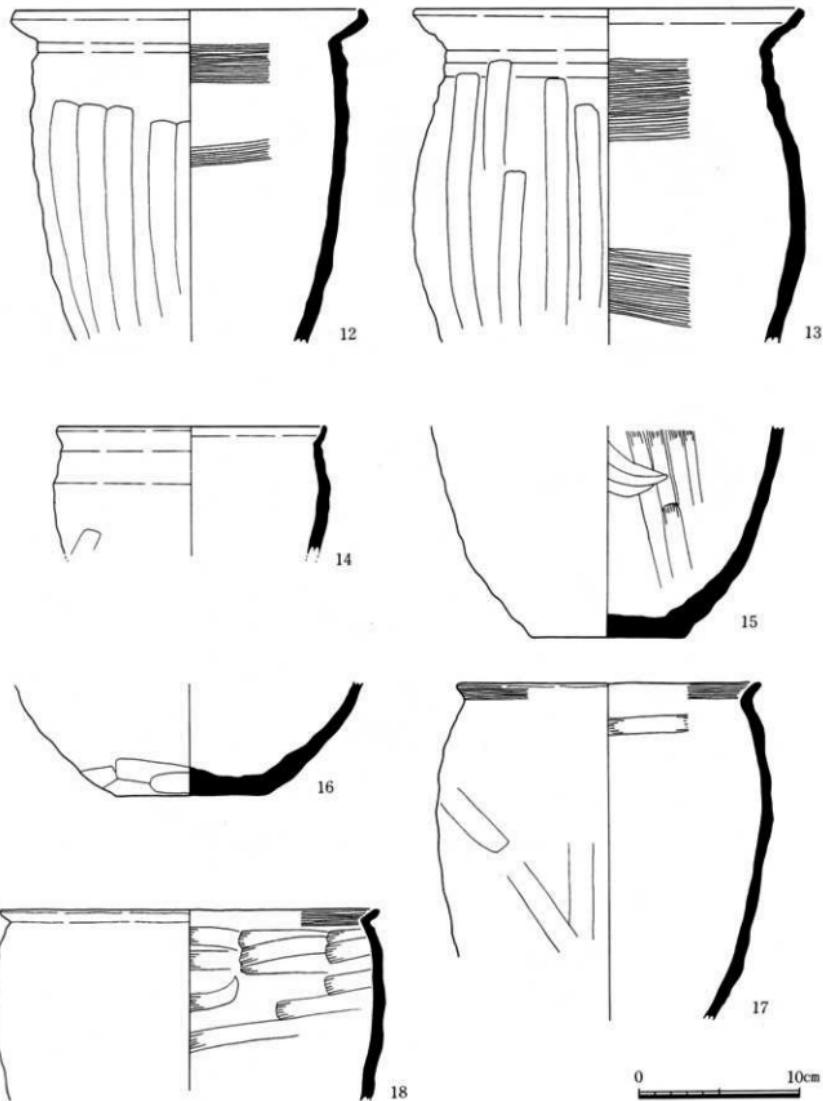
#### 土師器

**环** 环C I類(図1)が1点、环C II a類(図2~3)が2点、环D類(図4)が1点ある。1はやや大振りな环である。底部には線刻がある。4の体部内面はロクロミガキされ、見込み部は一定方向にヘラミガキされる。底部は回転糸切り後、高台を貼付る。高台接合部分の体部下端には押圧ヨコナ



第30図 S X 109カマド状遺構出土遺物

テ痕が残る。また体部下端から底部にかけて黒斑が見られる。



第31図 S X 109カマド状遺構出土遺物

■ 裸C I類(図12~13)が2点、裸C II類(図14)が1点、裸D I a類が2点(図15~16)、裸D I b類(図17~19)が3点、裸D II類(図20)が1点ある。裸C I類は口径が20cm以上あるロクロ成形の裸で、体部外面は上半からヘラケズリされ、体部内面は搔き取りの痕跡がある。本遺跡には2点ある。裸D I a類は非ロクロ成形の裸で口縁部は不明だが、体部が球胴の裸で、本遺跡には2点ある。裸D I b類は非ロクロ成形の裸で体部上半が丸みを帯び、最大径が体部上半にある。口縁部は短く「く」字状に屈曲するもので、本遺跡には3点ある。裸D II類は非ロクロ小型の裸で、裸D I b類同様口縁部が短く屈曲するもので、本遺跡には1点ある。

12、13は体部下半を欠くもので、12は口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁端部が上方に引きだされる。口縁部外面と体部内面全体に煤が付着する。13は体部上半が丸みを帯びる。体部外面に煤が付着する。14は口縁部から体部上半にかけて残存するもので、体部下半の一部がヘラケズリされ、内外面共に口縁部から体部上半にかけて煤が付着する。15、16は体部下半から底部にかけて残存するもので、いずれも磨滅している。15の底部はヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。体部外面に煤が付着する。16は体部下端がヘラケズリされ、底部も不定方向にヘラケズリされる。体部外面に

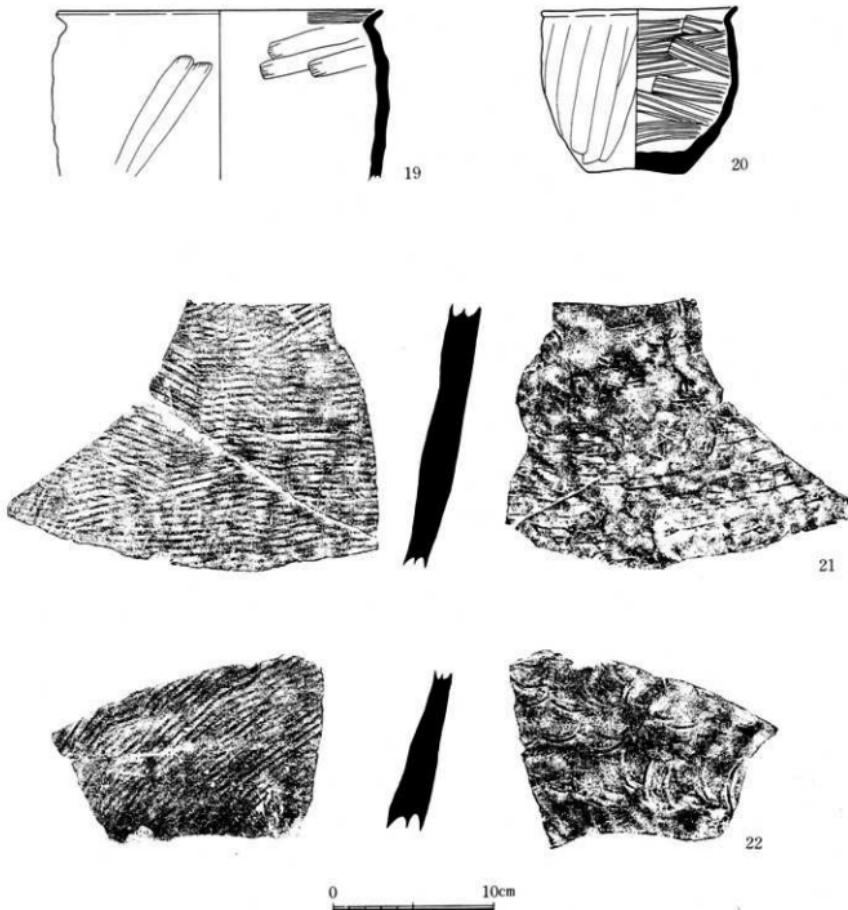
#### S X 109出土遺物觀察表

No.	種別	出土地点	分類	法量			調査		地色	調査成	備考	写真回数		
				口径	底径	高さ	外 面	内 面						
1	土器部 环	左袖内	裸C I	確定	14.6	7.3	4.9	底部：回転木切り無調型	ヘラケズリ一見色光澤	微粒砂	HYE66	軟質	底部微削り有	32-3-4
2	土器部 环	右袖内	裸C II	確定	9.0	3.0	3.9	底部：回転木切り無調型	ヘラケズリ一見色光澤	微粒砂	HYE74	良好		32-5
3	土器部 环	左袖内	裸C I	確定	12.0	5.4	4.5	底部：回転木切り無調型	ヘラケズリ一見色光澤	微粒砂	HYE12	良好		32-6
4	土器部 高台环	黒堀部	裸D I	確定	14.4	6.4	4.8	底部：回転木切り無調型	底部：アラカニタキ 底部A部：ヘラケズリ一見色光澤	微粒砂	HYE54	やや軟質		32-7
5	裸器部 环	左袖内	裸E	確定	13.7	6.0	4.8	底部：回転木切り無調型		微粒砂	HYE54	不良		
6	裸器部 环	黒堀部	裸E	確定	13.5	6.0	4.1	底部：回転木切り無調型		微粒砂	HYE65	不良		32-8
7	裸器系土器部 环	遺構跡名 中出土	裸F I	確定	12.8	4.8	3.9	底部：回転木切り無調型		微粒砂	HYE64	やや軟質		
8	裸器系土器部 环	遺構跡名 中出土	裸F I	確定	12.4	5.0	4.5	底部：回転木切り無調型		微粒砂	HYE63	軟質		
9	裸器系土器部 环	左袖蔵庫 内	裸F I	確定	12.4	5.4	3.6	底部：回転木切り無調型		微粒砂	HYE54	軟質		
10	裸器系土器部 环	右袖内	裸F II	11.6	5.4	3.2	底部：回転木切り無調型		微粒砂	HYE65	軟質	灯明照	32-9	
11	裸器系土器部 高台环	左袖内	裸G	確定	15.8	8.4	4.5	底部：回転木切り無調型		中粒砂	HYE65	良好		32-10
12	土器部 傷	右袖内	裸C I	確定	21.6	—	西北 21.7	体部：ヘラケズリ	底部：小口縫合と調型	粗粒砂	HYE54	やや軟質		33-3
13	土器部 傷	左袖内	裸C I	確定	24.0	4.0	西北 21.7	底部：ヘラケズリ	底部：小口縫合と調型	中粒砂	HYE78	良好		33-4
14	土器部 傷	右袖内	裸C II	確定	17.0	—	西北 8.5	底部半上一部ヘラケズリ		粗粒砂	SYE49	良好		33-5
15	土器部 傷	右袖内	裸D I	—	確定	9.5	西北 14.4	底部：ヘラケズリ	底部：ヘラナデ	粗粒砂	HYE45	軟質		33-6
16	土器部 傷	右袖内	裸D I	—	確定	9.4	西北 7.6	本器下部：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ		粗粒砂	SYE54	軟質		
17	土器部 傷	黒堀部	裸D I	—	確定	19.0	—	21.0 口縁部：ヨコナナ	底部：ヘラナデ	粗粒砂	SYE54	軟質		33-7
18	土器部 傷	黒堀部	裸D I	確定	23.5	—	西北 12.0	口縁部：ヨコナナ	底部：ヘラナデ	粗粒砂	SYE54	軟質		33-8
19	土器部 傷	黒堀部	裸D I	確定	20.4	—	西北 12.2	底部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナナ	粗粒砂	HYE54	やや軟質		
20	土器部 傷	左袖蔵庫 内	裸D II	12.3	6.0	10.2	底部：ヘラケズリ	底部：ハセメ	中粒砂	HYE12	軟質		33-9	
21	裸器部 傷	遺構跡名 中出土	裸F	—	—	—	平行タキ	平行タキ	中粒砂	HYE52	良好			
22	裸器部 傷	遺構跡名 中出土	裸F	—	—	—	平行タキ	タキ(直角底)	中粒砂	HYE52	良好			

わずかであるが煤が付着する。いずれも焼成は軟質である。17、18、19のいずれも軟質で磨滅しており、17の体部外面にはヘラケズリ痕跡があり、19の外面にもヘラナデされた痕跡がある。全ての内面にはヘラナデされた痕跡がある。17の口縁部内外面と19の体部外面には煤が付着する。20は体部外面が継位方向のヘラケズリ、底部も不定方向にヘラケズリされる。内面は横位方向にハケメ調整される。焼成は軟質である。

#### 須恵器

壺 壺E類（図5～6）が2点ある。6は口縁部がやや外反するもので、体部外面から底部にかけて



第32図 S X109カマド状遺構出土遺物

S I 105、同16.8m<sup>2</sup>のS I 201、同10.7m<sup>2</sup>のS I 103が属し、全体が不明ながらも一辺が4.35mのS I 104は床面積16m<sup>2</sup>前後の規模と推定できる。ここには奈良時代以前の集落に一般的に見られる大型、中型、小型の各住居からなる一単位をみることができる。なお、A-a群の集落は東地区には展開していないことから、その主体は発掘区西側より西方にあると考えられる。

**B期** S I 107住居跡1棟のみである。カマドは発見されず、床面積19.1m<sup>2</sup>ある。

**C期** 床面積7.43m<sup>2</sup>で東カマドのS I 106と、同14.8m<sup>2</sup>以上でカマド位置不明のS I 202の2棟がある。床面積の規模や2~3棟一組の集落構成は、王朝国家期の集落のありかたを特徴的に示している。

## 2. 土壙跡

S X 117、S X 110の2基の土壙跡がある。形状は不整長方形ないし不整形で、前者は床面積4.54m<sup>2</sup>の小豎穴状遺構、後者は約5m<sup>2</sup>の砾溜遺構である。小豎穴状遺構の床面には、挙大の偏平砾多数が散在しており、性格は砾溜に近いと推定される。土壙跡S X 110の砾溜遺構内には大量に砾が混入し、その中には被熱で赤色に変色している砾もいくつかある。土壙跡の埋土中及び床面からともに、奈良時代の土器様式の表などの細片が数点出土しており、前述のA期に属するものである。

## 3. カマド状遺構

S X 116、S X 109の2基がある。ともに屋外カマドとして使用されたと考えられるが、風雨等を遮る覆い屋に関わる施設は周辺からは発見できなかった。2基は形態、構造が異なる。S X 116は180×75cmの東西方向に長い、わずかに胴張りのある長方形を示し、この中の西半部に砾を基礎構造にして、その上をスサ入り粘土で覆う構築法のカマドである。天井部の有無は、検出段階では不明であったが、スサ入り粘土による側壁とともに、燃焼部、焚口部の設計に計画性が認められ、窯業生産に関わる知識が背景にあると推察される。ロクロ成形の土師器表の破片から、B期ないしC期に属するものである。

S X 109は東西105×南北95cm、天井部は崩落しているが、火床からの壁高は34cmあり、焚口を西に開く。カマド本体は、河原石を芯材に立て、焚口部を除いてU字形に配列して基礎構造を作り、その間には補強材として、土師器表など大型器種の破片を据え、その上を灰白色粘土を主体にした混合土で覆う構築法である。カマドの基本的構築方法は、いわゆる豎穴住居跡の竈へついと異なるところはなく、同一のカマド構築技術で屋外に単独で作られたものと判断した。比較的多くの須恵系土器が出土しており、C期の時期であることは明らかである。

## 遺物

発掘調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、須恵系土器、砾石、磨石などがある。ここでは出土土器の分類を中心に記述する。

### 1. 土師器

**坏** 器形によって、A~Dに区分される。坏の内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理される。坏Aは体部外面に段、稜線、沈線などをもつもので、底面は丸底、平底風の丸底、平底の3種がある。坏Bは口径に比して器高が低い皿状を呈する坏で、外面に段や沈線をもつ。坏Cはロクロ成形の坏で、底部の切離しは回転糸切りである。坏Dは高台坏のグループで、高台坏はすべて貼付け高台である。

**坏A I** 体部の内外面に段を有し、平底風の丸底を呈する。

**坏A II** 口径12cm以上あり、体部外面に段あるいは稜線をもつが、対応する内面には段、稜線をもたない。底面は平底に近い丸底。

**坏A III** 口径12cm以下で、体部外面に段、稜線、沈線などをもつが、対応する内面には段、稜線などをもたない。底面は平底風の丸底のほか、丸底、平底などがある。

- 坏B I 口径が16cm前後で、底部付近にゆるやかな段をもつ。
- 坏B II 口径が13cm前後と小さく、外面体部に沈線がめぐるが、全周しない。
- 坏C I 口径15cm以上のもので、底部は回転糸切り無調整。
- 坏C II a 口径15cm以下で、回転糸切り無調整。
- 坏C II b 口径15cm以下で、底部切離し後、不定方向にヘラケズリされる。ケズリは体部下端から底部にかけてなされる場合もある。
- 坏D 身の浅い皿型、やや深い椀型などがある。
- 甕 器形によって、A～Dに区別される。甕Aはいわゆる長甕で、法量から大・中・小の3種に分かれる。甕Bは体部が球胴を呈する丸甕。甕Cは成形にロクロを使用した「陸奥型甕」。甕Dは成形にロクロを使用せず、口縁部が短く「く」字状に外側に屈曲するものである。
- 甕A I a 本遺跡の長甕の主体を占める。口径18cm以上、器高30cm以上、底径9.0cm以上を測る。最大径が口縁部にあり、外傾ないし外反する口縁部は横ナデされ、頭部に段あるいは稜線をもつ。
- 甕A I b 甕A I aと同じ法量だが、頭部に段、稜線をもたない頭部無段の甕。
- 甕A II a 口径18cm以下、器高15～30cmの中型の甕で、最大径が口縁部にあり、口縁部は横ナデされ、頭部に段あるいは稜線をもつ。
- 甕A II b 甕A II aと同一法量。口縁部が横ナデ後、ヘラケズリあるいはハケメ調整により、頭部に段をもたない頭部無段の甕。
- 甕A III a 口径、器高15cm以下の小型の甕。最大径が口縁部にあり、口縁部は横ナデされ、頭部に段あるいは稜線をもつ。
- 甕A III b 甕A III aと同一法量で、頭部が無段のもの。
- 甕B 体部中央やや上位に最大径をもつ丸甕。口縁部はやや強く外反し、頭部に段をもつ。胎土・焼成がきわめて良い。
- 甕C I 口径20cm以上あるロクロ成形の甕。口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は上方へ挽きだされる。体部外面は上半部からヘラケズリされ、内面は搔き取り調整である。
- 甕C II 口径が20cm以下のロクロ成形の小型甕。底部切離しは回転糸切り無調整。
- 甕D I a 成形にロクロを使わない甕。口縁部不明だが、体部は球胴を呈し、底部はヘラケズリされる。
- 甕D I b 成形にロクロを使わず、体部上半部が丸みを帯び、最大径が体部上半部にある。口縁部は短く「く」字状に外側に屈曲する。
- 甕D I c 成形にロクロを使わない甕で、口縁部が横ナデされる「ヨコナデ型甕」。
- 甕D II 成形にロクロを使わない小型甕で、甕D I bと同様口縁部が短く屈曲するもの。底部は不定方向にヘラケズリされる。
- 鉢 器形によって、A・Bに区別される。鉢Aは外面に段をもつものと、もたないものがあるが、ともに内面には段、稜線はない。底部は平底。鉢Bはいわゆるロクロ成形の鉢。
- 鉢A I 口径15cm以上のもので、外面に段をもつ。
- 鉢A II 口径15cm以下のもので、外面に段、稜線などはない。
- 鉢B ロクロ成形の鉢で、底部は回転糸切り無調整。
- ## 2. 須恵器
- 坏 坏Eの1種のみである。

环E 口径13.7—15.2cm、器高4.4~4.8cmある。いずれも焼成は良くない。底部は回転糸切り無調整。

甕F 甕Fの1種のみである。

环F 体部片で、外面平行叩き、内面や幅の広い平行叩きと青海波文を併用し、わずかに擦り消している。

### 3. 須恵系土器

环 器形によって、F・Gに区別される。环はすべて回転糸切り無調整。环Fは法量によって2種がある。环Gは高台环である。

环F I 口径12cm以上のもので、内面に油煤が付着し、灯明皿に転用されるものがある。

环F II 口径12cm以下のもので、内面に油煤が付着し、灯明皿に転用されるものがある。

环G 高台环で、高台部は貼付け高台である。

以上、造構と遺物に分けて記述してきた。土師器环A・B、甕A・B、鉢Aは奈良時代的土器様式であり、造構期区分のA期に属する。土師器环C・Dは造構期区分のB・C期いずれにもみられる。また、土師器鉢BはB期、須恵器环EはC期にその主体がある。須恵系土器环F・Gは甕C・D、須恵器甕Fとともに造構期区分のC期に属するものである。

それぞれの年代については、これまでの水沢地方の発掘調査成果から、A期を8世紀第3四半期前後、B期を9世紀後半代中心に、C期を10世紀前半代に比定しておく。



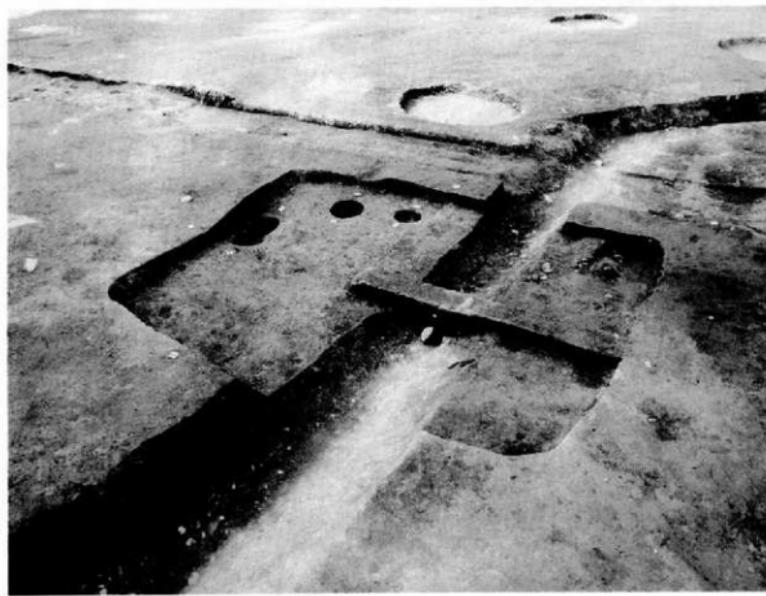
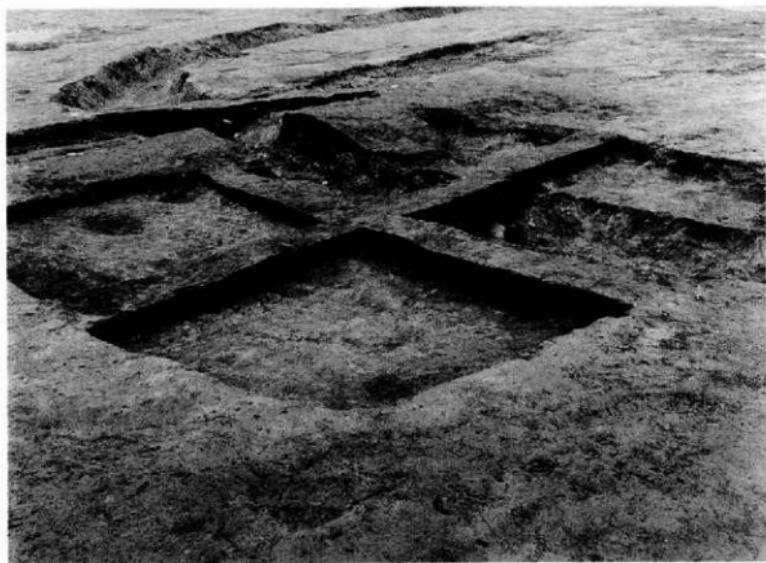
図版1 上 西地区発掘区全景 (西より)

下 東地区発掘区全景 (北より)



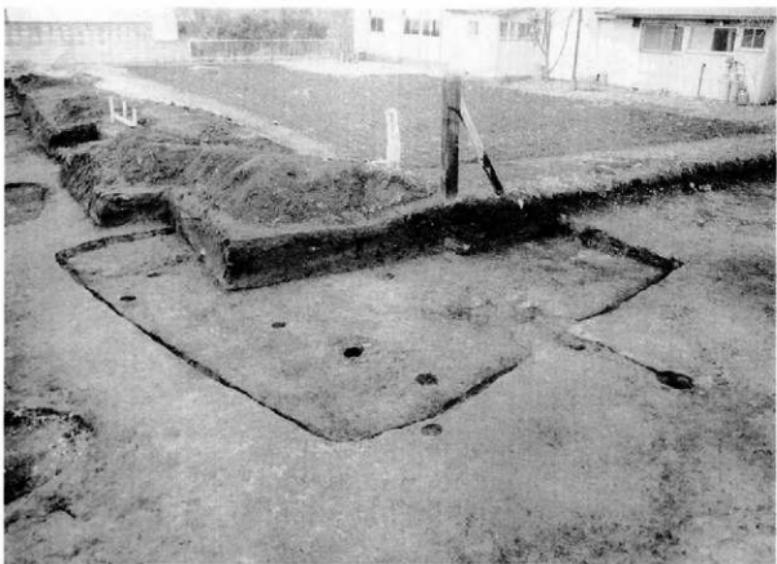
図版 I 上 西地区発掘区全景 (西より)

下 東地区発掘区全景 (北より)



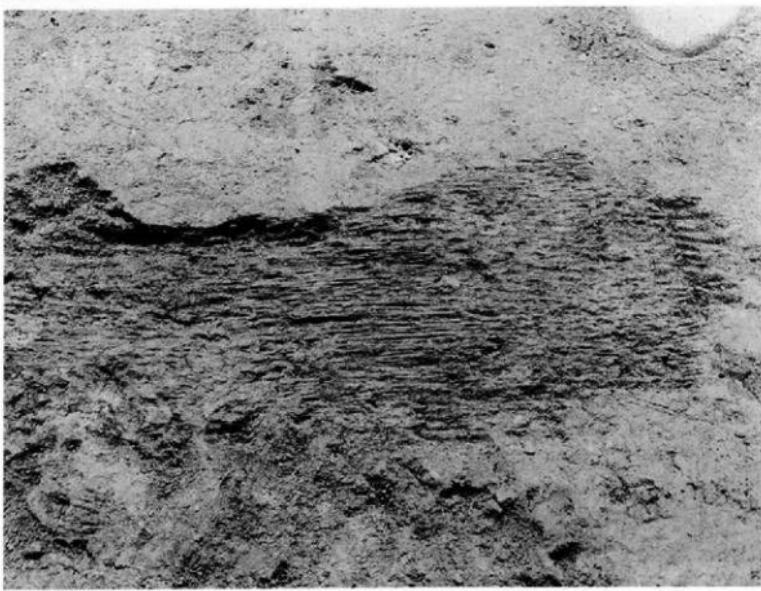
図版2 上 SII 101竪穴住居跡全景 (南西より)

下 SII 101竪穴住居跡全景 (北東より)

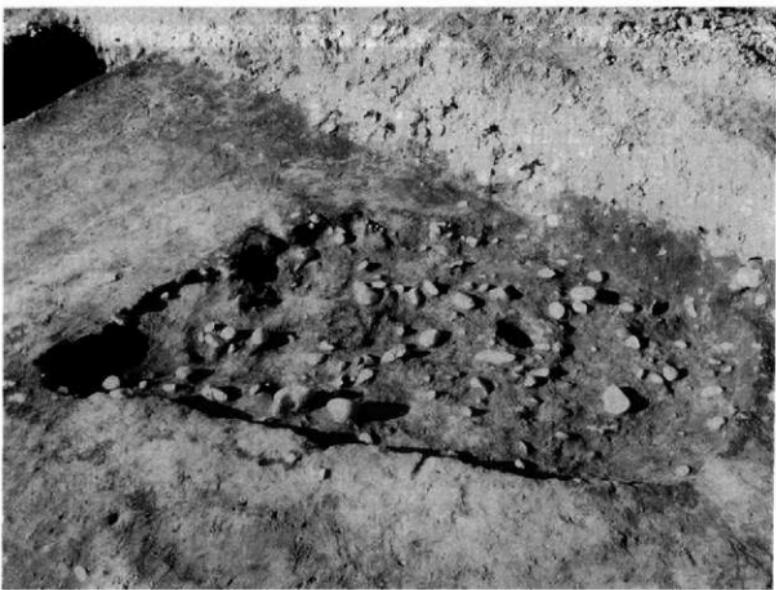
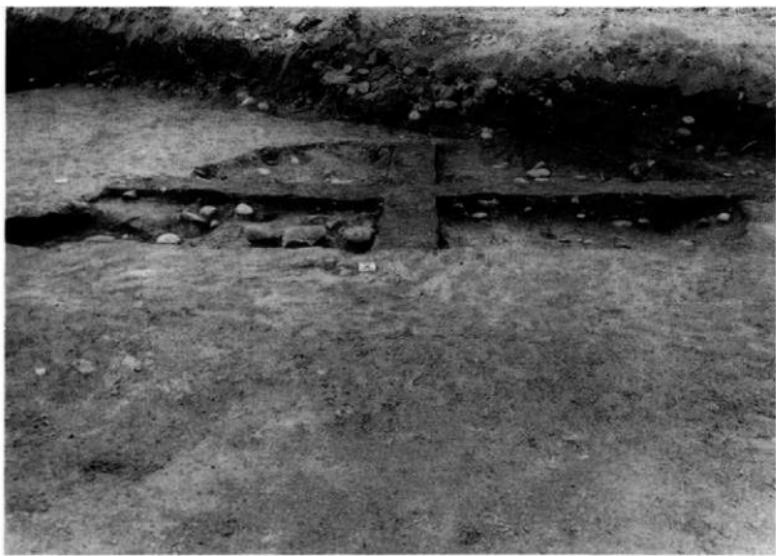


図版3 上 SII-102豎穴住居跡炭化材検出状況 (北西より)

下 SII-102豎穴住居跡全景 (北西より)



図版4 上 S1102堅穴住居跡カマド付近状況 (南東より)  
下 S1102堅穴住居跡茅材検出状況 (西より)



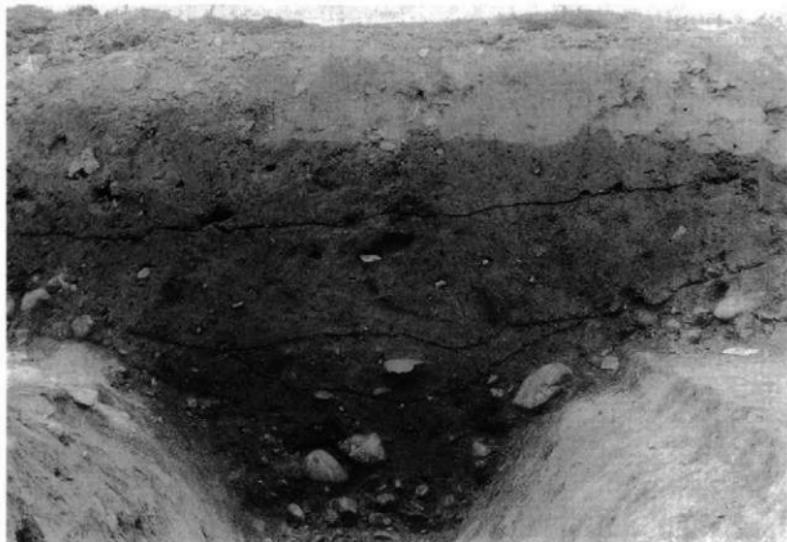
図版5 上 SX117土壤跡検出状況 (南東より)

下 SX117土壤跡全景 (南東より)



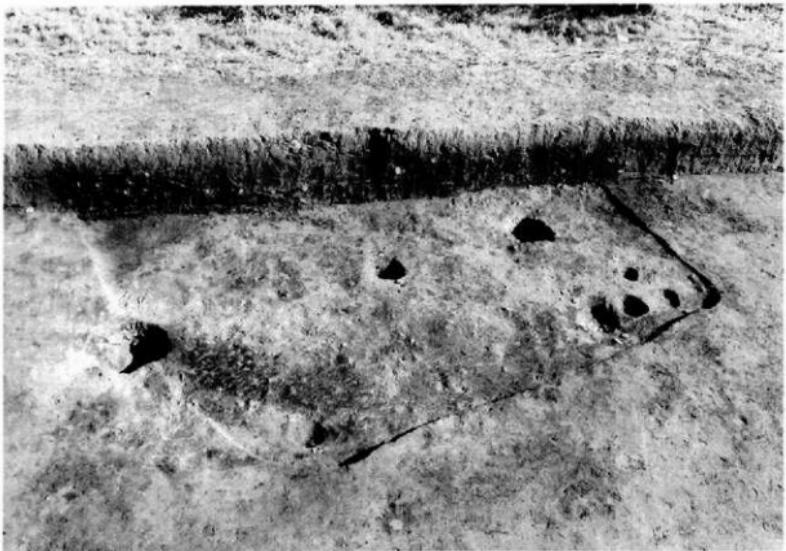
図版 6 上 SX110土壤跡検出状況 (南より)

下 SX110土壤跡全景 (南より)



図版7 上 SD111溝跡西壁埋土状況 〈東より〉

下 SD111溝跡検出状況 〈西より〉

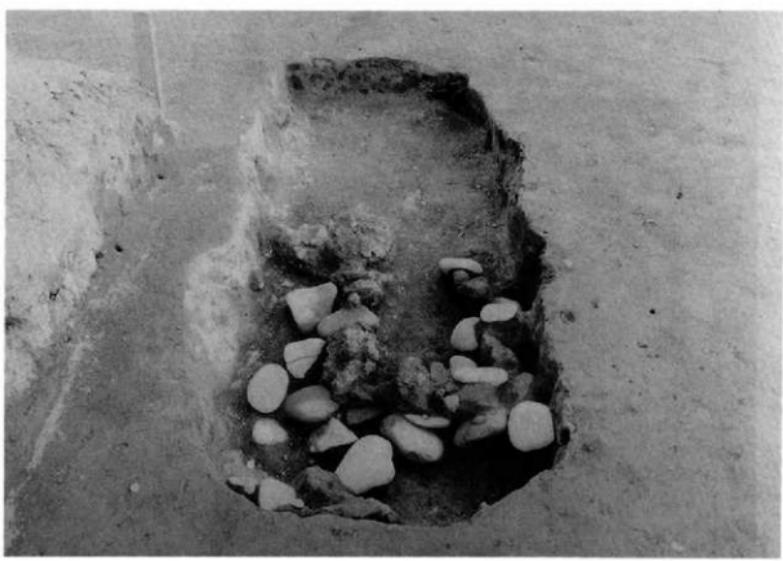
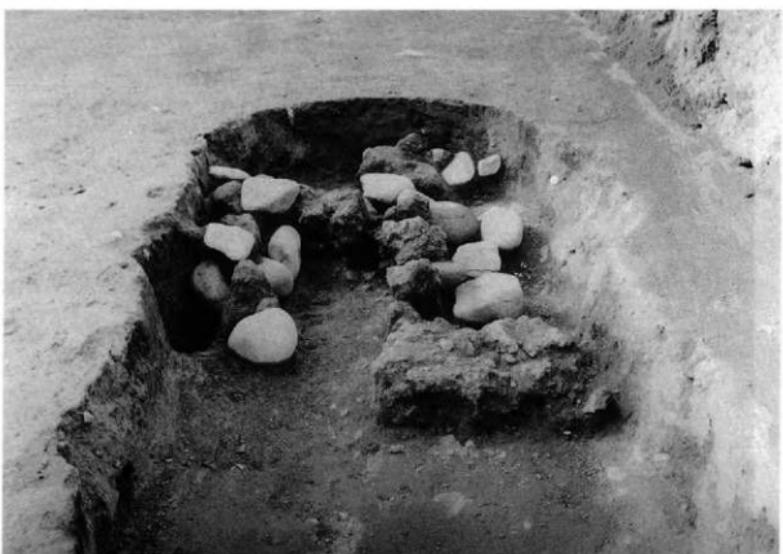


図版8 上 SI202竪穴住居跡全景

(西より)

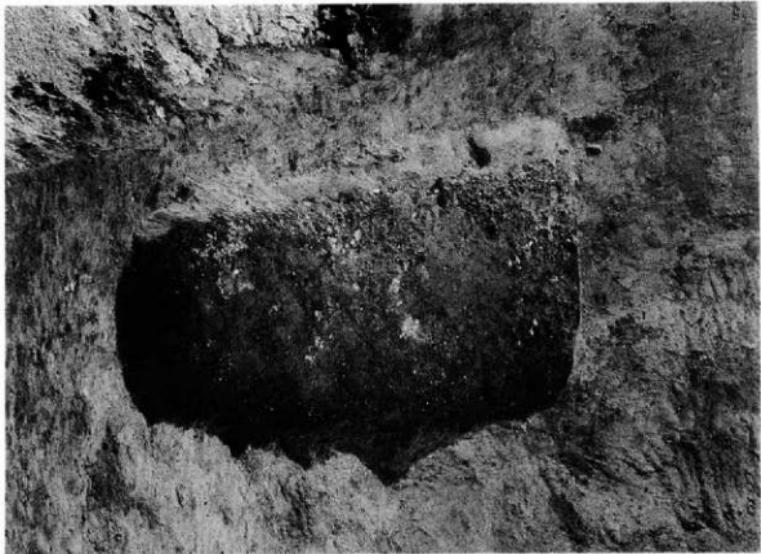
下 SD111溝跡・SD112溝跡全景

(南西より)



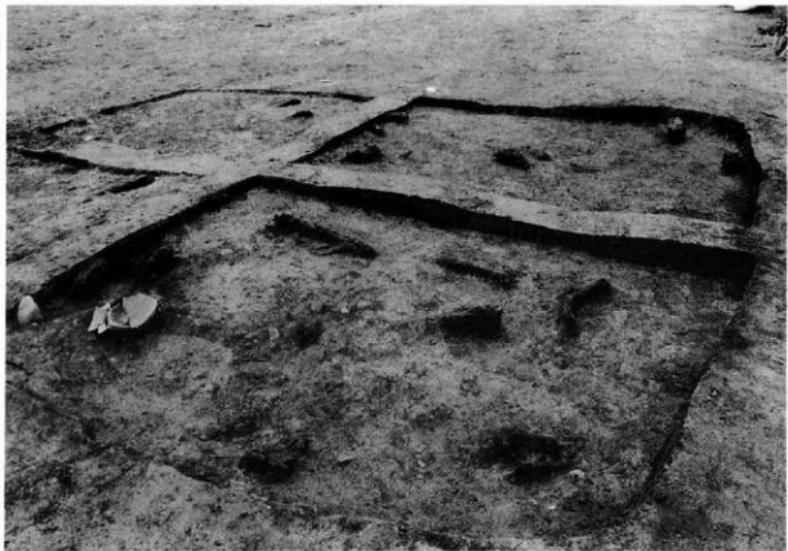
図版9 上 S XI 16カマド状造構検出状況 (東より)

下 S XI 16カマド状造構検出状況 (西より)

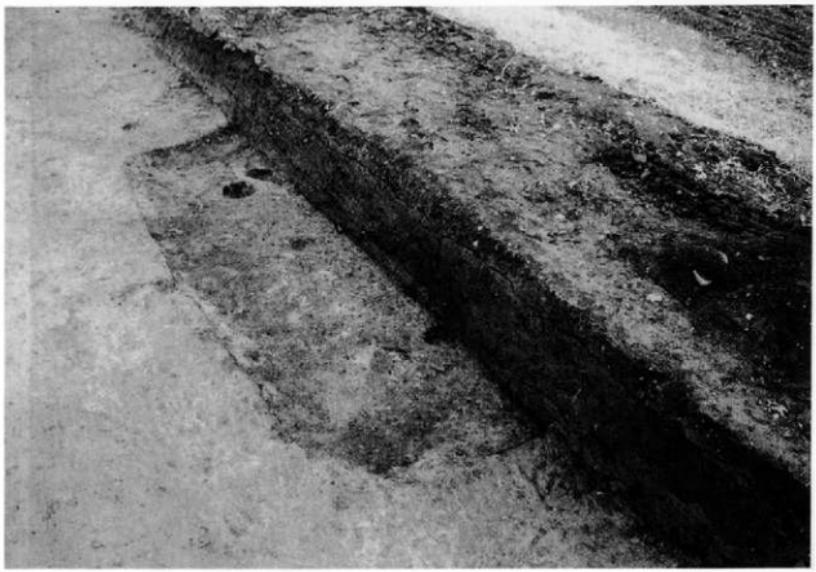
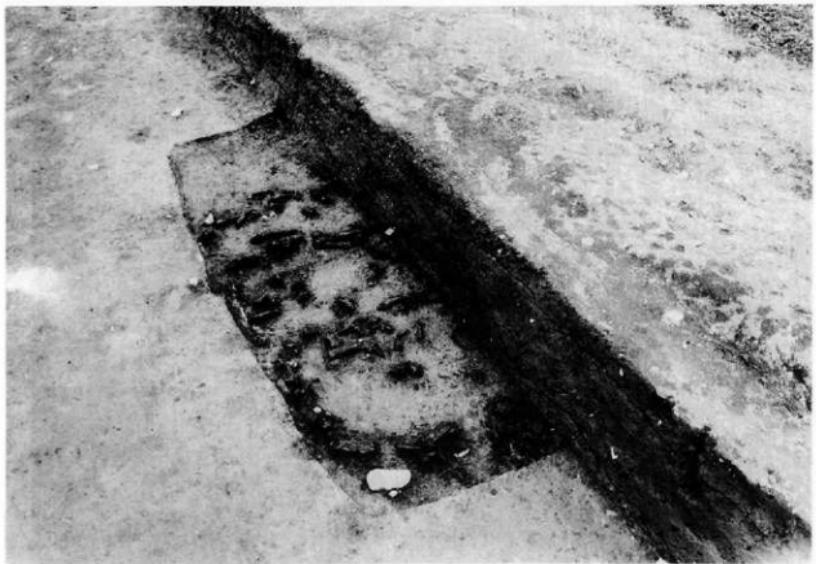


図版10 上 SX116カマド状造構完掘状況 (東より)

下 SX116カマド状造構全景 (東より)

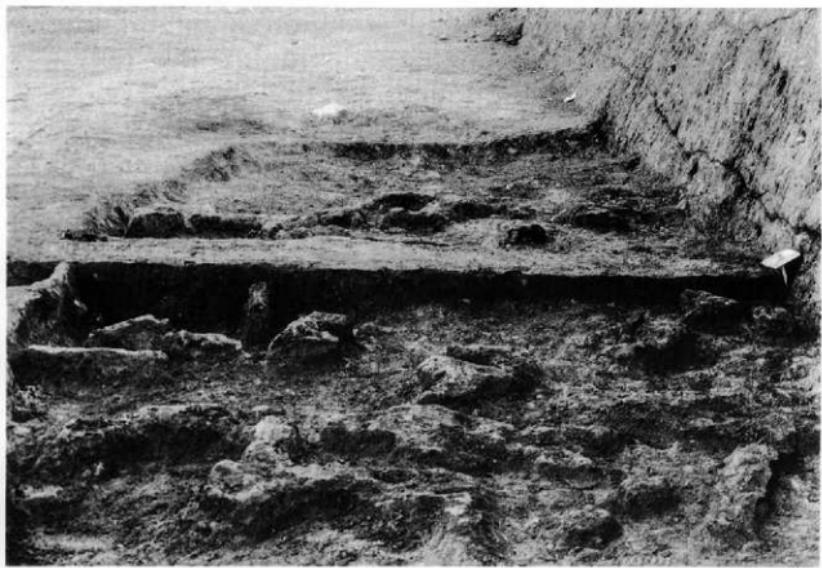


図版11 上 SII 103 穹穴住居跡炭化材検出状況 (南西より)  
下 SII 103 穹穴住居跡全景 (西より)



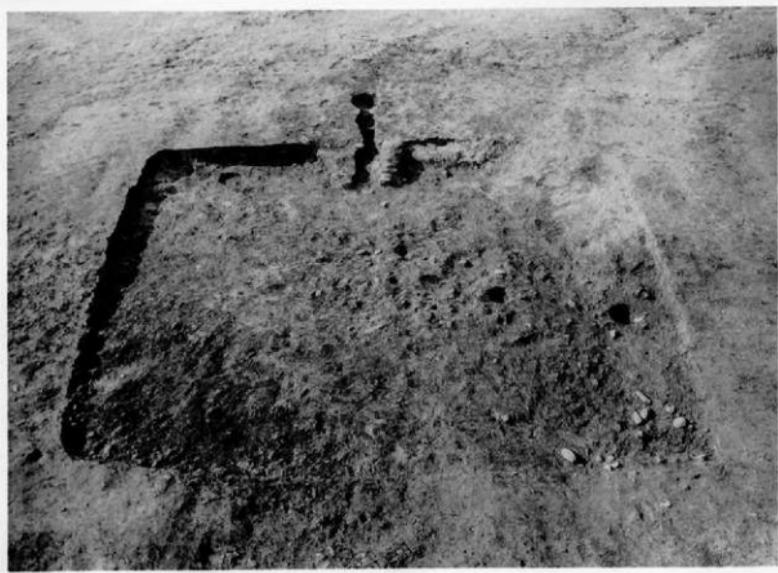
図版12 上 S I 104 竪穴住居跡炭化材検出状況全景 (北西より)

下 S I 104 竪穴住居跡全景 (北西より)



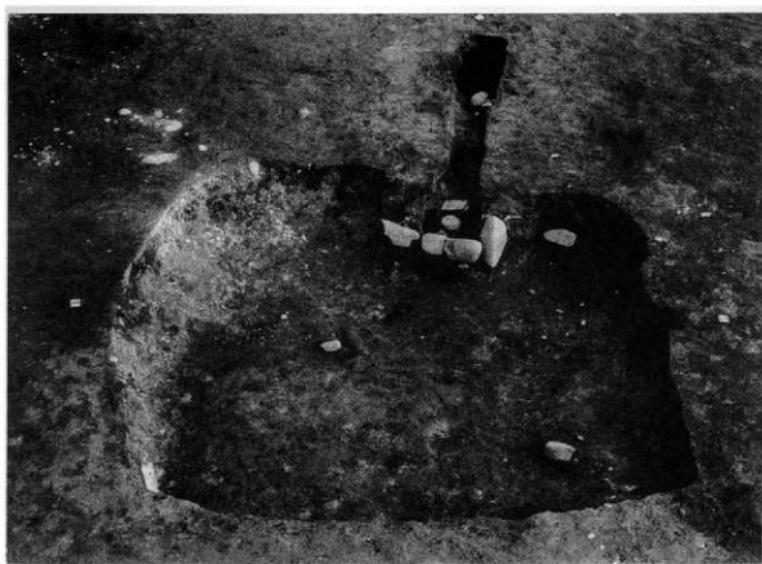
図版13 上 S I 104竪穴住居跡炭化材検出状況 (西より)

下 S I 104竪穴住居跡炭化材検出状況 (北東より)



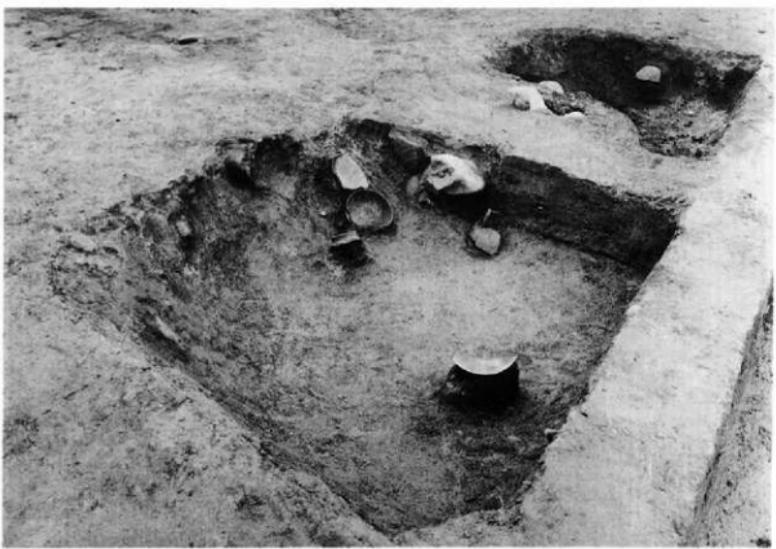
図版14 上 S I 105竪穴住居跡炭化材検出状況全景 (東より)

下 S I 105竪穴住居跡全景 (東より)



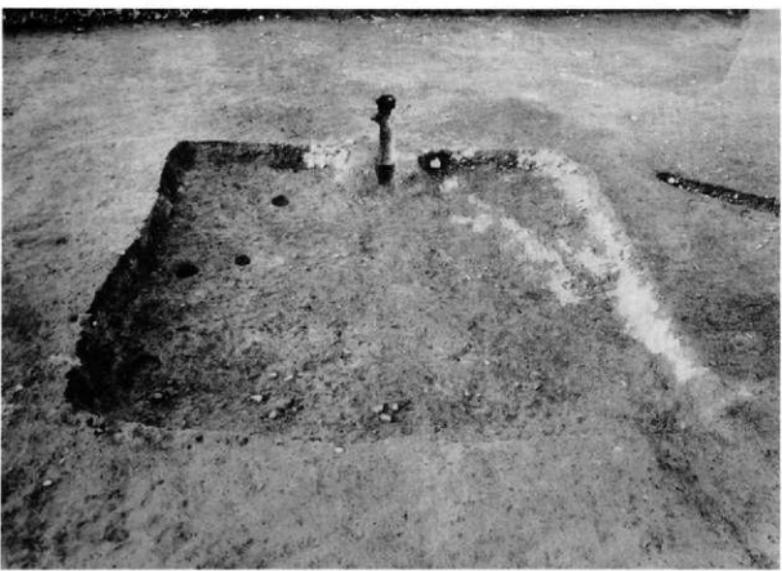
図版15 上 S I 106竪穴住居跡全景 (西より)

下 S I 106竪穴住居跡カマド全景 (西より)



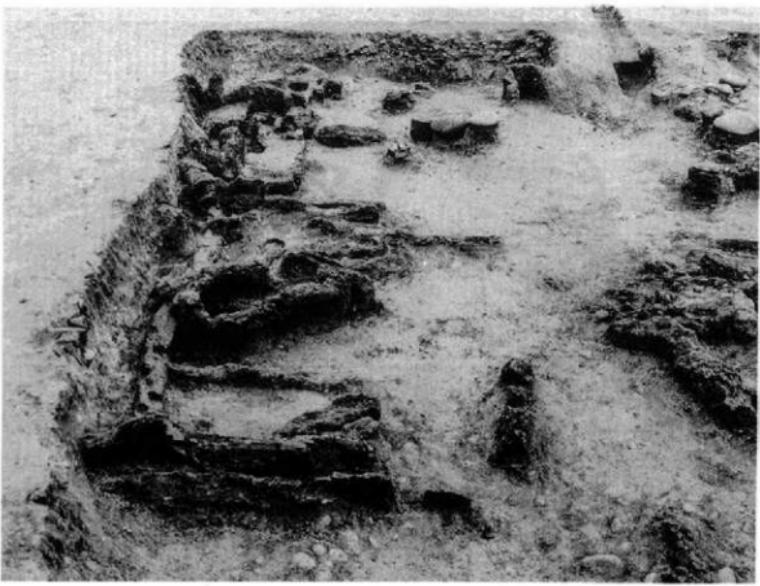
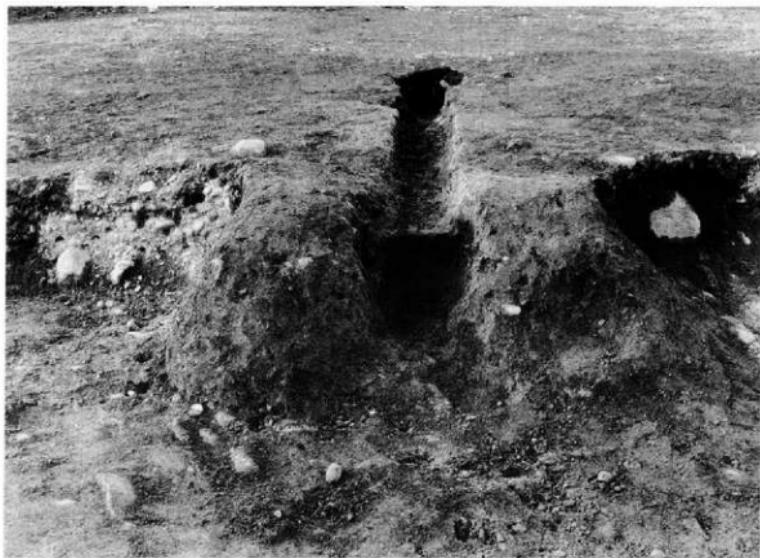
図版16 上 S I 106竪穴住跡カマド立割り状況 (南西より)

下 S I 106竪穴住跡遺物出土状況 (北より)



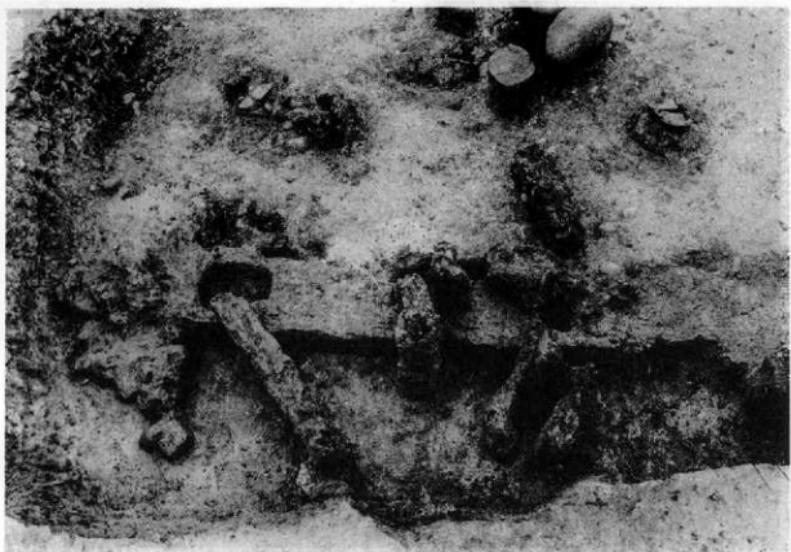
図版17 上 S I 201竪穴住居跡炭化材検出状況全景 (東より)

下 S I 201竪穴住居跡全景 (東より)

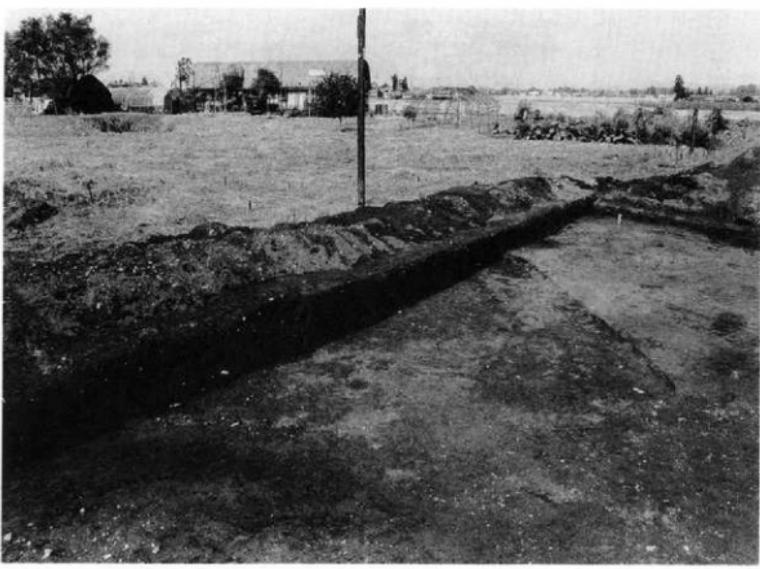
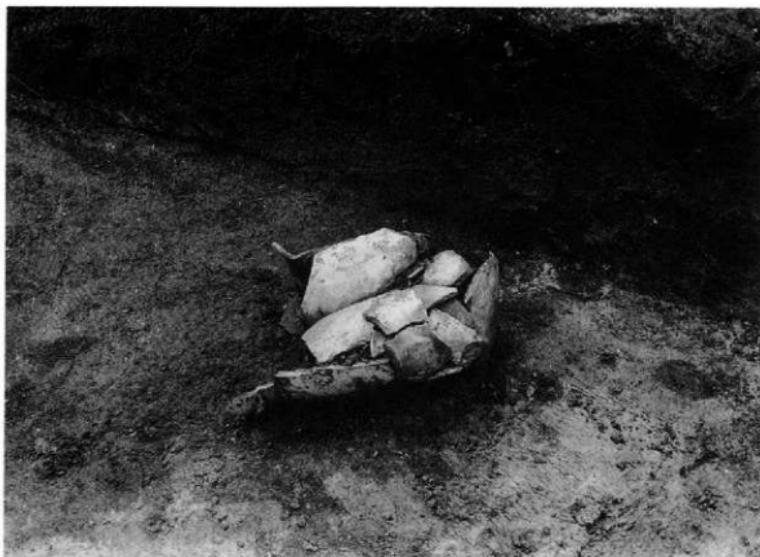


図版18 上 S-201竪穴住居跡カマド全景 (東より)

下 S-201竪穴住居跡南壁際炭化材 (東より)

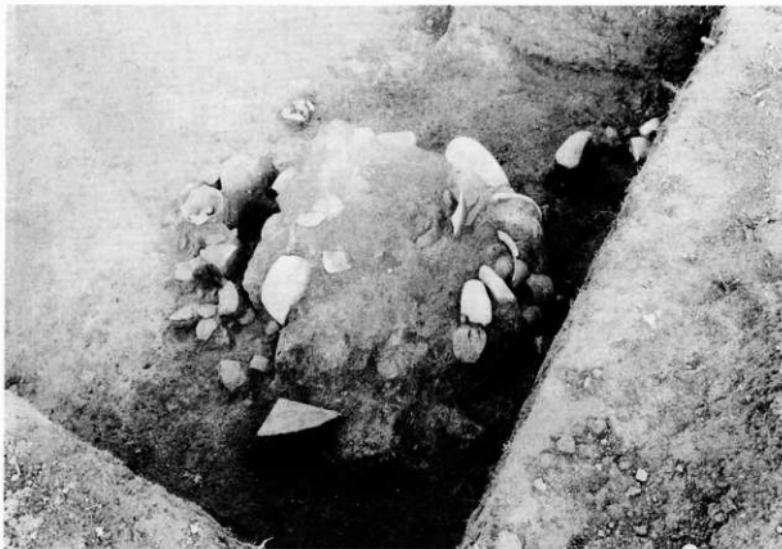


図版19 上 S I 201竪穴住居跡南壁際炭化壁板材 (南より)  
下 S I 201竪穴住居跡南壁際炭化垂木材と横材 (南より)



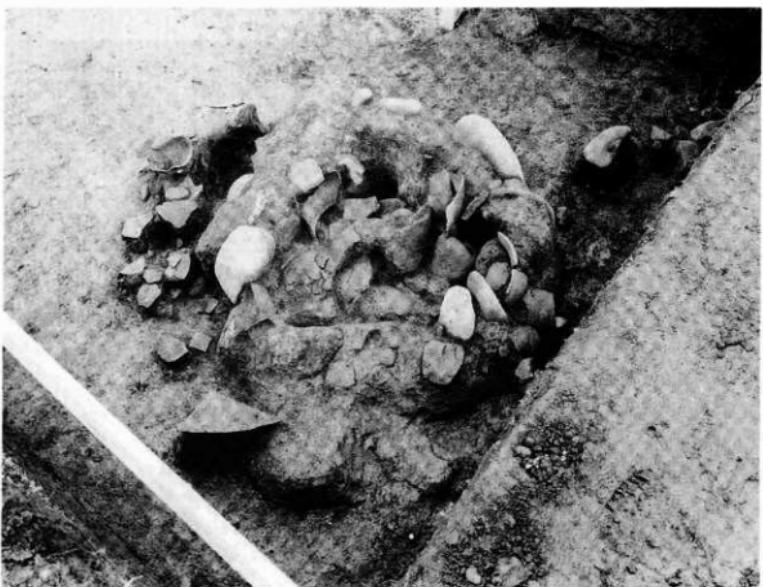
図版20 上 S I 108竪穴住居跡遺物出土状況 (北東より)

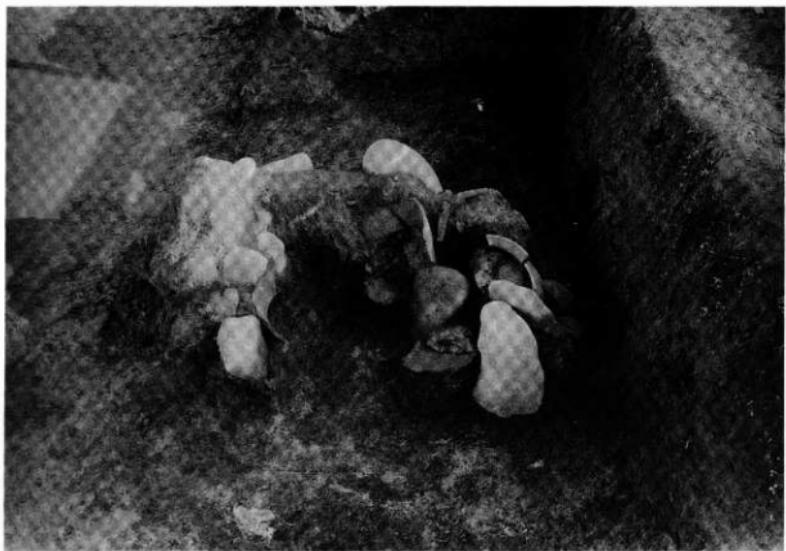
下 S I 108竪穴住居跡全景 (南東より)



図版21 上 S X 109カマド状遺構検出状況 (南西より)

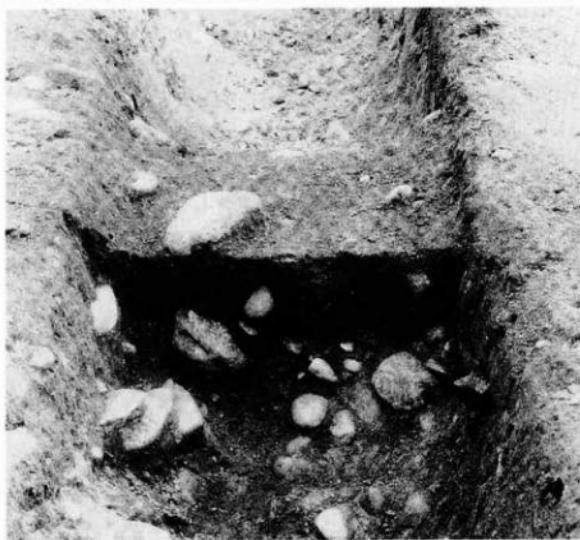
下 S X 109カマド状遺構東西立割り状況① (北より)





図版24 上 S X109カマド状遺構完掘全景 (西より)

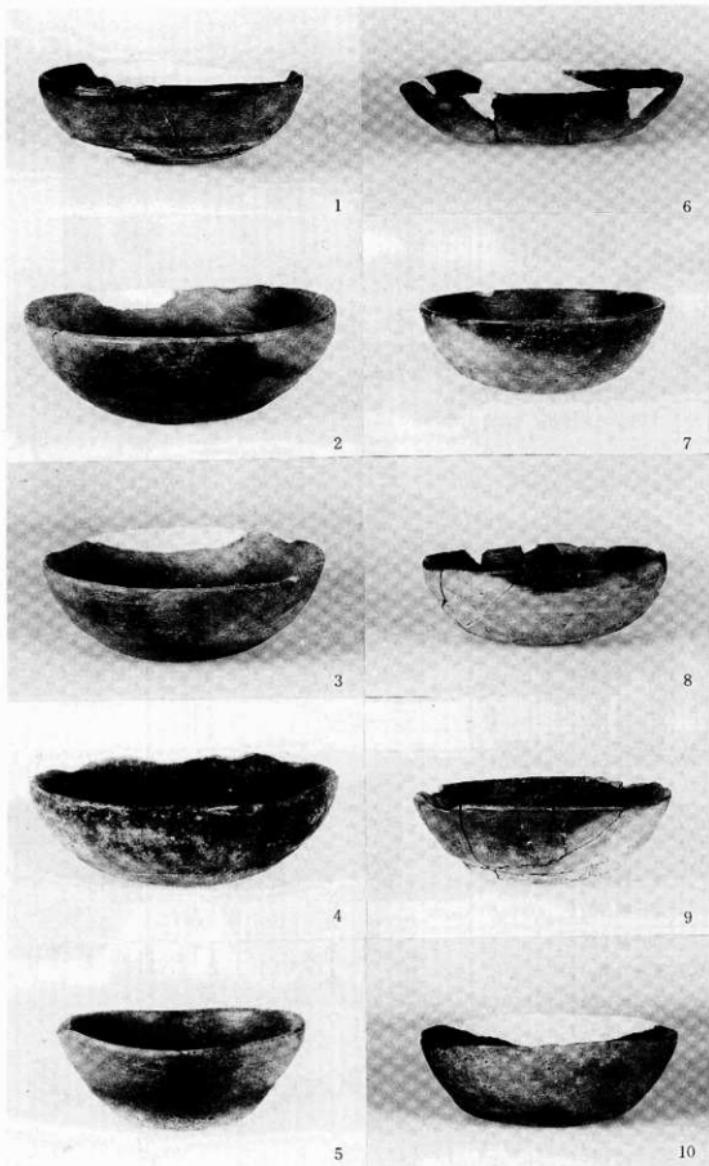
下 S X109カマド状遺構立割り状況② (北より)



図版25  
上 SK118  
土壤跡全景  
(南西より)  
下 SK118  
土壤跡埋土状況  
(南西より)

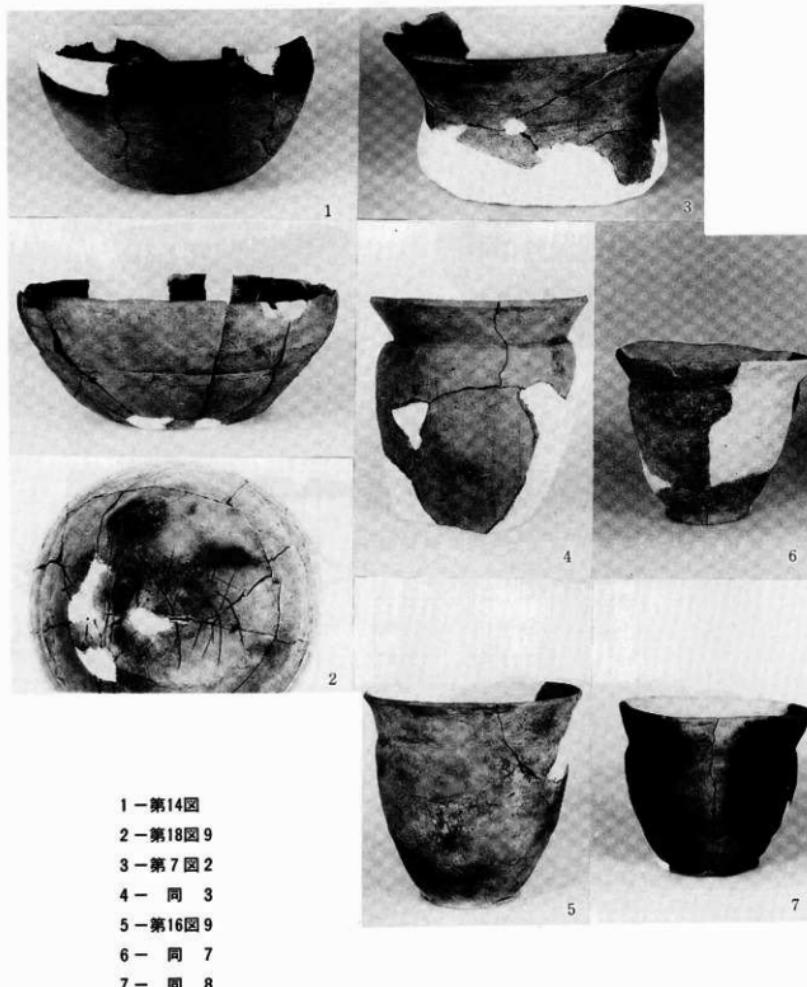


图版26 上 S I 104竖穴住居跡出土土器一括  
下 S I 105竖穴住居跡出土土器一括



图版27 S I 102·104·105竖穴住居跡出土遺物

- |         |         |         |         |          |
|---------|---------|---------|---------|----------|
| 1—第7図1  | 2—第16図1 | 3—第16図2 | 4—第16図3 | 5—第16図4  |
| 6—第18図1 | 7—第18図2 | 8—第18図3 | 9—第18図4 | 10—第18図6 |



図版28 S 1 102・103・104・105竪穴住居跡出土遺物



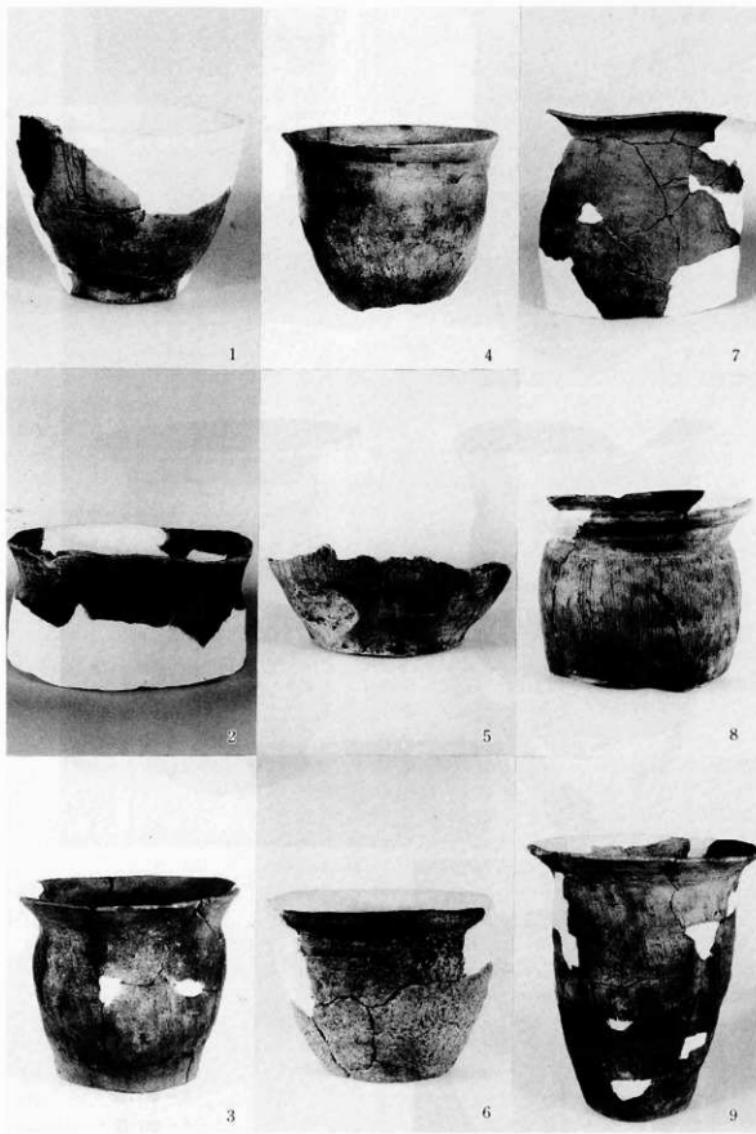
1—第16図5

2—同 6

3—第11図

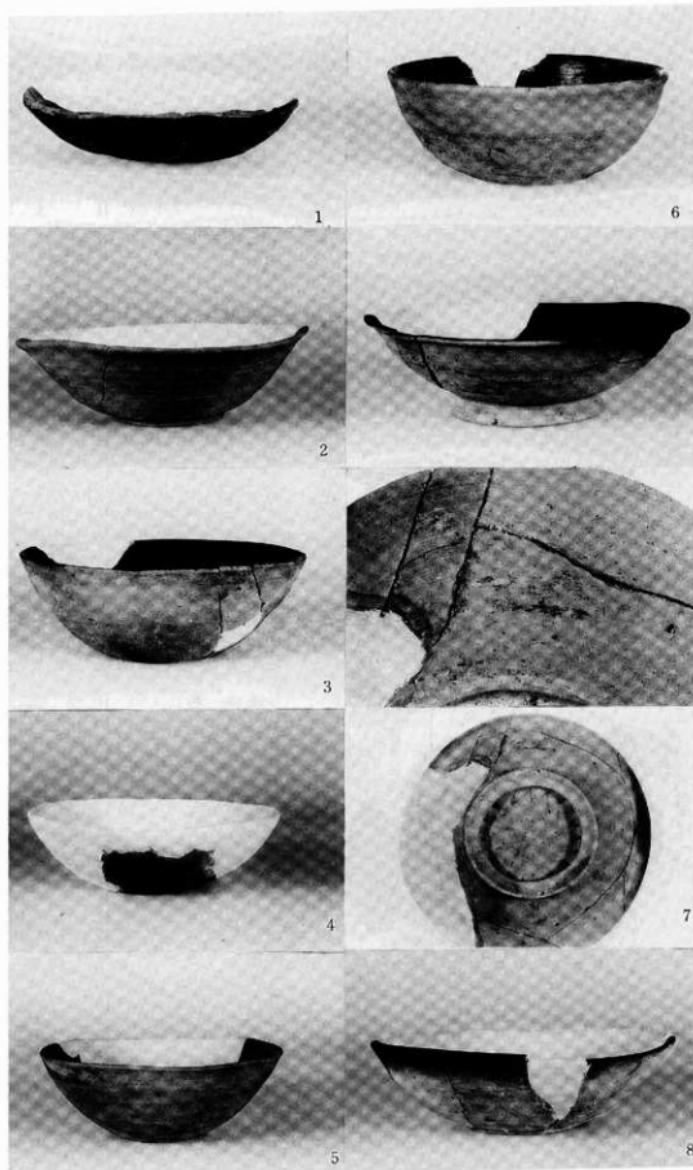
4—第24図1

5—第22図1



図版30 S I 104・105・106・108・201竪穴住居跡出土遺物

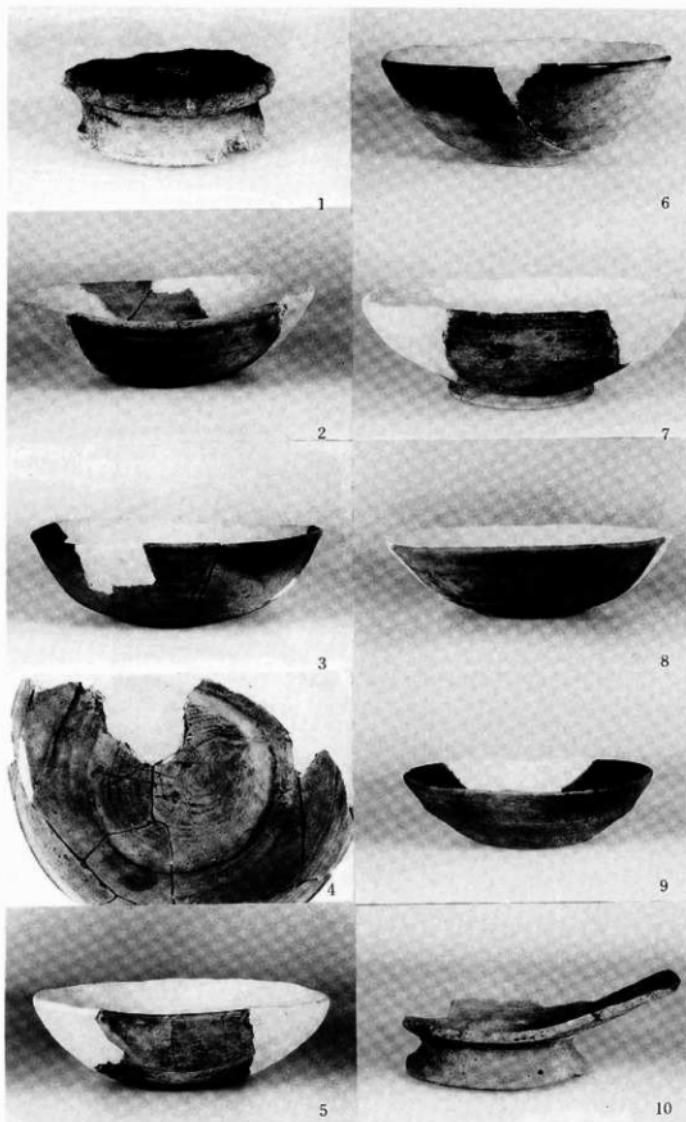
- |          |          |         |         |         |
|----------|----------|---------|---------|---------|
| 1—第16図10 | 2—第18図10 | 3—同 左11 | 4—同 左12 | 5—同 左13 |
| 6—第20図4  | 7—同 左7   | 8—第24図2 | 9—第22図2 |         |



圖版31 S I 105・106・107・202竪穴住居跡出土遺物

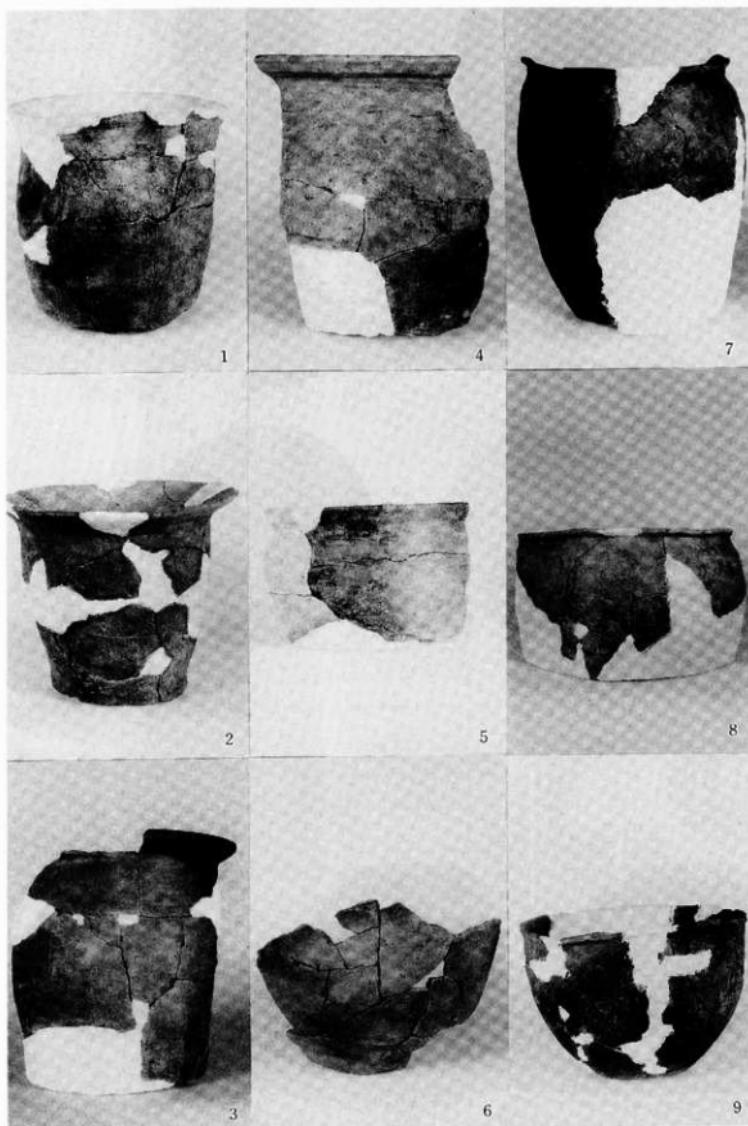
1—第18図8 2—第18図14 3—第20図1 4—第20図2

5—第20図3 6—第26図3 7—第26図4 8—第28図1



図版32 S 1 202堅穴住居跡・S X 109カマド状遺構出土遺物

- |         |         |         |          |           |
|---------|---------|---------|----------|-----------|
| 1—第28図2 | 2—第28図3 | 3—第30図1 | 4—同 左    | 5—第30図2   |
| 6—第30図3 | 7—第30図4 | 8—第30図6 | 9—第30図10 | 10—第30図11 |

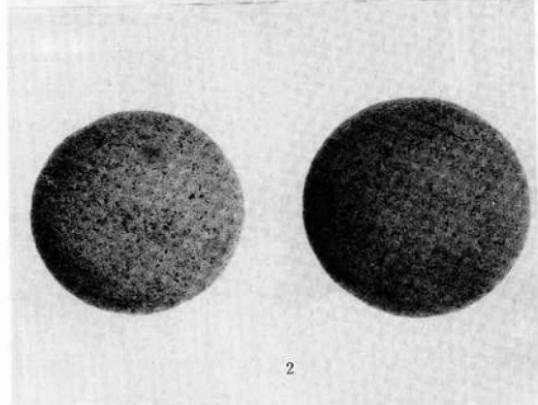


図版33 S 1 201竪穴住居跡・S X 109カマド状造構出土遺物

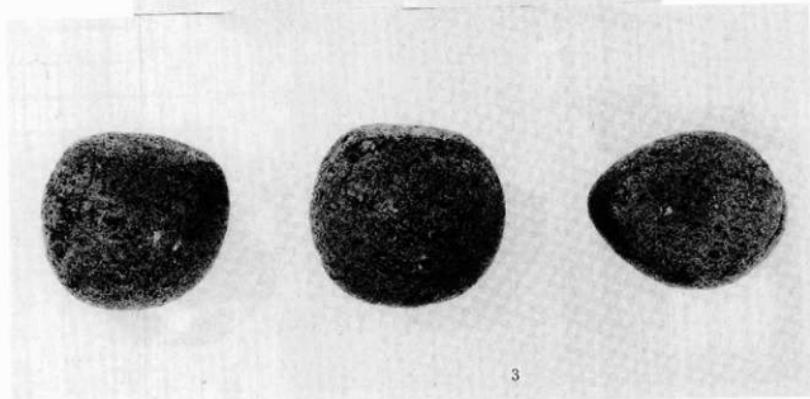
- |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1—第22図3  | 2—同 左4   | 3—第31図12 | 4—第31図13 | 5—第31図14 |
| 6—第31図15 | 7—第31図17 | 8—第31図18 | 9—第32図20 |          |



1



2



3

図版34 S I 102・107堅穴住居跡出土遺物

1—第7図4 2—第7図5 3—第26図6

# 報告書抄録

ふりがな	すぎのどういせきぐん						
書名	杉の堂遺跡群						
副書名	跨呂井二ツ塙地区の調査						
卷次							
シリーズ名	水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書						
シリーズ番号	第9集						
編著者名	伊藤博幸、千田政博						
編集機関	(財)水沢市文化振興財団 水沢市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒023 岩手県水沢市佐倉河字九藏田96-1 TEL 0197-22-4400						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
すぎのどういせき 杉の堂遺跡	みずわししんめいどう 水沢市神明町 2丁目61-2. 66	03204	NE27 -0100	39°8'10" 147°10'10"	1996.9.10 1996.11.30	1,874	宅地造成に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
杉の堂遺跡	集落跡	奈良 平安	竪穴住居跡 10棟 溝跡 2条 土壙 3基 屋外カマド 2基	土師器壺・高台壺 鉢・甕 須恵器壺・甕 須恵系土器壺			

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第9集

## 杉の堂遺跡群

—跡呂井二ツ壇地区の調査—

平成9年3月31日 発行

編集／発行 財團法人 水沢市文化振興財團  
水沢市埋蔵文化財調査センター

〒023 水沢市佐倉河字九歳田96-1  
電話 0197-22-4400  
FAX 0197-22-4600

印 刷 水沢印刷株式会社  
〒023 水沢市佐倉河字南桜沢57  
電話 0197-24-4413